

# I S 彼の日記帳

カーテンコール

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

織斑一夏の登場により、世界各国で行われた男性適性一斉調査……その調査により発見された世界で2人目の男性IS適性者、藤堂隆景。これは彼がIS学園で記した日記帳である。

# 目次

1	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
1	0										
56	51	46	42	36	32	28	21	17	11	7	1

2	1	1	1	帰	主	欠	3	1	1	1	1	1
0	9	8	7	ろ	人	け	度	6	5	4	3	2
				う	公	た	目					
					紹	男	の					
					介	子	敗					
						生	北					
						徒						
154	148	143	138	125	122	111	90	84	77	72	67	62

29	28	27	26	小話集	25	24	23	山田真耶の放課後	更識簪の手記	22	21	Nova России
248	243	238	232	219	213	207	201	195	189	182	176	160

34	33	壁は高く	スペインの魔女	小話集 その3	小話集 その2	更識刀奈の本心	『Nova』紹介	降り立つ新屋 後	降り立つ新屋 前	32	31	30
362	356	340	331	319	304	298	294	285	273	267	260	254

小話集 その4	39	文字ではなく、言葉で	38	37	36	35
世界最速の男	410		387	381	375	368
	419					



○月△日　なんとなく曇り

今日は何かと忙しい1日だった。

ことの始まりはおよそ1月半前。女性にしか動かせないことで有名な超ハイスペック宇宙服、インフィニット・ストラトス（以後IS）を起動させた世界初の男性（名前は忘れた）が登場した。

10年前の『白騎士事件』以降世間の注目と言っても、まるで過言ではないIS。それを男性が動かしたとあって、世界は一時騒然としたのだ。

……や、『した』ってのは語弊があるか。現在進行形で『している』ってのが正しい。まー中3の俺には難しい事なんぞ分からないが、とにかく色々大変なことらしいのだ。

そして。その彼の存在が驚くべきスピードで世に浸透し、次に各国のお偉いさん方が考えたことは。

掻い摘んで言えば、『1人居たなら他にも居るのでは?』って具合。いや、びつくりするほど捻りがない……捻ってどうしろと言えなくもないけど。

そして始まったのが男性のIS適性一斉調査。都心部から地方の順番に、方々でそんなことを大々的に行つたのだ。

当然世の男性諸君は奮って参加した。宇宙服つても実際は殆どロボットだし、ロボットは男のロマンだし。

何よりISを動かせれば、この女尊男卑の世の中でも大手を振って歩ける。……俺としては、あんまり気乗りしないんだが。

俺の地元はどつちかと言えば田舎の方だから、一斉調査の役員さん方が来たのは調査開始から1月半が経つた頃。高校受験の結果発表とか卒業準備とかで1番忙しい時に来た。迷惑極まりない。

同級生たちは凄く張り切っていたが、張り切つてどうにかなるのなら今頃世界は男性適性者だらけだろう。何せこの1月半の間、世界各国で調査が行われているにも拘らず、最初の1人を除けば成果は全くのゼロなのだから。

そんな内心での意見はともかく、肅々と調査は進む。調査つても、停止状態のISに



軽く触るっただけだし。騒ぎようもない。

相変わらず男性の適性者は発見されなかった。地団太踏んで悔しがってる奴も居たが、とにかくゼロ。

わざわざこんな所まで来た調査役員の方々も辟易していることだろう。調査期間はもう半月ほど残っているが、このままではその全てが無駄になるのだから。

そしてどうとう俺の番になった。最後尾でだらだらスマホを弄くっていたんだが、意外に早かったな。

役員のお姉さんが若干疲れた声音で、眼前のISに触るよう指示する。

これでも忙しいのだ。さっさと終わらせて進学の準備に移るとしよう。

そんなことを思いつつ、無造作に指先だけISの装甲板にちよんと触れさせた。

そしたら、IS——ラファール・リヴァイブに関する情報が、脳内に直接流れ込んできて。

気付いたら、それを身に纏っていて。

その僅か2分後には、TVの全チャンネルの画面が切り替わって臨時ニュースが放映されていた。

『世界で2人目の男性IS適性者、日本の〇〇県△△市で発見!!』

一体いつ撮られたのか、ラファールを纏う俺の姿がTV画面一杯に映る光景を見て俺は思った。

高校受験……頑張つて受かったのが無駄になりそうだと。

○月□日 取り敢えず曇り

家によく分からん連中が押し掛けてきた。

取材がどうかのマスコミ。

俺に通じない日本語を話す宗教関係の方々。

や、これはまだいい。ぶっちゃけ良くないけど、いい。

『君の身体を解剖研究させてくれ』とか、お前それこつちがはいつて言うのかと本気で思つてんのかつてぐらいストレートに要求してきた研究員にはビビった。

当たり前だが、全員追い返した。

○月☆日 とにかく曇り

IS学園つてところから通知が来た。

俺と言う存在を保護する意味合いも含め、学園へと入学させるうんぬんかんぬん。

小難しいことが長々書いてあったが、要約するとそう言うことらしい。

ご丁寧なことに制服まで送ってきていた。ついでに『必読』とか書かれた、電話帳と間違えて捨てたくなるサイズの参考書も。

正直勘弁して欲しい。俺、偏差値58なんだけど。

○月×日 気分的に曇り

いよいよIS学園へと赴く日となった。

なんか政府から初日より寮生活になるって聞かされたので、キャリアバックを携えて。

俺、荷物少ないオイ。私物殆ど纏めてこれか。

向こう行っても、日記は続けようと思う。どうせスマホでポチポチやってるだけだし

ね。

参考書を頭に詰め込むのは大変だった。俺の場合、元々の頭の出来と調査開始からかなり経ってて時間的余裕がなかったってダブルパンチで。

両親と兄の見送りを受け、いざ出発。

目指せ、I S 学園。

……正直、あんま行きたくないけどね。

4月〇日 晴れてるけど曇り その1

もしかして 来世と言うのが あるならば 私はきつと 貝になりたい

突然詩なんか詠んでみたが、冗談ではなくマジでそう思っている。

右を見ても、左を見ても女子だらけ。

正面少し離れた位置には1人だけ男子が居るけど、んなもん焼け石に水である。

幸い視線は殆ど前方の奴に向いている。教室入る時にチラツとだけ顔を見たが、まあびつくりするようなイケメン君だったし。

俺は……まあ悪くはないけど突出してる程でもない程度？ 中の上から上の下の間

？ 中の上の上ってか中の特上……意味分かんなくなってきた。

とにかく視線はほぼあつちが引き受けてくれてこそいるが、それでも女子率9割以上の空間に居るのは辛いものがある。この状況を楽しめる猛者が居ると言うのなら、是非変わって欲しい。俺のI S適性あげるから。

そうこうしている内に、教師と思しき女性が教室へと入ってきた。

第1印象は、小さい。

第2印象は、でかい。

ロリ巨乳と言う存在を初めて目にした瞬間だった。

女性の名は山田真耶。この1年1組の副担任らしい。

……しかしながら。生徒達はイケメン君が気になって仕方ないのか、山田先生の挨拶にも上の空。

微妙な空気で泣きそうになってるし。もう困り果てて、生徒に自己紹介させてお茶濁そうとしているし。

クラスメイト達も流石に憐れんだのか、素直に自己紹介を始めた。

五十音順に自己紹介は進み、とうとう件の男子生徒の番が回ってくる。

ちなみに今は『お』、俺は『と』なのでまだ少し先である。

だが彼はどうにも俺以上に居心地の悪さを感じているらしく、先生の声が届いていな

い様子。

このままでは恥をかかせてしまうので、消しゴムの欠片を弾き飛ばして助け船を出した。

……何故かとても痛がっている。よく見れば、間違えて画鋏を飛ばしてしまった。画鋏が後頭部に刺されれば、そりや痛いだろう。

何はともあれ自己紹介。

俺より先にＩＳを動かしした男子生徒の名は、織斑一夏と言うらしい。

どつかで聞いた名字だが、思い出せないので多分知り合いじゃないと思う。

しかしながら、明らかにこれは拷問だ。多数の女生徒を前に自己紹介とか死ぬる。

織斑も同意見なのか、期待の眼差しを浴びせられる中、しばし固まった後に早口で「以上です！」と強引にぶった切った。

直後、織斑はいつの間にか居た教員らしき女性に出席簿で脳天を引つ叩かれる。

あれは痛い。だつて殴った音がハンマーかなんかのそれだったし。

「お前は自己紹介もまともにできないのか」とか、あんな状況下で堂々と自己紹介できるような奴はそれだけで尊敬ものだと言うのに。

そしてどうやら、織斑と女性……ここの担任である織斑千冬先生は御家族らしい。彼は知らなかった扱いが。

てか、担任と生徒が同じクラスってあり得るのか？ 双子でさえクラス別々にされるのに。

考えても仕方ないので、考えないことにした。

そして思い出した。

織斑千冬と言えば、第1回モンド・グロツソの優勝者。

ブリュンヒルデの称号を持つ、云わば世界最強の御方ではないか。

挨拶の際は凄い人気だった。周りからの悲鳴にも似た歓声で、もう耳がキーンてした。

あと、時間が中途半端だったので俺の自己紹介はスキップされた。

心底ほっとした。



4月〇日 晴れてるけど曇り その2

休み時間になったので、織斑にでも話しかけようかと思つたら、クラスメイトの目付きがキツイポニテ少女に連行されてしまつていた。

お陰で女子の視線が俺に。おまけに休み時間なもんだから、他クラスからまでも。

最高に居心地の悪い10分間だった。

始業ベルが鳴ったことをあんなにも嬉しく思つたのなど、恐らく3代分前世まで遡つても初だ。

そして、授業。

これがむずい。超むずい。

正直、ついて行くのがやっとなんですけど。

しかもそれだって、あの鈍器レベルの参考書を25回読み直すと言う地獄の苦行に数えてもいいような行いのがあったからだ。

事前学習してなければ、とてもじゃないが全く理解できん。

な・の・に。

織斑ときたら、なんと参考書を古い電話帳と間違えて捨ててしまったと。

んなもんそりゃ、授業内容理解できないのも自明の理だって。

や、気持ちは分かるよ。

俺だって、何度アレを谷底に放り捨てようと思っただことか。

しかしまーそれを本気で実行に移すとは、彼も中々に侮れない。

そして担任のお言葉は、強烈な出席簿アタックからの「再発行するから1週間で覚えろ」とのこと。

優し過ぎて涙が出る。あの量をたった7日間であらうにかしろとか、いくら織斑の自業自得とは言え無茶振りにも程がある。俺だって調査日の都合で事前学習に充てられた時間は大分短かったが、それでも1ヶ月はあったし。けどまだ参考書の6割程度しか理解してないぞ。なのに7日でどうしろと。

同じ男子ってことで俺が見てやれとも振られたが、生憎俺だつて一杯一杯なのである。他人の面倒まで見られる余裕は無いのである。

だから素直に辞退させて貰った。織斑の方は、見捨てられたーみたいな顔してたけど。

最初の授業後半は、そんな織斑に端を発した織斑先生からのお説教的なことで終わった。

10分の休み時間がとても有難い。授業内容が難し過ぎて、休憩しないと頭がパンクしそうだ。

ついでに織斑に今度こそ話しかけようか、とか考えていたら、今度は彼さつきとは別の女子に絡まれてた。

こう、金髪巻き毛で、オーホホホとか笑いそうな感じの女子。最初のサムライガールのな子とはタイプが全く違う。

あれか、やはりモテる男は違うのか。俺も高望みはしないが、在学中に彼女くらい欲しいもんだ。

そんなことを思っていた訳だが、どうにも雲行きがおかしかった。織斑に話しかけたパツキン女子……名前分かんないから、お蝶夫人（仮）とでも呼んでおくことにする。

聞き耳を立てるまでもない大声で、織斑に色々と捲くし立てるお蝶夫人（仮）——名

前の辺りよく聞こえなかった——の姿は、何と云うか『今時の女子』だった。

女尊男卑。ISが世に台頭して以来、瞬く間に広がった風潮である。

ISは最強の兵器で。

ISは女性にしか操れなくて。

なので女性は偉い。

そんな連想ゲームみたいなノリで、この10年女性の権力は増大化の一途を辿っているのだ。

政治家だの会社の重役だのは9割方が女性。芸能人なんかだって、圧倒的に女性の方が多くなった。

それだけじゃない。町を歩いていけば、ただ女だと言うだけで見知らぬ男をパシリにする女性もよく見かける。

俺としてはそれも時代の流れだと思ってるが、それだけに向こうとしては織斑……ああ俺も含むのか、男性のIS適性者が気に食わないらしい。

前で行われている会話を聞くに、織斑は『代表候補生』って単語も知らないほど素人さんみたいだし。

だが奴さんだつてなるつもりで男性適性者になった訳じゃないのだから、多少の無知は笑って見逃してもいいと思う。

やがて始業のベルが鳴り、お蝶夫人（仮）——イギリスの代表候補生つてことだけ分かった——は、捨て台詞を残して席に戻つて行く。

俺は彼女の肩を怒らせた後姿から、多分またひと悶着あるんだろうなあ……と、そんなことを半ば他人事のように思つていた。

余り頼りになることのない俺の勘だが、今回ばかりは違つたらしい。

2 限目の授業が始まり、織斑先生が授業の前にクラス代表を決定すると言つて。

自薦他薦問わずとのことだったので、当然女生徒達は物珍しい男性適性者である織斑と、ついでに俺を推薦して。

それに対してさっきのお蝶夫人（仮）——やつと名前が判明、セシリア・オルコットと言ふらしい——が猛抗議。

クラス代表は学級一の実力者、つまり自分になるべきだとか。

私はこの極東の島国にサーカス見物しに来たわけじゃないとか、男なんぞに代表は任せられないとか。

まあ色々々と悪口のオンパレードを立て板に水で語つた訳だ。

愛国心や会つて間もない奴の罵詈雑言で傷付くプライドなんて胡麻粒ひとつ分も持ち合わせていない俺は、カツカする理由もないしそれをぼへつと聞いていたのだが。

どうにも織斑はその発言が気に食わなかつたらしく、言い返した。

そこからはもう売り言葉に買い言葉。終いには『決闘だ!』なんて時代錯誤なことまで言い出して。

最終的には織斑先生の取り成しで、一週間後にIS戦でカタをつけることになったのだ。

織斑と、オルコットと。

……何故か俺も。

4月〇日 晴れてるけど曇り その3

初日の授業が全て終わり、ようやく織斑と話すことができました。

けどそれよりも、何故彼等の決闘に俺まで参加しなければいけないのかが分かりかねます。

俺は基本的に面倒ごとが嫌いなのだ。

かつたるいことはしたくないのだ。将来的にはでかいマンションでも建てて家賃収入で悠々自適するのが夢なのだ。

なのに何故、どうして。

なんか織斑先生がついでとばかりに、俺を試合に組み込んでいた気もするけど。

……ま、決まっちゃったものはしやない。

今日一日見た織斑先生の性分からして、今更降ろしてくれなんて言っても聞く耳持たずだろうし。

だったらもう、適当に済ませてしまう方が得策だろう。

参考書を手にして頭から煙を出している織斑を眺めていると、山田先生が現れた。

寮の鍵を渡す為、俺達を探していたらしい。

織斑は初日から寮で寝泊りすることを聞かされていなかったらしく、荷物をどうすればいいか聞いていたが、その辺は担任が姉なのでどうにかなったらしい。

着替えと携帯の充電器だけとか、少々気配りには欠けているけど。

つかこの人、どうして教師なんかやってるんだろうか。俺が見るに、教えることはできそうだけど教師って仕事自体には絶対向いていない。

やって精々『教官』だろう、この人の場合。ハートマン軍曹的な。

そして衝撃の事実。寮は2人部屋なのに、俺と織斑は別室だった。

つまりはアレか、10代男子に同じく10代女子と寝泊りしろと言うのですか。

問題起きても知らないぞ、この場合起こすのは主に俺か織斑だけだ。

流石に世界最先端の学園とあって、寮の部屋ひとつ決めるのも膨大な書類作業が必要らしい。俺や織斑と言うイレギュラーを、初日から寮に迎えるだけで精一杯だったとの



こと。

1ヶ月か2ヶ月程度で部屋割り調整できるらしいから、それまで我慢して欲しいと頭を下げられた。当然下げたのは山田先生の方。

部屋番号は織斑が1025号室。俺は……1010号室？

10がふたつ、覚えやすくいい。ともあれ鍵も貰ったことだし、寮に向かうとする。

寮は高級ホテルみたいなどこだった。ここひとつ建てるだけでも、相当な費用がかかっているだろう。

……確か某A国のヤクザみたいな発言で、この学園建設だの何だのにかかっている費用は、全て日本が負担している筈だが……大丈夫なのだろうか、国家予算。

カラカラとキャリーバッグを引き、1010号室の前に立つ。

なんか向こうの方から織斑の悲鳴と木刀か何かでドアを貫く音が聞こえるが、特に気にしない。

ドアを軽く3度ノックして、数秒待つ。

返事は無かった。留守なのだろうか。

仕方ないので、部屋に入ることにした。

内装を見て最初に思ったのは、やはり高級ホテルみたいだと言うこと。

正直実家の部屋より格段に過ごし易そうだ。俺の部屋、エアコンも無いし。

奥のベッドに使つた形跡がある。荷解きもしてあつたし、多分あつちをこの部屋の住人が使用しているのだろう。

なので必然的に、手前のベッドに腰掛けた。

ふつかふかである。

15分もしない内に荷物を整理し、すぐに暇になつた。

夕食はもう少し先だし、軽く汗を流そうと思つた俺はシャワーを浴びることにして。髪を洗い身体を荒い、そして着替えを忘れたことに気付き。

取りに行こうと髪を拭きながら、衣服を仕舞つたばかりの箆筒に手をかけ。

それと同時に、部屋の扉が開かれた。

一瞬織斑が遊びに来たのかと思つたが、違つた。

入つてきたのは、1人の女生徒。

水色の髪に赤い瞳の、眼鏡をかけた気弱そうな女の子で。

彼女は俺の姿を見遣ると、驚いたのか目を見開いて。

——そのまま、声も上げずにパタリと倒れてしまつた。

4月〇日 晴れてるけど曇り その4

普通逆だと思ふ訳よ。

何がってそれ、こう言うのって女性のシャワー中に男が遭遇するもんじゃないのか、と。

現に後日織斑から、部屋に入ったらルームメイトがシャワー中だったと聞いたし。

ともかく男の半裸など誰得だって話だ。少なくとも俺は得しない。

そして、気まずい。

ルームメイトの少女は俺と目を合わせようともしなかった。

しかしだ、いくら鍵を掛けていなかったとは言えノックもせずに入ってきたのだから、基本彼女が悪い筈だ。

それに見られたのは俺だし、故に謝罪されるべきは俺だ。

……などと騒げるほど自分本位に生まれていれば、どれだけ楽だったことか。

女尊男卑だのの風潮に関係なく、こう言うのは全部男が悪いのである。

だから謝っておいた。形だけだけ。

ルームメイトの女子の名は、更識簪と言った。

ともあれ、女性と同室など面倒の塊なのである。

幸い彼女は部屋を空けていることが多いらしく、下手すれば消灯の少し前まで戻ってこないことも間々あるとのこと。

シャワーなんかの時間の取り決めをばばつと決め、夕食を摂って今日はさっさと寝ることにした。

4月△日 もう気分的に曇り

昨夜は散々だった。

同室の更識が夜遅くまでカタカタカタキーボード叩いてるもんだから、全然眠れなかった。

俺、ただでさえ寝付き悪いのに。

目の下に隈を作つて食堂に行つたら、織斑と会つた。

ついでに、昨日奴を連行して行つたサムライガールも。

どうもこいつ等幼馴染だったらしい。6年ぶりの再会なんだと。

しかしアレだ、このサムライガールどう見ても織斑に惚れているね。

態度があからさま過ぎる。これで隠しているつもりなら、この世に隠し事つて概念はなくなるぐらいに。

だが、なにゆえ織斑は気付かないのだろう。

鈍感にも程がある。

授業の前に、織斑先生が織斑に専用機が用意されるとの旨を伝えていた。

専用機。主に国家代表や代表候補生、後は企業の専属パイロットなんかには用意される

専用のIS。

この世にISは467機しか無いので、必然的に専用機持ちとはエリート中のエリートに限られる。

やつたな織斑、これで君もエリートの仲間入りだ。

ま、男性操縦者のデータ取りつてのが主な目的だろうけど。

ちなみに俺にはそんな話ありません。ISを2機も素人に回してられないのだ。

奴さんと違って、俺には心強い後ろ盾も無いことだし。

なんか織斑が決闘に備え特訓すると聞いたが、俺はパス。

だって道場で竹刀振り回してたし。IS関係ねー。

効率悪いのは嫌いなので、大人しく山田先生に放課後訓練機で練習見て貰った。

打鉄よりもラファールの方が乗り易いかな？ 反応もそこそこ早いし。

更識とは距離感を掴みかねている。

それと、今日もカタカタされた。

4月☆日 文句なしに曇り

今日はPICや量子化等について詳しく習った。

3日目で多少慣れてきたのか、授業中に頭痛が起きることは無くなった。

昼飯食っていたら、見知らぬ先輩がISについて教えてあげようかと聞いてきた。

よくよく見ればこの人、昨日あたり織斑に同じこと言っていた人だ。

さては断られたな。あるいはあの幼馴染にブロックされたか。

しかし、俺は既に山田先生にその辺りお願いしているので、如何に上級生でも必要な

い。

先輩より教師に聞いた方がいいに決まっている。

なので丁重にお断りした。

今日は更識と3回会話した。

お願いだからカタカタ止めて欲しい。

4月×日 雨降ってるけど曇りってことで

山田先生にI Sの操縦練習見て貰ってる合間に、織斑は何してるのかと思いい剣道場に行ってみた。

鬼のような顔したサムライガールに滅多打ちされてた。

何故あんなことをしているのだろうか。彼はMだったのだろうか。

ともかく、I Sの技量は知らんが根性はつくことだろう。

彼の命運を祈る。

今日は飛べるようになった。

姿勢制御や方向転換、急加速急停止なんかは筋がいいと褒められた。

でもライフル出すのに4秒かかる。仕舞うのは6秒かかった。

どうも武器の展開、収納が極端に苦手っぽい。イメージ力の問題らしいけど。イマイチ分からん。

更識は相変わらず人に懐かない小動物のようである。

なんかそろそろカタカタに慣れてきた。

4月◎日 誰がなんと言おうと曇り

明日はいよいよオルコットと織斑、そして何故か、何故か、何故か俺の決闘日である。大事なことから3回言った。

しかし、織斑の専用機とやらは何時になったら届くのだろう。

どんなのか俺も見てみたかったんだが。

どうしても武装の展開にかかる時間が削れません。

俺の適性がCってことを差し引いても、やはり武装の展開に向いていないらしい。

代わりにそこそこ自在に飛べるようになった。最初のフラフラ感が消えたし。

特にこう、クイックターンのようなものが上手くなった。カーブやターンが直角で曲がれ



る。

そして武器の扱のだが、あの優しい山田先生がフォローのしようも無いくらい酷い。

銃？ 命中率3割前後だけど何か。

剣？ や、俺ずぶの素人よ素人。

こうなったら当日、体当たりでもしてやろうかと思う。

更識って何時寝てるのだろうか。

カタカタの巻き添え食ってるだけの俺でさえ寝不足なのに、この1週間こんな調子でも普通に元気だ。

あと、この1週間での1番の成果。

カタカタ音がしても普通に眠れるようになった。

4月□日 曇っててなが悪い

あー、今日はほんつと疲れたわ。

なんか他人の喧嘩に巻き込まれる形で、IS戦なんかすることになって。

表向きはクラス代表決定戦だったか。や、別に何でもいいんだけど。

戦う順番は、まず俺と織斑。

そして勝った方がオルコットと……の、筈だったんだが。

奴の専用機到着が予定より随分遅れているらしく、アーリーナの使用時間もあるし急遽

予定変更。

先に俺が、オルコットと戦う羽目になってしまった。  
ふつーに惨敗した。

いやいやいや、相手はアレでも1国の代表候補生よ？

IS搭乗時間だけでも優に300時間超えてるような輩よ？

精々この1週間の合計で15時間程度しか動かしてない、しかも適性Cの俺とは格が違  
うって。

技量、経験、適性、機体性能全部負けてる相手にどうやって勝てと。

寧ろこの場合、向こうがずぶの素人に苦戦しちゃいけないような立場だろうに。  
10分でも粘った俺を褒めて欲しいくらいだよ。

んで、織斑はと言うと。

俺とオルコットの戦闘直後に届いた専用機……名前は確か、百式だか白式だか。  
そいつに乗って、果敢にオルコットに向かって行って。

奴さんの使ってた特殊兵装のビット兵器を破壊し、油断したところをズドン。  
……と、やられそうになったところで運良く機体が一次移行した。  
ファーストシフト

そして格好良い台詞を叫んで、ビームみたいな剣で格好良く突撃して。

剣を振る直前で、格好悪くシールドエネルギーが尽きた。

彼は芸人向きだと思われる。

戻って来たら戻って来たで、織斑先生とサムライガールにボロクソ言われてた。そも、代表候補生相手にトーシロがあそこまで奮戦したんだから、褒め称えて然るべきじゃないかと思う。

可哀想に。あんな幼馴染と姉、俺は欲しくない。

部屋に戻ったら、珍しく更識の方から話しかけてきた。

お疲れ様と、残念だったねの短いふた言。

俺の知人は攻撃的でなくて良かった。

ここ数日は普通に熟睡している。

カタカタ音が子守唄か何かに聞こえてきた。

4月●日 普通に曇り

クラス代表だが、オルコットが辞退した結果織斑が就任することになった。

どうも先日の戦いで彼のことを見直した……と言うか、あの様子だと惚れ込んだらしい。サムライガールと揉めてたし。

俺は茶を飲みながら見物してた。困り顔の織斑がこつち見てたけど、女の戦いに割つ

て入るなんて御免だ。下手すれば命が無い。

それに俺が何もしなくても、どうせ織斑先生が止めるだろうし。事実止めてたし。ま、ともかくこれで今回の一件は丸く収まったって事で。

.....。

この時の俺は知らなかった。

今回の敗北。そして、その次の敗北。

俺の記録に刻まれたその2敗。それが、俺の未来を大きく歪めてしまったことを。

4月4日 曇ってるぞコンチクショー

授業の難しさにも大分馴染んできた。

サムライガールとお蝶夫人が織斑を挟んで喧嘩する姿も、最早クラスの名物である。俺はと言うと、相も変わらず浮きも沈みもしない生活を送っている。

寝不足も解消されたし、ルームメイトの更識との距離感もそれなりに掴めて来た。要するにアレだ。人馴れしてない子猫か何かに接する気持ちを忘れずに、だ。

接近し過ぎると逃げる。かと言って人馴れしてないから、構わなければ近付いてこない。

その辺を踏まえれば、そこそこ円滑な関係を築けるタイプだった。

問題も一通り解決してきたところで、ひとつ気になることが。

……更識つて、何で毎晩毎晩カカタキーボード叩いてるんだろうか。

4月\$日 世紀末的に曇り

最近、どうにも視線を感じる。

それも織斑に向けられているような、興味と好奇の入り混じったようなものではなく、薄らと殺気さえ感じるような冷たい視線だ。

無論俺は人様に言えないような悪事など働いたことはないし、恨みを買うようなこともしていない。

だがその視線は決して消えることがなく、気付けばついて回っていた。恐ろしいが、相談できる相手がいない。

まさかここに来て交友関係の狭さが災いするとは、迂闊だった。

いつ襲われてもいいように、ジャンプを懐に仕込んでおく。

更識が不思議そうな目で俺を見ていたが、こつちも真剣なのである。

## 4月※日 絶妙な曇り

日曜日。更識が整備室でISの組み上げをしようと言うので、暇だから付いて行った。しかし……まさかあの連日のカタカタは、ISのプログラム作成だったとは。

おまけに彼女、日本の代表候補生だったらしい。

お蝶夫人にボコられた際の記憶が蘇る。めっちゃ強かった。

大人しそうな面して、あれと同等クラスの強さなのだろうか。

今度から更識さんと呼んでおこう。

それにしても、1度に3つも4つもキーボードを操る姿は、最早人外のそれと言っていい。

なんか良く分からんが、自身の専用機が完成予定日未定の状態になってしまったらしく、それで自らの手で組み上げるべく日夜カタカタ三昧とのこと。

いや、立派立派。流石は代表候補生。

そう言ったら、何故か少し不機嫌になった。何故？

整備室の帰りに、また例の視線をキャッチした。

いい加減どうにかしたいものである。



4月▽日 星空が綺麗な曇り

本日は、食堂を一時借り切って織斑のクラス代表就任パーティが開かれた。

何故だか他クラスの生徒も多分に混じっている気がしたが、俺は細かいことなど気にしない。

散々飲み食いして、満足した帰り道。

迷子を見つけたので、事務室まで連れて行った。

名前は一応聞いていたのだが……よく覚えていない。ファンだかフォンだかだった気がする。

更識が根を詰め気味だったので、休憩させる為ホットミルクを差し入れた。  
努力家の相手は、中々に大変である。

□月×日 KU・MO・RI

先日の迷子は転校生だったらしい。しかも中国の代表候補生だとか。だがこれで3人目だ。流石にもう驚きも薄れている。

しかしアレだ、本当に名前なんだっけ。

フオン？ ファン？ フェン？ フィン？ 発音が微妙すぎてはつきりしないぞ。

聞き返すのもアレだったから、ミニ子とでも呼んでおく。ミニサイズだし。

馬鹿にしてんのか、と脛を蹴られまくった。

放課後はアリーナを借りたIS訓練。

スイスイ飛べるのが楽しい。武装は相変わらずだが、機動方面に関してはお墨付き。  
瞬間加速とサークル・ロンドって奴ができるようになった。

ここまで出来ることと出来ないことがはつきり分かれている奴は逆に珍しいと、山田先生が言っていた。

部屋に戻ったら、郵便物が届いていた。

広告ハガキが数枚。態々IS学園まで送ってくるほどの物でもないだろうに。

その中に、なぜか結婚相談所のハガキが混じっていた。

俺まだ15歳なんだけど。高1なんだけど。

それともアレか。今の内からこう言うことやっておかないと、将来結婚できないぞってことか。

大きなお世話だと思い、ハガキはゴミ箱に捨てた。

□月▽日 cloudy

1ヶ月も通っていれば、そろそろ教師毎の授業傾向というものも分かってくる。

山田先生の授業はとても分かりやすい。ひとつひとつの事柄に対し懇切丁寧で、時折

解説も入るからすんなり頭の中へと知識が入ってくる。

だが、織斑先生はいただけない。あの人基本的に自分が話すことを相手が理解しているのを前提で授業進めるから、時々ついて行けないのだ。

と言うか、元々教鞭を取るのに向かない性格だと思う。カリスマで誤魔化してはいるが、ぶつちやけ教える事が下手なタイプだ。

まああの人も名が売れすぎて、自由に生きることさえ難儀しているのだろう。『世界最強』なんて称号、一般人として生きるには邪魔物でしかないし。

なので今日も今日とて、織斑先生の授業で分からなかったことを山田先生に教えてもらった。

いつそ何ひとつさっぱり分からなければ諦めもつくんだが、中途半端に理解できるのだから仕方ない。

偏差値58なんて微妙な頭してる俺のバカ。馬鹿じゃないけどバカ。

射撃武器の使用状況理論についての理解は深まったが、考えてみれば俺は武装のオープン・クロース展開収納が死ぬほど苦手だった。

だが山田先生いわく、機動制御に関してはちよつとしたものらしい。

もういいんだよ、こちとらモンド・グロツソの機動部門『ヴァルキリー』目指すことにしたんだから。

男なのに、ヴァルキリー。自分で言つてて訳分らない。  
自主的居残りも終わったことで、部屋に戻る。

するとそこには一人の女子生徒が。

一瞬更識かと思つたが、違う。髪と目の色こそ一緒だったが――

(ここから先は意味のない記号と文字列が続いていた)

□月◎日 ハレテルヨ

ボク ノ ナマエ ハ トウドウ タカカゲ デス。

ナリタイ ショクギョウ ハ ワカメ ヲ ツクルヒト デス。

タテナシサマ ノ メイレイ デス。

サラシキ ニ テ ヲ ダシテ ハ イケナイノ デス。

イワレナクトモ ナニ モ スルキ ガ ナイトイツテモ シンジテ モラエマセ

ンデシタ。

□月♪日 頭痛のする曇り

昨日のことがさっぱり思い出せない。部屋に戻った後、気付けば夜が明けていた。更識が言うに、ロボットのような動きをしていたらしい。

何故か知らないが、更識の半径60センチ以内に近付けなくなった。

それ以上身体が近くなると、拒否反応を起こすのだ。

理由は不明だ。近々カウンセリングを受けようと思う。

あと、織斑とミニ子が喧嘩していた。

どうにも昔交わした約束を、織斑が勘違いして覚えていたのが原因らしい。

らしいってのは、大声で喧嘩した内容から察しただけだからだ。脛を蹴られて以来苦手なので、ミニ子の間合いには入らないようにしている。

痣がまだ消えていないのだ。

近々、クラス対抗戦が開かれる。

優勝クラスには、デザートのフリーパスが与えられるらしい。

偏食家の俺にとってデザートは貴重な栄養源だから、織斑には是非優勝して貰わねば。

4組代表の更識はまだ専用機が未完成なので出場しないから、敵は2組のミニ子だけ

だ。

代表候補生相手じゃあ勝ち目は薄いが、頑張ってくれ。

□月四日 曇りだY O—!

利き腕がアレなので、日記をつけ辛くてしょうがない。

それならいつそ今日は休むべきだと思うのだが、俺の日記スピリッツがそいつを許してくれなかった。

今日は待ちに待ったクラス対抗戦。出るのは織斑だけど。

ともかくにも、どうせだから楽しく見物しようと観客席でポップコーン食いながら試合を見物と洒落込む。

ちなみに更識も誘ったんだが、I Sの件が忙しいからと断られた。

なのでちよこつとだけ寂しかったりする。考えてみたら俺、更識以外に気軽に誘える



友達居なかった。

その更識さえ、実のところ友達と言えるか微妙だし。

あれ……俺の友達、少な過ぎ？

少しだけ、泣きたくなった。

そして試合。

織斑の最初の相手はなんといきなりミニ子で、こりやご愁傷様と思ったりした。

何せ相手は代表候補生。その強さは半端じゃない。

あいつが以前お蝶婦人と最低限試合に見える形で戦えたのも、偏に機体性能と向こうの油断からだだったし。

しかし今回、相手は怒ってる。徹底的にぶちのめすつもりでいる。

だが蓋を開けてみれば、奴さん何とか踏ん張ってた。

ミニ子の使うIS——例によって名前忘れた——が使う『見えぬ砲撃』に苦しませられつつ、致命傷は紙一重で避けていた。

更にそれだけでなく、一瞬の隙を突いて瞬時<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速を使い、ミニ子の懐に潜り込んで見せた。

……正直加速が甘かったけど、『入り』と『抜き』で少しふらついていたし。俺は機動制御に関しては、今や学年一うるさいのだ。

織斑が、ミニ子に一撃入れようとした。

だがそんな超オイシイ所で、突然の邪魔が入る。

よく分からない、異形の黒いIS。

そいつが何をしてどうなったのか、詳しいことを俺は知らない。

奴が侵入した際に崩れた、天井の一部。

その瓦礫が観客席に落ちてきて、俺に向かって降って来た。

そして気付けば医務室に。

幸い怪我はさほど重くなく、精々利き腕にひびが入ったぐらいだった。

見舞いに織斑達と、少し時間をずらして更識が来てくれたのは少し嬉しかった。

やっぱり俺、友達少ない。

□月凸日 清々しき曇り

引越しである。

や、ようやく書類が纏まったらしく、寮の部屋換えなのだ。

……織斑のこのルームメイトだけね。

何やらまたも転校生が来るとかのことで、その関係か俺の方はもうしばらく見送りらしい。

更識もいつまでも男と同室じゃあ落ち着けないだろうに、どうにかしてくれ。

彼女かなり神経質なんだぞ。冗談も選ばないといけないぐらいに。

と、散々文句を言いたかったが、言っても仕方ないので諦める。

決して寮長が織斑先生だからではない。ああ決して。

拗ねて廊下を歩いていたら、サムライガールが織斑へと凛々しく宣言していた。

「今度の学年別トーナメントで、私が優勝したら……付き合つて貰うー」とのこと。

盗み聞きでなかったら、その潔さにきつと拍手とかしてた。

そしてその後半部分を数人の女生徒が聞いてたみたいだけど、俺は気にしない。

どうして更識の60センチ以内に近寄れないか考えてみた。

考えたら何故か寒気がしたので、思考を停止した。

△月■日 曇り以外認めない

厄日だ。

ああ、そうだとも。今日が厄日でなかったら、いつが厄日だと言えるだろうか。骨にひびが入って無茶のできなかつた利き腕が、先日ようやく完治して。

寧ろ前より頑丈になったような気がする、上機嫌でいたのも束の間。朝のSHRで、またも転校生が来た。それも2人。

分散させろよとか色々思ったりしたが、そんなのよりも重要なことは。転校生の1人が、『男』だったことだった。

名前……名前はなんだったか。確か神聖ブリタニア帝国第98代皇帝と、同じ名前だった気がする。でもその皇帝の名さえ思い出せない、本末転倒だ。

まあとにかく、例によってテキトーに渾名を……オスカルでいいや、うん。男に対して男装の麗人の名前付けるのもアレかと思ったが、何故かぴったりな気がする。

教室内は最早音響兵器の実験場と化していたが、いざという時の為耳栓持参な俺には関係なし。その辺要領の悪い織斑は、もろに食らってたけど。

……いや、オスカルのことなんてどーでもいいのだ。オスカルって呼んだら青い顔してたけど、とにかくどーでもいいのだ。

あんちくしょうめ。あの世紀末的に俺の恨みを買った超弩級ミニ子より更にミニマムなあんの腐れ銀髪年齢詐称疑惑満載な外見小学生め！

そうだ奴だ！ ラウラ・ボーデヴィツヒ！ 下手すれば友達の名前さえ覚えぬ俺——更識って下の名前なんだっけ？——だが、憎き奴の名前だけは絶対に、そうさ絶対に忘れん！！

あんにやろう、自己紹介を終えたと思えば俺の前までやってきて、いきなり張り手……：……ならまだ許せたが、途中でスクリーンブローに切り替えて思いつ切り人のことをぶん殴りやがった。

それもよりによって、虫歯の治療中だった右頬の方を！ 虫歯が折れて地獄の苦し

だったぞマジ。

しかも殴つた理由が『人違い』だ！俺のことを織斑だと勘違いしたらしく、なんぞ訳の分からんことを喋つてた。奥歯の痛みでロクに聞いてなかったけど。

そして山田先生に、「あの……人違いですよ？」と教えられて謝るかと思いきや、まさかのなかったことにして織斑のとこまで行つて、テイク２始めやがったのさ！マジ許せん、せめてごめんの一言でもあれば歯医者の治療代で水に流したと言うのに！もう怒つた。少なくとも２ヶ月は恨んでやる。

その旨を更識に話したら、あのミニマムシルバーがやつた暴挙より、俺が怒つてることの方に驚いていたが。

……まあ、普段からスマホカチカチ弄くつてるだけで他に興味ないよーみたいなキャラだし、そう思うのも自然だけど。

折れた奥歯の治療費は、かなり高くついた。

絶対ボーデヴィツヒに請求してやる。

△月♪日 煮え滾る曇り

折れた歯の影響で、かなり頬の晴れが酷い。

しかしながら、純粹に心配してくれたのなど更識に織斑、あと転校生のオスカルくらいなもんだった。

ミニ子の奴なんか爆笑してた。他人の不幸を笑いやがって。

こいつめ、いつそISの訓練中に撃墜してしまえ。

何かは知らないが、休み時間に廊下で織斑先生とボーデヴィツヒが言い争いしていた。

会話の内容はよく聞こえなかったが、結局はあのちんまいのが先生を怒らせて睨まれてたが。

いいぞもつとやれ。いつそ織斑先生の出席簿攻撃16連射を喰らって沈むがいい。

歯が痛くて眠れない。

医務室で痛み止めを処方して貰おう。

△月×日 曇りだが俺の所為ではない

お蝶夫人とミニ子が、ISでミニママシルバーと喧嘩した挙句に機体をぶっ壊して、

医務室で包帯ぐるぐる巻きになっていた。

もしかして俺の所為か？ 訓練中に撃墜されてしまえとか呪詛を放った俺の所為か？

や、んな訳ない。

しかしあのミニマムは一体どこを目指しているのか。学年の実力者倒してスケ番でも狙っているのか？

ともあれ、あの2人は今度の学年別トーナメントに出られなくなってしまった。

優勝候補の一角だったと言うのに、勿体無い話だ。

それと、トーナメントが急遽タッグ制になったとのことで、織斑とオスカルが女子に詰め寄られていた。

俺の方も何人か来たが、何せ専用機を持っている訳でも何でもないので小数だったけど。

なんとなく怖かったので、いつそトーナメント当日の抽選でパートナーを決めることにした。

付け焼刃の連携とかする位なら、もうぶつつけとかでいいと思う。

ようやく腫れが収まった。これで夜もしっかり寝られる。



△月△日 はいはい曇り曇り

学年別タッグトーナメントである。

どうしてこうなった。

タッグパートナーを決めなかった俺は、当然ながら当日の抽選で試合の組み合わせと一緒に誰と組むかが自動的に決まる。

そして、そのトーナメント表を目の前にして、今更ながらに酷く後悔していた。

何故ならば、1回戦第一試合の欄に『藤堂隆景&ラウラ・ボーデヴィツヒ』と表示されていなかった。

なんてこつたい。よりもよってあのミニマムシルバー——若しくはチンク姉、ある

いは薔薇水晶、もういつそ雪華綺晶、少々苦しいが柳生ちゃんでも可——と組む羽目になつてしまふとは。神も仏もあつたもんじやない。

ついでに対戦相手は織斑&オスカルペア。これ絶対偶然じやないだろ。

お蝶夫人とミニ子が出場不可になり、更識は専用機未完成による出場辞退。つまりボーデヴィツヒ以外にトーナメント出てる専用機持ちは、こいつ等だけ。最初に当たるとか試合表の操作疑惑が。

だとしたら俺は関係ない。今からでもペアを変えてくれ。

更識辺りに拝み倒して、訓練機でもいいから一緒に出てくれと頼んでおけばよかつたとか。

後悔先に立たずとの言葉を噛み締め、俺はしばらく呆然としていた。

そして試合。

ボーデヴィツヒに「お前は邪魔だから隅で丸くなつていろ」とかほざかれた。

どうにも奴さん、織斑をボコボコにしたくしようがないらしい。

苛ついたが我慢した。そして歯の治療費を請求する。

無視された。

試合開始と同時に、織斑とボーデヴィツヒが殺気立つて攻撃し始めた。

なので俺は背中に向けてるミニマムシルバーに誤射でもしてやろうかと銃を向けたが、

オスカルに邪魔されて失敗。

邪魔するな、と仕方なくオスカル相手に戦うも、そう言えばこいつフランスの代表候補生だった。

2分でボコられた。ヒュパヒュパ武装換えるの止めて欲しい、展開の苦手な俺には絶対出来ないテクニクだから。

前のお蝶夫人の時といい、いい加減代表候補生に苦手意識できそう。

んで、試合結果だが……一応、俺達の負けってことになるのか？

2対1で劣勢になったミニナムが、オスカルの持つてたえげつないパイルバンカーにやられそうになって。

そしたら、ISが変形したのだ。

いやもう寧ろ変身って言っても良かった。織斑先生に変身してた。

結局あれが何だったのかはよく分からん……ほえーってしてる間に倒されてたし。

トーナメントはそんなこともあってか、1回戦だけやって中止となるらしい。

女生徒達がやけに落ち込んでいたが、何かあったのだろうか。

今日は浴場が使えたらしいが、俺は眠かったのでパス。

さっとシャワーだけ浴びて、横にならせてもらった。

……カタカタの音が、耳に心地いい。

△月▼日 歯の治療が終わった

間違つて天気のカレンダーに書き出しを始めてしまった。曇りだ曇り。

さて、本日はサプライズだった。オスカルが女だったのだ。

オスカルオスカル言っておいてなんだが、想像だにしていなかった。

つうか、昨日織斑とオスカル一緒に浴場使つてなかったか。

クラスメイト達もそれに気付いたのか、口々に騒ぎ出す。

そして、教室の扉が吹き飛んだ。

出てきたのは、怒り心頭な顔でISを展開するミニ子。身体も機体も治つたらしい。

織斑もこれで死んだか、などと他人事のように思っていたら、あいつが初撃をよけた

所為で俺が吹っ飛ばされた。

全身が痛い。

対して織斑の奴だが、あわやと言うところでボーデヴィツヒに助けられていた。

あのパツギン、助けるなら纏めて助けやがれ。

どうやら奴さんも織斑に惚れたクチらしい、嫁発言してたし。色々おかしいけど。

てかアレだ、悔い改めたのなら俺に謝れ。そして歯の治療代を払え。

あと、ついでに医務室に運んでくれ。誰でもいいから。

幸い大きな怪我は無かった。

×月凸日 曇りのち曇り

休日は暇なので、最近では基本的に更識のIS組み立てを手伝っている。と言っても、大したことはやってないが。

なんか今日は駆動系を重点的に進めるとかで、現在我々はがらんとした第4アリーナに。

平日の放課後なんかは女生徒達で賑わっているのだが、休日は静かなものである。ちなみに俺は学園の打鉄を装着済み。こいつのセッティングを少し弄って、飛行データを取るとのこと。

残念ながら、まだ更識の専用機『打鉄式』は飛行テストもできないような有様だし。飛ぶのが俺なのは、その方が平行してデータが取れるから。

機体制御をマニュアル操作にして、アリーナ内を更識の要求通りに飛び回る。

難易度こそ高くなるが、マニュアルの方がより細やかな機体制御がこなせていい。

てか、オートだと姿勢が変に固定されて逆にやり辛かったりするのだ。

飛ぶのが上手い奴は大体そんな感じだと、更識も言っていた。

データ取りの後は整備室で延々プログラムを打ち込んだり、IS本体のメンテしたりと、あつと言う間に1日が過ぎた。

経過の方だが、この調子なら2学期の前半には何とかかなりそうだとのこと。

こつちとしてもISの組み立ては勉強になるし、何より退屈しのぎに最適だ。

こういうのを、WIN-WINの関係と呼ぶのだろうか。

更識はまだもう少しやって行くと言うので、1人寮へと戻る帰り道。

凄まじい寒気を感じたので振り返ると、そこには見知らぬ女生徒が居た。

……知らない筈なんだが、何故か物凄く見覚えがある気がする。

リボンの色からして2年生のその人は、こつちをじつと見ていた。

髪の色や顔かたちの骨格なんかが更識に似てるんだが……もしや姉妹？　そういえ

ば前、姉がいると聞いたような。

更識姉？はしばし俺を射るようを見た後。

すつと俺の脇を通り抜け、去って行った。

何だったのだろう。何故かあの人を見たらひどく寒気がしたんだけど。

……それと。

すれ違いざまに呟いた「ありがとう」って、どういう意味だ？

×月◎日 やつぱり曇り

なんか知らないが、急に更識の半径60センチ以内に近付けるようになった。

カウンセリングを受けても全くの原因不明だったんだが、いきなりどうしたのか。

昨日会った人について、更識に聞いてみた。

特徴を告げると、やつぱり姉で間違いないらしい。

ただ、お姉さんの話をする時、更識が複雑そうな顔をしていたことに気付く。

どうにも何か事情があるようだ。聞かないけどね。

俺は織斑と違ってお節焼きはしないのだ。彼女のIS組み立て手伝ってるのも、知識向上に役立つからって理由が半分だし。



なので詳しいことは聞かず、今日も組み立てを手伝った。遠くはなく、近過ぎもしない。俺達の距離感つてのは、これが一番丁度いいと思う。

×月■日 奥さん、曇りです

そう言えばそろそろ臨海学校のを忘れていた。

なので今日は、それに備えた買い物である。

更識も誘ったんだが、そもそも彼女臨海学校休むらしい。

IS完成に向け、期間中は整備室に籠もるのだと。

まあそれはそれで彼女らしいので、別にいいんだが。

……ホント、こう言う買い物とかに誘えるのが更識だけって……俺って何なの。

少なくとも『ぼ』で始まって『ち』で終わり、間に『つ』を挟んだひらがな3文字の存在ではないと信じたい。

でもさー、俺さー、人見知りって言うか人の好き嫌い激しいんだよねー。

波長の合う合わないっての？ 実は織斑辺りとか、かなり合わないっぽいんだよなー。

サムライガールは真面目過ぎて合わないし。

お蝶夫人は性格的に合わないし。

ミニ子はそうだな……無いな、うん。

オスカルは合わないことも無いが、あれの場合大概の人間に向こうが合わせられるっただけだし。

ボーデヴィツヒ？　ぜ・っ・た・い・あ・わ・な・い!!

あつれ……もしかして俺、ホントにぼ○ち？

いやいやいやいや、でも更識とは合うしなー。あれは中々に合うんだよなー。

シンク口率にして78パーぐらい？　距離感間違えなきや一生友達やつてけるレベル

？

んなことを考えつつ買い物してたら、変なものを見付けた。

一緒に買い物する織斑とオスカル。

そしてその後をこそこそつけ回している、ミニ子とお蝶夫人。そしてボーデヴィツヒ。

何やってるんだろう、あいつ等。

丁度ばったり織斑先生と山田先生に会ったので、一応報告しておいた。

数分後に遠くから悲鳴が聞こえてきたが、俺は知りません。

買い物を終えてぶらぶら見てたら、ちよつと前に人気だったロボットアニメの食玩を見かけた。

確か更識が以前見ていたのを思い出し、土産に幾つか買って行く。

その夜。

シークレットが当たったらしく、上機嫌に食玩を机に飾る更識の姿があった。

×月○日 青々とした曇り

ただ今臨海学校初日を満喫中。だが、衝撃の事実が発覚している。

……やべえ、つまらん。

もういいよ。認めるよ。俺には更識しか、まともな友達がいないよ。

その更識がここに来てないんだよ。要するに、気軽に話せる奴が1人もいない状態で臨海学校来てるんだよ。

どんな地獄だこれ。勘弁してくれ。

いつそ俺も臨海学校休んで、更識と一緒に学校でIS組み立てやっつてれば良かった。

絶対その方が楽しいって。最近結構会話も弾むようになってきたし。

今からでも帰れないだろうか。タイミングよく目の前を通りかかった山田先生に聞いてみる。

あ、そうですか無理ですか。じゃあいいです、諦めます。

海岸に佇みながら、海を眺めて時間潰すことにした。

けれども5分でダウン。考えてみたら海来るの初めてで、しかも俺って潮風苦手らしい。

具合悪くなりそうだったので、夕食と入浴を済ませたらすぐに寝ようとした。

ちなみに旅館の部屋だが、何故か山田先生と同室だ。

……この人寝言が多いんだけど。気になって寝れやしない。

そして更識の毎晩奏でるキーボードのカタカタ音が、正直恋しい。ここのところあれが睡眠導入剤代わりになっていたと言うのに。

×月♪日 曇りつてことにしといて

全然眠れなかった。流石に慣れないベッドと、山田先生のオールナイト寝言のダブルパンチはキツイ。

今夜は先生が寝付いたら、口をタオルか何かで塞いでおこう。

さあ、ともあれ今日はISパッケージの稼動試験だ。

更識と一緒にマシンセッティングだのやってた影響か、最近ISいじるのが得意になってきた。

俺達のグループは『ラファール・リヴァイブ』か。ここのところ打鉄がメインだったからな、なんか新鮮だ。

俺が黙々と作業していたら、後ろの方で色々専用機持ちどもが喚ぐ声が聞こえてきた。

きつと十中八九面倒ごとだから気にしないでおく。こちとらISのセッティングしながらスマホ叩いてるから忙しいのだ。

どっちかに絞ればいいとか周りは思っているだろうが、俺とスマホは一心同体。

これがないと日記付けられないんだから、仕方ない。

俺の日記スピリッツ舐めるな。

そしていざ稼動試験を開始しようとしたら、なんか中止になった。

しかも旅館に戻って自室待機してるとのこと。許可なく外に出たら拘束とか、どんだけ。

まー文句言ってもしょうがないので、大人しく部屋へと戻る。

やることがない。外はなんだか慌しいし、山田先生居ないから実質一人で超ヒマ。もうホントに暇でアレだったから、更識にメールする。

組立作業と平行して返信してきた。彼女やっぱり只者じゃないと思う。

×月凸日 やる気を削がれるような曇り

やっと学園に帰れる、この臨海学校は大したこともしてないのにやたら気疲れしたよ。

だが結局のところ、昨日は一体何があったのか。

極秘事項らしく、知っているのは教員方と専用機持ちの連中だけ。

ついでに織斑が、見知らぬ金髪の女性と話していた。

頬にキスとかされてる。またフラグでも立てたか、懲りない奴だ。

怒り心頭な女生徒5人に殺されても知らないぞ。

帰りの道中は、ずっとバスの中で眠っていた。

……にしても参ったな。更識へのお土産に、今回の稼動試験データでも持って行きかけたんだが。

いやしかし、中止になったし。しょうがない。

×月凹日 雨

今日から夏休みに入る。

学園長に呼び出された。俺に話があるらしい。

訝しげに思いながらも個室へ招かれ、話と云うのを聞く。

……少々、厄介な事態になってしまった。



## 13

◎月♪日 蒸し暑い曇り

世間的には夏休みな今日この頃。

俺はと言うと、実家にも帰らずアリーナでIS操縦を行っていた。

それもこれも何もかも、夏休み初日に学園長から呼び出されたことの内容が原因だ。

詳細は面倒だから割愛するが、夏休み最終週に織斑とIS戦をすることになってしまった。

面倒臭いことこの上ない。何でこんなことになったんだ、全く。

と、文句タラタラなのだが決まったことだし。

そこで、今のままで勝てる見込みが殆ど無いからこうして特訓中なのだ。

何せ相手は、ISに触れた時期こそ同じだが、すぐに専用機を得て密度の高い訓練を優先的に行う権利を持ち、つい最近専用機が二次移行セカンドシフトまでしたらしい織斑。

対して俺はと言えば、機体制御こそ一角の物だが、肝心の武装の扱いがまるで駄目。その上使用機体は量産機のラファールで、それも学園の訓練機だから最適化ファイティングも一次移行ファーストシフトもできないように初期状態で固定されている。

機体性能は完全に劣り、ISの稼働率を高める上で必要な適性値も負け。トドメに稼働率を底上げできる最適化もさせて貰えないとあつては、純粋な経験値……即ち搭乗時間間で上回るしかない。

要するに、俺自身の技量で他の全てを補わなければならぬのだ。無茶なこと言つてくれる。

機動関連なら負けはしないが、肝心の武装関連がダメダメなのに。

最近思つたのだが、俺は武器の展開だけでなく、武器の扱いそのものが致命的に不得手だ。

ライフルの命中率は2割、撃てば当たるようなマシンガンでも4割。

近接武器はまだマシではあるが、それでも要は素人剣法に過ぎないもの。

いつそ拳の強度を上げ、殴つた方がいいのではないかと考える。

それなら展開必要ないし。

機体セッティングの面で、更識に意見を仰いでみた。

彼女の説明は、山田先生並に分かり易くて助かる。

◎月四日 まーまー曇り

やべえ、独学じゃもうどうにもならん。

武装展開への所要時間が3秒切らない状態が延々続けば、流石にそれぐらい気付く。

しかし教授願おうにも山田先生は居ないし……居たとしても忙しいし。

どうしたもんか。まさかコーチが降って沸く訳も無い。

そんなことを思っていたら、突然後ろから話しかけられた。

振り向けば、そこに居たのは何時ぞやの更識（姉）だった。

どうも学園長辺りから、俺と織斑の試合の話を聞いたらしい。

詳しい事情の方は知らないっぽいが……まあ、話すほどのことでもないし。

だが、まさか更識の姉がこの学園の生徒会長だったとは。

これからは紛らわしいので、会長さんと呼ぼう。

会長さんが俺にISの稽古をつけてくれることとなった。

なんでも「お礼」とのことらしいが、俺この人に何かしただろうか？

記憶に無い。

そして訓練だが、2重の意味でヤバイ。

こう、キツさ的な意味でヤバイのと、自主練とは比べ物にならない効率の良さがヤバイ。

流石生徒会長、スパルタだが少なくとも織斑先生より教師に向いている。

ニコニコしながら平気でギリギリできそうなことをピンポイントで要求してくる辺り、Sだけど。

アリーナ使用時間が終わる頃には、疲労の余り肩で息をしていた。

だが少なくとも、実のある1日だった。

それに夏休みの間、時間ができたら訓練を見てくれるとのこと。

とてもありがたい。死ねるけどありがたい。

更識に、会長さんから訓練を見て貰ったと話す。

何故か気まずい空気になって、修正が大変だった。

◎月▽日 レッツ曇り

会長さんから武器の扱いを習う。

機動制御と違つてこつちにはこれっぱかしの才能も無い俺だが、少なくとも多少はマシになつた。

山田先生でさえ匙を投げて「藤堂君は飛行技術を磨きましよう！　ね、それがいいですつて！」と言われた俺の射撃センスを矯正するとは……すごい人だなー。

アレだな、これは。更識が姉のことを敬遠している理由の一部が分かつた気がする。優秀過ぎるんだよこの人。こんなのが身内だつたらそりやあ肩身も狭くなるつて。

分かりやすい欠点とか、そういうのがまるで無い万能タイプの天才つてのは、他よりも特に際立つて見えるからな。会長さんはまさにそれだ。

更識の場合は、姉つて色眼鏡もかかつてるから現実よりも更にその格差が大きく見えているのだろう。自分じゃこの人に遠く及ばない、とか何とか。

ちなみに、一応確認はしておいたが。

うん。ISの整備技術とか、そつち方面は更識が上だつた。明らかに。

つーかもう、俺からすれば更識だつて十分以上な天才なんだけど。

彼女ダウンーだし。自己評価低そうだもんな。

◎月□日 曇って曇ってさあ大変

『螺旋軌道スパイラル・イグニッション・ブースト瞬時加速』というものを覚えた。

本来直進以外は肉体に多大な負荷をかける瞬時イグニッション・ブースト加速だが、正確な螺旋軌道においてはその負荷が分散されるらしい。

だがオート制御ではできない動きのうえ、フルマニュアル制御で1センチ単位の正確な軌道維持が肝要な難易度の高い技術……とは、会長さんの受け売り。

まあ、そもそも瞬時加速だって決して簡単な技術じゃないし。

俺は初めてやったらすぐにできたけど。

とにかくこの戦闘動作バトル・スタンスをモノにすれば、相手方の射撃をかわしつつ一気に関合いが詰

められる。

更にそれだけではなく、螺旋軌道で接近されるといのは見ている側の距離感を狂わせる効果があるとのこと。

織斑は確か、機体のフェーズが上がって射撃兵装が追加されていた筈。

これで遠距離対策はバッチリだー、と思いたい。

荷電粒子砲喰らうなんて真っ平御免だ、以前更識の専用機に搭載予定の奴を見せて貰ったから知ってるんだぞ。

アレは喰らいたくない。だってビームだし。

そして武器の扱いだが、7:3で近接武器の方が『まだ』見込みがあるらしい。

なので今日は、第2世代用の近接武器を片っ端から試すことにした。

剣。前からそれなりに使っているが、どうもしっくり来ない。

槍。取り回しが難しい、長尺な武器は向いてないようだ。

槌。装甲を爆散させる威力のハンマーを借りたが、鈍い。俺の技術では重い武器を当てられない。

爪。つまりクロー系の武器だが、威力不足。扱いは今迄で一番マシだったけど、考えてみれば同系統の武器を織斑も積んでいた。

鞭……鞭!?　なんでこんなもんがIS兵装に含まれてるの?　炭素単結晶繊維で構

成された恐ろしい威力の品だったが、操りきれずに自分が喰らったので却下。

その他一通り試すも、どれもこれもピンと来ない。

ただの武器では駄目なのだ。織斑の専用機である『白式』は近接攻撃特化のIS、近接戦を挑むのなら相応の武器が要る。

俺でも扱えて、高威力。そんなもんどこに——あ。

あつた。そう言えばひとつだけ。

アレならいけるかも知れない。会長さんに聞いてみたところ、学園内に在庫もあつた。

活路が見えてきたような気がする。や、まだ俺が断然不利なんだけど。

方針が決まってより一層スパルタとなった会長さんのしごきに耐えつつ、今日も今日とて流したくもない汗を流すのである。

◎月凸日 今日曇り、明日もきつと曇り

ラファール・リヴァイブのセッティングは、機動系に特化した俺に合わせエネルギーシールド密度を下げてその分の空き容量をスラスターに——



間違えた。こっちは日記だった、最近スマホでセッティング表も作っているからたまに間違える。

機体の仕上がりは、まあまあ順調。俺の訓練データを更識に見て貰い、借りたらファールを整備室に運んであーでもないこーでもないと論議したりして。

学園の訓練機だからオスカルのカスタム機みたく派手な改造はできないが、内部を少しくらい弄つても大丈夫だろう。そうでもして機体との相性を良くしないと、俺の適性値じゃ精々稼働率60%までしか出せない。

IS適性とは、要するに人間がISにどれだけ適応できるかの目安。適性値が低い場合、機体毎にいちいち面倒な調整作業をしなければならぬし、形態変化フォーム・シフトに至るまでの時間も変わってくる。

だからこそ、こうして緻密なセッティングを行っている訳だが。

見られている。

断言しよう、見られている。

更識は全く気付いていないが、ドアの隙間から会長さんが俺達の様子をじーつと見ている。

すっげー羨ましそうに見られているのだが、俺にどうしろと言うのだろうか。

俺としては、会長さんや更識の姉妹関係に深くつつこむ気はないのだ。確かに更識は

友達だが、だからってなんにでも首を突っ込むのはどうかと思う。

多分俺が織斑に対し『合わない』と感じるのは、この辺の考え方が大きく異なるからだろう。

そして、八つ当たりだろうか。

今日の訓練は、いつにも増してスパルタだった。

◎月↓日　いい加減ネタが尽きてきた、だが曇り

夏風邪を引いてぶっ倒れた。

流石に毎日毎日ハードワークのオーバーワークが過ぎたらしい。

夏休みに入って2週間ちよい、ロクに休んでもいなかっただから当然つちや当然なんだが。

ついでに言えば、結構な筋肉痛も患っている。

体力が低下している状態ということもあり、ベッドから起き上がることも満足にできやしない。

いつに無くぐったりした様子の俺を見て、更識にも心配をかけてしまった。

……こんな時になんだが、いつまで俺達は同室なのか。

オスカルが女だと発覚してすぐ、織斑は部屋換えで1人なった筈なんだが。

俺の所為で専用機完成を遅らせるのは忍びなかったので、おろおろしている更識を送り出す。

今現在の進み具合なら、上手くすれば2学期の頭に最初の稼動試験やれそうなのだから、さっさと行って来いと。

まあ、風邪うつすのも悪かったし、半ば無理矢理追い出した。

しかし夏風邪は馬鹿しか引かないと聞いたが、となると俺は馬鹿なのだろうか。

勘弁して欲しい。確かに利口な方だと思ったことは無いが、だからって馬鹿でもないと思いたい。

これでも偏差値58なんだぞ。あ、違う、最近60に上がったんだ。

IS学園のレベル高い授業に食らいついた結果だな。うむ。

ベッドで横になり、くてつとしていたら。

やけにこそそそした様子で、会長さんがやってきた。

妹の更識と気ままずい仲らしいってのに、その妹と部屋が同じの俺のところに来るとは。

人を食ったような性格の人だが……や、なんだかんだで優しい御仁だとは理解してるけど。

更識のことになると少々暴走したり、ダメな人になったりもするが。多分この人と更識の中が拗れているのも、大方会長さんがあいつを心配するあまり余計なことでも言っただろう。

難儀な人だなーと思っていたら、急に――

◎月々日 曇れ

先日はアレだった。日記が途中で終わってしまった。

病人は大人しくしていなさいと、会長さんにスマホを取り上げられてしまったのだ。

あの後更識が戻って来るまで看病して貰ったお陰で、身体の方は大分回復した。

しっかりと回復させておけという御達しで、今日も訓練は休みだが。

……しかし。あの更識が戻ってくることを鋭敏に察知していたけど、どうやっているのだろうか。

まさか彼女、忍者か何かじゃなからうか。手裏剣似合いそうだしね。

自分が居た痕跡を髪の毛一本残さない辺り、どちらかと言えば暗殺者かストーリーカーの類かも知れないが。

だがまあ、2人分のお粥を食べるのは少し辛かった。

会長さんが作ってくれたのを食べたんだが、それを知らない更識も作ってくれたのだ。

けれど折角の品。死んでも残す訳には行かなかったので、掻き込むように平らげた。

これも男の甲斐性だ。女が作ってくれた物は絶対残すなどは、兄貴の言葉である。

や、味は旨かった。姉妹揃って作ったのが卵粥だったところに、少し笑った。

味付けはそれぞれ微妙に違ったけど。

◎月#日 苦く喪も離り

2日間休んだので、完全回復なのである。

むしろずっとアレだった筋肉痛とか治ったから、前よりも良くなったかも知れない。

特殊無反動旋回。

瞬間加速。

クロス・グリッド・ターン  
三次元躍動旋回。

サイクル・ロンド  
円状制御飛翔。

ゼロリアクト・ターン  
無反動旋回。

シューター・フロー。

そして螺旋軌道瞬時加速。  
スパイラル・イグニッション・ブースト

他にも合わせ技とか小技がチマチマあるけど、取り敢えず俺がこなせる主な戦闘動作バトル・スタンスや機動技術はこんなもんである。

I S に搭乘して高々数ヶ月でこれだけの機動を、しかも専用の調整をしておらず高い稼働率を引き出し難い訓練機でこなせる輩はそう居ないと、会長さんから褒められてしまった。

まあ武器の扱いがお粗末な分、これぐらいは出来なければ。

そしてその武器の方だが、何とかライフルもマシンガンも最低限武器として扱えるレベルには持ってこれた。

織斑の戦闘ログを見る限り、遠距離武器の技術は現在の俺以下。

遠距離戦ならこれで俺に分が出来ると言うわけだ。

しかし。奴さんは俺では使用不可能な機動技術を、ひとつだけ持っている。

ダブルケージ・ニッポン  
二段階加速。第2形態へと移行したことにより、奴の専用機『白式』はウイングスラ

スターを4機積んだ高機動型の機体へと仕上がった。

そのスラストスターを段階的に使うことで、通常の瞬時加速よりも更に速い加速が可能になっていく訳だ。

つまり、ラファール・リヴァイブでは逆立ちしても使えない。こればかりは機体性能の差で、仕方ない。

……それとアメリカの『フアング・クエイク』同様、スペック上は個別連続瞬時加速リボルバー・イグニッション・ブーストも使用可能だが、織斑の技量じゃ無理。

アメリカ代表のイーリス・コーリングだつて成功率は5割に満たないらしい特A難度の大技だから、まず不可能。懸念から外して良し。

まあ要するに何が言いたいかと言えば、スピードは向こうが上だから、どうあつても近接戦は避けられないってことな。

その為にも早い所、『コレ』の扱いに慣れなければ。

俺のネットワークである展開速度の遅さも、既に解決策は投じてある。彼女には、一応感謝しておこう。

と言つても、彼女からすれば勝つて欲しいのは織斑の方か。皮肉なものだ。

だが、俺としても今回ばかりは負けられない。クラス代表決定戦と学年別対抗タッグトーナメントではどちらも呆気なく敗退したが、今度はそうは行かない。



それに……手を貸してくれた更識と会長さんにも、顔向けできないし。

織斑との試合まで、あと2週間。それまでに、俺の技量を持って行ける所まで持って行く。

◎月?日 曇り(・:・:・)

今日は会長さん忙しいらしく、居ないので1人訓練中。

あの人に課せられたメニューはこなしてるから、特に問題は無い。

銃火器を展開し、移動する標的に動きながら的当てる。

命中率は……3割前後か。動きながらじゃやはりこんなもんだ。

だが、3割。5発撃てば1発か2発は確実に当たる数字。

それなら十分な牽制になり、相手方もおいそれと直線的に間合いを詰めては来られない。

これが他の相手だったらもつと近接寄りの間合い調整が必要だが、遠距離用の武器が燃費の悪い荷電粒子砲ひとつなうえ、2回か3回斬られれば確実にシールドエネルギーが尽きる必殺の剣を持っている織斑相手なら、中距離を保つのが最も安全。

そうやってチマチマシールドを削れば、奴の戦闘ログから考えられる行動パターンとして絶対に強引な接近をしてくる。

そして、その接近こそが俺の狙い。

強引に間合いを詰めることは、確かに相手方に動揺を与え近接戦における絶対的な隙を作る。

が、予め予測さえしておけばなんてこと無い。無理矢理な接近は攻撃への初動が遅れ、カウンターを当てる絶好の機会となる。

機動技術に比べ余りにも戦闘技術がおぎなりの俺は、そうでもしなければ確実に当てられない。

『コレ』だつて決して乱発できる武器じゃないし、外せば隙が出来るのはこつちだ。とにかく、必要なのは試合運びの組み立て。

相手をどう動かし、自分がどう動き、如何に思い通りの状況を作るか。

機体性能と戦闘技術、適性数値で劣る俺が勝つ為には、そうするしかない。

勝率は……恐らく4：6。

俺と奴じゃあマシンポテンシャルが違い過ぎる。これ以上差を詰めるのは、当日までにはほぼ不可能だった。

◎月☆日 雲量9

明後日だ。

思えば夏休み初日からこの1ヶ月近く、柄にも無く頑張ったと思う。

その努力が報われるか無駄に終わるかは、全て2日後にかかっている。

更識や会長さんには感謝だ。

2人の協力が無ければ、俺の勝率は今よりずっと低かったことだろう。

技術的な面では、会長さんに。

機体整備やセッティングの面では、更識に。

本当にありがたい助っ人だった。

彼女等には、今度お礼をしなければ。

何がいいだろうか。女性に対して何かするのは初めてだから、よく分からない。

……ああ、そうだ。あの2人が仲直りできるよう、協力するのも悪くないかも知れな

い。

余り他人の家の事情に干渉するのはよろしくないが、どちらも俺の数少ない友人だ。友人同士の仲違いを解すのに、遠慮するのも却っておかしいだろう。考えて、おこう。

◎月〇日 雨の降りそうな曇り

明日に備え、今日は軽いウォームアップだけに留めておく。

コンディションは悪くない、寧ろ良い。機体の方も、当日使うラファールの整備は更識印のお墨付きだ。

やることも特に無くなったから、織斑の所にも挨拶に行こうかと思う。

戦う前に探りを入れる。それによって、明日の戦いに際する最終的な試合構成の調整をおこう。

学生寮の1025号室前。

そこで誰かが話をしていた。

片方は、織斑。

そしてもう片方は……会長さん？

……。

2人の会話の内容は、聞かなかったことにしておく。

ただ、ひとつだけ……

——少し、傷付いた。

◎月\*日 雨

負けた。

勝てなかった。

想定外なスラスタの破損とか、武装の故障とか。

理由を並べ立てれば幾らか挙げられるが。

とにかく、勝てなかった。

手伝ってくれた更識には、悪いことをした。

折角自分の専用機を組み立てる時間を削ってまで、助力してくれたと言うのに。

会長さんにも、申し訳ない。

あの人はあの人なりに、俺を助けようとしてくれたんだろう。

知ってしまったんだろう。俺と織斑が、どうして試合などすることになったのか。

何時知ったのかは憶測だが、多分試合の前日。

だから織斑に、あんなことを言っていたんだと思う。

ともあれ、これでお仕舞い。

ベストを尽くした結果だ、悔いは無い……と言えば嘘になるが、仕方ない。

日記をつけるのも、これで最後になる。

俺はもう、IS学園には居られないから。

## 3度目の敗北

夏休み最後の週。

俺こと織斑一夏は、カタパルトの前で白式を起動し、調整確認をしていた。

「よし、問題ないな」

駆動、武装共に問題点無し。

臨海学校の時に追加された新武装『雪羅』も、ばっちり調整されている。

戦う相手は、俺と同じ世界でたった2人しか居ない男性IS適性者の片割れ。

名前を藤堂隆景。

俺があいつに抱いている印象は、まず無口。

殆ど何かを喋ると言うことをせず、クラスメイトと会話している姿も数回しか見たこ



とが無い。

いつも退屈そうに携帯を弄っている所為か、中々話しかけ辛かったりもする。表情が変わることも余り無いから、皆あいつが何を考えているのか分からないらしい。

あと、たぶん人の名前を覚えてない。セシリアやシャルを変な渾名でそれぞれ一回ずつ呼ぶのを聞いた。

とにかくそれぐらいだ。考えてみれば、よくあいつのことを知らない。

そもそもどうして、今回俺とあいつが戦うことになったのかも分からないし。

千冬姉にも聞いたが、上の事情らしく千冬姉も詳しいことを知らされていないらしい。

『では、両者アリーナの指定位置について下さい』

スピーカーから聞こえてきた山田先生の声に、俺は思考を中断する。

そしてアリーナに出るべく、カタパルトに脚部を固定した。

「一夏、勝つて来い」

「普段通りにやれば大丈夫ですわ、一夏さん」

「そうよ！ もし負けたら承知しないんだから」

「頑張つてね、一夏」

「私の嫁ならば、あの程度の輩に負ける筈など無い」

箒が、セシリアが、鈴が、シャルが、ラウラが。

夏休みだと言うのにこうして集まり、俺を応援してくれる。

俺は振り返り、叫ぶように言った。

「ああ！ 行って来る！」

アリーナに出ると、そこには既に藤堂が居た。

使用している機体は、ラファール・リヴァイブ。シャルの専用機とは異なりカスタムなどはされていない、学園の訓練機。

「……………」

藤堂と目が合った。

眼精疲労というやつを患っているらしく、こうした試合の時も外さない薄いブルーの色眼鏡越しにあるあいつの目は、何時にも増して無感情に見えた。

お互い正々堂々やろうぜ。

俺は、そんなことを言おうとして。

「とうど——」

「……………戦う前に、言っておく」

珍しく声を発したあいつに、遮られた。

「? なんだ?」

「あの人から……………何か言われているだろう」

淡々とした口調。

そんなあいつの言葉に、俺は昨日の出来事を思い出す。

部屋に戻ろうとして、ドアノブに手をかけたのと同時に。

突然俺に話しかけてきた、名前も知らない先輩。

『織斑一夏君よね？ 突然だけど、明日の試合負けてあげて欲しいの』

『え？ な、なんなんですか、いきなり』

『不躰なのは分かっているわ。けどお願い、明日は勝たないで』

その人はそう言って、それ以上何を言うことも無く去って行った。

あの言葉がどういう意味なのか、俺は知らない。

藤堂は静かに首を振ると。

普段は携帯の画面にしか向けられていない目を、まっすぐ俺に向けて言った。

「あれは、忘れろ。全力で来い」

大きな声ではなかった。

強い口調でもなかった。

けど……その言葉には、何にも勝る意思のようなものが籠っていて。

「……ああ。もちろんそのつもりだぜ」

だから俺は。そう返した。

『3』

試合開始までの、カウントダウンが始まる。

俺は右手に雪片を展開し、構えた。

『2』

「……レッドパレット」

静かに武器の名を呟き、藤堂が左手にアサルトライフルを展開する。  
更に。

『I』

「スコープニウス」

右手に握る、連射性に富んだマシンガン。

どちらの銃も、山田先生が愛用していた。その基本性能の高さは、良く知っている。そしてどうやらこいつは、射撃主体の戦闘をするらしい。

考えてみれば、藤堂が戦う姿を俺は殆ど見たことが無い。

セシリアとの戦いでも、タッグトーナメントの時も。

特に何かをすることも無く、負けていた。

だから、だろう。

俺は。

心のどこかで、藤堂を格下だと侮って。

完全に、油断していた。

『……始め！』

「はあああああつ!!」

試合開始のブザー。

それと同時に、俺は正面から飛び出す。

雪片を振りかぶり、『零落白夜』で斬りかかろうとして。

「……」

ガリイツ……！

しかし、左腕のシールドにいなされた。シールドの表面を削りながらも、雪片の刃は

届かない。

そして曲を描くような機動で、藤堂は俺の背後に回りこむ。  
瞬間。

ガガガガガッ！

「うわっ!？」

俺は無防備な背中に、銃弾を浴びせかけられた。

「こら一夏！ 何をやっている!？」

管制室のモニター越しに試合を見ていた筈が、髪を逆立てて喚く。



箒の他にも、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、そして千冬と真耶が試合を観戦している。

「馬鹿みたいに正面から突っ込むからよ。相変わらずね、一夏の奴」

呆れながら溜息を吐く鈴に、セシリアが続く。

「ですが、向こうの回避のタイミングも完璧でしたわ。わたくしと戦った時は、あのような機動は……」

「ふむ。確かに動きが滑らかだな、その辺どうだシャルロット」

頷くラウラが、シャルロットの方を見る。

この中で彼と一番最近に戦った彼女は、真剣な面持ちでモニターを見ていた。

「藤堂君は弱くないよ。僕の戦法とは相性が良かったからすぐに倒せたけど、多分機動制御技術は代表候補生クラスだと思う」

「だが、はつきり言って武器の扱いが下手だな。動きの良さで誤魔化しているが、命中

率が低すぎる」

「それに見なさい。確かに動きはいいけど、一夏もちよつとずつ反応できるようになつてゐるわ」

談義を広げる少女達。

そこから少し離れた位置で試合を観戦していた千冬が、画面から目を離すことなく隣の真耶に話しかける。

「……違うな、これは。どうにも織斑の奴、上手く藤堂の策に嵌まったと見える」

「はい。これは織斑君の動きが良くなつていふより、藤堂君が意図的に調整しているんだと思います。機動技術に明確な差が無ければ、到底出来ないことですよ……」

「機体性能と適性値による稼働率の差を埋める為の、か。中々に頭がいい」

隆景のコーチを1学期の初めから務めていた真耶は、ここ1ヶ月の間に彼がどれだけ成長しているのかを、正確に感じ取っていた。

不得手だった武器の扱いも、戦闘に耐えうる程度には上達させている。

そして彼の得意とする機動技術は、想像以上の伸びを見せていた。

『くっ……近付けねえ!』

『それでもない』

「先程から全く思い通りの間合いを取れない一夏が、歯噛みするようにそう叫んだ刹那。」

螺旋の軌道で異常加速した隆景に、勢い良く蹴り飛ばされた。

「なっ!?」 今の、まさか螺旋軌道スパイラル・イグニッション・ブリスト瞬間加速!?

「難度Aの国家代表クラス機動技術……アレが出来るIS乗りなんて、世界に50人も居ませんのに……!」

自分達でさえ未修得の技術を易々と披露した彼の姿に、代表候補生達が一様に驚愕する。

千冬はほうと感心を見せ、面白そうに笑う。

「やるじゃないか。どうです、山田先生。自慢の生徒のデキは」

「藤堂君なら出来て当然ですよ！ 彼は飛ぶことにかけては天才です！ 未はモンド・グロツソ機動部門のヴァルキリーだって夢じゃありません！」

入学当初から手塩にかけてコーチした隆景のことは、真耶にとって密かな自慢だった。

瞬時インフィニションブースト加速をたつた一度見せただけですぐに習得した、まごうこと無き天才。無口で何を考えているか分からないところは在るが、それでも訓練に対してひたむきな姿勢は十二分に感じ取れていた。

「きゃー！ 凄い凄い、織斑先生今の動き見ました!? 乱回転軌道での射撃姿勢確保、素晴らしいです！」

「分かったから静かにして下さい。教師が生徒の最良をするのは問題です」

興奮冷めやらぬ、と言った具合の真耶を、千冬が宥める。

そんな中で、試合が動こうとしていた。

「ん、のっ…」

「ん」

まるでシャルを相手にしているみたいだと、俺は思った。

ラビッド・スイッチ

高速切り替えこそ使っては来ないが、マシンガンとライフルでこちらの動きを牽制し、巧みに間合いを一定のものに保っている。

だが、それにも慣れてきた。

試合開始時より、藤堂の姿がはっきりと見える。

俺があいつの軌道を捉えてきている。その証拠だ。

もうエネルギーの残量が多くない。

雪羅は3発撃ったが、掠めさえもしなかった。

この距離じゃあ、俺に勝ち目は無い。

……だったら！

「うおおおっ!!」

ウイングスラスターをフル稼働させ、一気に加速する。

白式が第2形態へと移行したことにより使えるようになった、『二段階加速』ダブルイグニッション。

こいつで無理矢理間合いを詰めて、片をつける!

どうしても詰めることの出来なかつた距離が、一瞬でゼロになる。

貫つた。藤堂は武装の展開が遅い、名前を呼ばなければ3秒近くかかるほどに。

あいつが持っている武器は、どちらも銃火器。この距離では、邪魔者にしかない。防御も回避も今からじゃ遅い、俺の方が速い!

そう思った。その筈だった。

「ああ。それを待っていた」

藤堂が取った行動は、防御でも回避でもなかつた。

両手に持っていた武器を、捨てた。

そして。本来無改造ブレイクのラファールには装備されていない筈のシールドが備えられた左腕部装甲を、こちらに突き出す。

その姿は、以前共に戦った頼もしいパートナーのそれを彷彿とさせて。

「ツ!? まさ、か——」

「そのまさか、だ」

バンツ!

シールドの表面がパージされ、中に潜んでいた武装が姿を現す。

それはあのラウラをも仕留めた、第2世代最強クラスの攻撃力を備えた近接武装。

六九口径6連装。パイルバンカー『グレイスケール灰色の鱗殻』。

通称——

「し、シールド・ヒアース盾殺しだと!?!」

モニターを見る者達の中で最も早く反応したのは、その武装にトラウマのあるラウラだった。

次いで全員の目が、シャルロットへと向けられる。

「え、なに!? 何で皆僕を見るの、僕は何もしてないよ!？」

「む……すまん、つい」

「あの武装と言えば、真っ先にシャルロットさんを連想しますので……」

何も悪いことをしていないのに、微妙な空気の原因にされたシャルロットは涙目である。

と、同時にモニターの向こうで、一夏がパイルバンカーの一撃を食らった。

『ぐああっ!?!』

凄まじい衝撃に耐えかね、大きく体制を崩す。

だが、これで終わりではない。ここに居る誰もが知るように、シールド・ピアースは



その威力もさることながら連射式なのだ。

動くことの出来ない一夏に、隆景がとどめの追撃を添えようとする。

誰もが彼の敗北を、そして隆景の勝利を確信して。

だが、しかし。

その予想は、覆される。

ガギツ……!!

「な……!?!」

撃とうとした。だが、俺の腕から鉄杭が放たれる手ごたえは無い。

素早く身に起こった異常をチェックすると、想像だにしていなかったことが降りかかっていた。

パイルバンカーの弾丸である、鉄杭が曲がって引つかかっている。

入念なメンテナンスをした筈なのに、何故。

「……最初の、一撃か……!!」

最初に雪片を、シールドでいなした時。

その際にシールド内部のいずこかが損傷し、鉄杭を曲げてしまった。

「う………おおおっ!!」

弾詰まりで動きが止まったロスにより、織斑が衝撃から解放される。

そのまま弾かれた様に、俺に向けて必殺の剣を振り下ろす。

落ち着け。奴は虫の息だ。

この攻撃も、決してかわせないものではない。

これさえかわしてしまえば、残りのエネルギー量から考えて奴は確実に自滅する。だつたら、まだ俺の勝ち揺るが――

ボンッ!

「ッ!？」

その瞬間だった。2機あるスラスタアの片方が、前触れも無く破損した。

原因は——さつき捨てたライフル。

弾の残っていた銃が地面に落ちて暴発し、俺の機体のスラスタアに命中する。

そんな、そんなー万回やってー回あるかないかのアンラッキー。

それがふたつも連続して、俺の身に降りかかった。

迫り来る白刃。

スラスタアの損傷により決定的な隙を作ってしまった俺に、それをかわす術など無い。

「……ッ」

ああ、畜生。

これに勝ったら、会長さんに余計なことした嫌味のひとつでも言っただけでやろうと思っただけ。

更識と一緒に、また整備室で打鉄式式を作りたかったのに。  
……いつか3人で一緒に、楽しく過ごせるようになったらいい。  
そんなことを、思っ<sup>て</sup>、いたのに――

ザンツ!!

試合終了のブザーが鳴る。

その結果が、アリーナの電子パネルに大きく表示された。

『試合時間 7分33秒 勝者 織斑一夏』

## 欠けた男子生徒

長い夏休みが明けた、2学期の初日。

1年1組の生徒達は、久々に会うクラスメイトとの会話に花を咲かせていた。  
そんな中。

織斑一夏は、自分の後ろにある空席の机をじつと眺める。

「遅いな……藤堂の奴」

あの試合、辛うじて勝利を拾った一夏は、隆景と話をしようとして彼が居る筈のピットへ行った。

しかしそこに隆景は居らず、部屋を訪ねようにも彼が何号室かをそもそも知らなかったことに気付く。

それから結局夏休みが明けるまで彼とは会えなかったが、今日なら大丈夫だろうとううして教室へ来るのを待っていた。

やがて、始業のベルが鳴る。

もしかして今日は休みなのかと思った辺りで、教室前の扉から千冬が入ってきた。

「…………おはよう、諸君」

そう言った千冬は、いつにも増して物を言わせぬオーラがあるような気がした。

それにいつもは真耶が朝のHRを取り仕切っている筈なのに、姿が見えない。

違和感を感じた一夏が、席を立った。

「ちふ…………あ、いや、織斑先生！」

「…………何だ。HR前だぞ」

不機嫌そうな声音。

思わず気圧されそうになるも、疑問が勝り少し声を張るように尋ねる。

「その、山田先生はどうしたんですか？」

「……先生は少し体調を崩して、大事を取って休んでいる。言いたいことはそれだけか？　ならば早く席に——」

「も、もうひとつ！　藤堂も今日は休み、ですか？」

「……………っ」

一夏が隆景の名を出すと、途端に千冬の様子が変わった。

怒っているような、悔しがっているような。

そんな表情を一瞬見せた後、彼女は、静かに呟いた。

「……………藤堂隆景という生徒は。もう、この学園には居ない」

教室が一気にざわめきで沸き立つ。

普段ならそれを諫める千冬だが、そうしようとしなない。

一夏は突然のことに混乱しながらも、更に質問を重ねる。

「居ない……？　なんだよそれ、どういふことだよ千冬姉!？」

思わず普段の呼び方に戻るが、出席簿は飛んでこない。

そして彼女は、心底腹立たしげな様子で。

「藤堂は、昨日学園を出た。今日の昼に、I S委員会直轄の研究施設に到着予定だ」

「なっ……!？」

それは、つまり。

「お、織斑先生……それは、藤堂君が研究材料にされるってこと、なんですか」

声を震わせた、シャルロットの言葉に。

千冬は言葉を出さず、ただ小さく頷いた。



「!?」

誰かが絶句する。

研究材料。その言葉が意味する所を分からない者など、このクラスには存在しない。言ってしまうえば、藤堂隆景という人間は。

人であることを否定された、モルモットとして残りの一生を過ごすことになる。

「酷い……でも、どうしていきなり……」

「急なことではなかった。藤堂隆景の身柄を引き渡すことは、1学期当初から話には出ていた」

「そんなに前から……!?!」

世界にたった2人しか居ない男性IS適性者。

その秘密を知る、メカニズムを暴く。

それにはどうしても、適性者の詳細なデータが必要なのだ。

故にIS委員会は、強固な後ろ盾を持つ一夏とは異なり、一般家系出身である隆景に

狙いを絞った。

そして彼の戦闘ログ、即ちセシリアとの戦いと学年別タッグトーナメントの何れでも敗退していることを強引に理由とし、『操縦者としての見込み無し』と烙印を押しして研究施設の預かりにしようとは画策したのだ。

「で、でも！ おかしいだろそんなの!? I S 学園は、外部の組織からの影響や干渉を一切受けないって、特記事項に明記してあるじゃないか!!」

「……だからお前はバカだと言っているんだ。その特記事項の最終項を教えてやる」

千冬は手に持っていた書類の中から一枚引つ張り出し、そこに書かれていることをクラス中に聞こえるよう読み上げる。

『I S 加盟国全てから採決を取り、賛成多数であった場合にのみ I S 学園は外部からの干渉を許容する』。これが第56項だ、忘れずに覚えておけ」

「56……? 特記事項は全部で55項だろ!？」

疑問をぶつける一夏に対し、目を閉じ腕組みしていたラウラがぼそりと言った。

「……大方、藤堂隆景を効率良く手中に収めるべく、特記事項そのものを追加したのだろう。学園のルールは神が定めたものではない、人間が決めたことだ。貼るも削るも委員会の胸先三寸ということになる」

「そんなことが許されるのかよ!! ルールを変えてまで、そうまでして人の命を——」

はた、と。一夏は気付く。

理由も分からず、ただ上からの取り決めと言うことで決定した先日の試合。

まさか、あれは。

「千冬姉、教えてくれ。まさか藤堂は、俺との試合に負けたから……!」

「……その通りだ。お前との試合に勝てば、少なくとも卒業までは安全が保障される。そういう取り決めだった。私もそれを聞かされたのは、つい今朝の話だがな」

職員会議で、全てが終わった後に話された。

もし事前に知っていたら、そのような暴挙は何としてでも止めただろう。

特に隆景を可愛がっていた真耶の有様は、酷いものだった。

錯乱した彼女は今、医務室で寝かされている。

目が覚めた後も、どうなるかは今のところ分からない。

一夏は愕然とした。

あの試合、あの戦いで負ければ、隆景に未来さきなど無かったのだ。

だから楯無は、それを知って彼に「負けてくれ」と頼んだ。

それが例え、隆景自身の意に沿わない行いだったとしても。

居なくなつて欲しくなかった楯無は、もし事が露見したら嫌われることも辞さない覚

悟で一夏に八百長を頼んだのだ。

そして、簪。

隆景がこの学園に来て、初めて出来た友達。

彼女の家に一切関係の無い、だからこそ無償で心開けた友人を失った簪の心境は、計り知れない。

簪は、姉から事実を聞かされ今も自室で泣き腫らしていた。

彼が片時も手放さなかった、けれど部屋に置いて行つた、この半年でひとつ型遅れとなつた携帯電話を握り締めて。

「俺は……勝っちゃいけなかった。負けるべきだったんだ。そうすれば——」

ガンツ!!

一夏が最後まで、その言葉を言う前に。

出席簿ではない千冬自身の拳で、彼を殴った。

「自惚れるな!! 藤堂が貴様に負けてくれと一言でも頼んだか? 試合の後、奴が何かひとつでも泣き言を言ったか? 奴は己の立場さえ何も言わなかった、何もだ!! 貴様は、藤堂の誇りまで殺したいのか!?!」

藤堂隆景は、安い挑発や罵倒で腹を立てるような性分ではない。

けれど、非常に内面的なプライドの高い男だった。

内心ではぼやきながらもそれを人には明かさず、可能な努力を怠ることは決して認めなかった。

己の弱さを露呈することを、何より嫌う男だった。

「……っ、ごめん、千冬姉」

「織斑先生、だ。それに、私に謝っても仕方ないだろう」

コツン、と最後に軽く出席簿で叩き、千冬は教壇に戻る。

担任として、何もしてやれなかつた自分が歯痒い。

だが、例えば何かしてやれたとしても、きつと藤堂は助けなど求めなかつただろう。それもまた、歯痒かった。

「……では、全員席に着け。遅れたが、朝のHRを——」

「織斑先生!!」

突如教室の扉が乱暴に開け放たれ、教員の1人が入ってくる。

その尋常ではない様子に、千冬が問う。

「何がありました?」

「と、藤堂君が……藤堂君を施設まで護衛していた車両が、途中で何者かに襲われて――

藤堂隆景君が、攫われました!!」

## 主人公紹介

苗字：藤堂とうどう

名前：隆景たかかげ

年齢：16

血液型：B

生年月日：4. 6

身長：169

体重：56

好きなもの：簪 楯無 日記作成 携帯弄り 真耶（教師として尊敬）

嫌いなもの：弱音 泣き言 責任放棄 千冬（授業が分かりにくいという意味で）

IS 適性：C



・世界で2番目の男性適性者。地方のとある田舎町の出身だが、普通に標準語で話す。非常に無口で反応も薄いため、基本的に何を考えているのか分からない。が、頭の中では割と色々愉快なことを考えていたりするので、別に無愛想とかいう訳ではない。

・視力その物はいいのだが、眼精疲労を患っている。そのため常に薄いブルーの色眼鏡をかけており、風呂と睡眠以外で外すことは滅多に無い。眩しさに弱く、故に直射日光の強い晴れの日が嫌いで、曇りを好む。実は赤眼で、色眼鏡がブルーの所為か、かけているのと外しているのでは印象が全く異なる。簪いわく眼鏡付きだと『やる気の無い準不良』、眼鏡無しだと『戦隊物のブラック』らしい。髪の色は普通に黒。

・偏差値58と中々の数字を誇り、努力次第では有名校でも射程圏内だった。流石に倍率1万を超えるIS学園では苦勞していた様子だが、それでも1学期の間食らいついて行った結果、偏差値60にアップしている。勉強やIS操縦の個人指導を真耶に頼んでいる。千冬に頼まなかったのは、正直教えるのが下手だったから。

・運動神経は取り敢えず良と優の間。ただし平衡感覚と反射神経がずば抜けて高く、ISの機動制御が天才的なのはこの辺の能力が一部起因している。武道の経験は全く無いので、武器の扱いに関しては素人、若しくはそれ以前の問題。武器に関するセンスが絶無なので、それ以外で補っている。

・色眼鏡の外し方が粋。本人的に結構な研究を重ねた成果らしい。

・基本的に罵倒や挑発は無効。そんなことで怒るような感性は持ち合わせてなく、寧ろそうした行いをする人間の品性が下がることを哀れむタイプ。ラウラに一夏と間違われ殴られた際には、虫歯を折られて流石に激怒したが、1ヶ月もしない内にそれ自体は収まっている。ただ、嫌いなことには変わらない様子。

・家族構成は父母と3つ上の兄。兄にかけているサングラスが世紀末的に似合わないことを除けば、極普通の一般家庭である。

・実はかなりの偏食家。好き嫌いが極端で、海鮮類はほぼ全滅。地元には海が無かったことが遠因だと思われる。また、潮風等も苦手。要するに海が生理的に嫌い。

## 帰ろう

藤堂隆景の誘拐。

それはI S学園内で、未曾有の混乱を引き起こしていた。

「護衛は何をしていたんだ！　こうなる恐れがあつたことくらい、予測できただろう！」

教員の1人が、その声を張り上げた。

生徒達は教室で自習。教員は全員が集められ、緊急会議が開かれている。

「藤堂隆景君を攫ったのは、恐らく女性権利主張団体の過激派かと。男性適性者の登場

で、ここ最近不穏な行動が目立っていましたから……」

「だから護衛にはISをつけろと言ったのに！ 委員会め、杜撰な仕事を！」

誰もが喚き立てる中、千冬は一人席に座ったまま腕組みしていた。

そうして瞼を閉じ、己の中にある複雑な思いに逡巡する。

「……………」

モルモットとして一生を過ごすか、過激派に囚われるか。

どちらにせよ、似たような物だ。

隆景の悲運、どうすることもできない自分。

何が『世界最強』だと己を嘲笑し、千冬は己を殴りたくさえあった。

そんな中。胸ポケットに入れていた携帯電話が、激しく振動する。

「……………」

何だ、この非常時に。

煩わしく思いながらも、発信者の名を見る。

その瞬間、千冬は目を見開き急いで携帯を操作した。  
そして。

「静かに！ たった今、連絡が入った！ 藤堂の居所を突き止めたとのことだ！」

千冬の言葉に、職員室内で歓喜の声上がる。

「本当ですか!? で、彼は今どこに!? 至急救出隊を組織しなければ、世界的損害になり兼ねません！」

「……その必要は無い。それに、行こうにも今届いたメールには、藤堂の居場所など書かれていない」

「な!? 織斑先生、それは一体どういうことですか!? 分かるように説明して下さい！」  
状況が理解できず、説明を求める教員達。

ゆつくりと千冬は席を立ち、周りを見回しながら告げた。

「更識楯無……ウチの生徒会長が助けに行った。『一緒に帰ってくる』……そう書いてあったよ」

そこは、寂れた廃工場だった。

打ち捨てられ、現在は使われていない筈のその建物。

その周囲を、数人の銃を持った女性が見回っていた。

「ねえ、攫って来た男性適性者ってどうするの？」

「バッカお前、そんなの決まってる。適当に痛めつけた後、始末するんだよ」

けらけらと笑いながら、平然とした顔で見張りの一人がそんなことを言う。

「ISはアタシ達女の物なんだ。あの男を調べて、もし何か分かってみろ。下手すれば

世界中の男が、ISに乗れるようになるんだぞ？」

「なにそれサイアク！　じゃあさっさとやった方がいいじゃん！」

つまり、そう言うことだった。

現代の女尊男卑の風潮は、ISに乗れるのが女だけだから認められている。

もし男がIS適性を得たら……その権利が、脅かされてしまう。

そんな、今の甘い蜜が吸える立場を享受したい。

そんな、そんな、下らない理由で。

ドサツ……

「ん？」

不意に、会話をしていた2人の内片方が、何の前触れもなく倒れた。

そしてその姿を見遣った片割れが、異変を気取る前に。

「がっ!？」

衝撃を受け、女が壁に叩き付けられる。

激痛が身体を襲うと同時に、何か自分が自分を押しさえ付けていることに気付く。

それは、金属で覆われた、人間のそれよりもひと回り大きい鋼の腕であった。

「……2度は、言わないわ」

耳に静かに、しかしはつきりと響いた声。

その氷のような声音に、女の背筋が冷えて固まる。

ロシアの第3世代 I S 『グストロイ・トゥマン・モスクヴェモスクワの深い霧』を雛形にカスタマイズされた、水を纏う

美しき機体 『ミステリアス・レイディ霧纏の淑女』。

己の専用機を起動させた楯無が、冷め切った声で問うた。

「隆景君は、どこにいるの？」



……どうやら、俺は誘拐されたらしい。

こうして椅子に縛り付けられれば、嫌でも理解する。

全く以ってツイていない。ここ最近、運が目に見えて悪くなっている。

お陰で研究施設に送られる羽目になるし、その途中で攫われはするし、もう散々だ。

誰か弁護士呼んでくれ。

と、言っても。攫われようが攫われまいが、どうせロクなことにはならなかったであ

ろう身だ。

研究施設などに入れられれば、その後の人生は真つ暗闇。

投薬や人体実験など日常茶飯事だろうし、死んだら死んだで血管の一本まで解剖される。

考えただけでもおぞましい、考えるの止めよう。

ともかくこうして攫われた方が、もしかしたらまだ良かったかもとさえ思えてきた。

ちらほら聞こえてくる話を纏めるに、俺を攫ったのは女性権利主張団体の一派らし

い。当然過激派。

俺や織斑の存在が発覚して以来、特に行動が危なくなってるってニュースで何度かやってたし。

てか、俺もしかして殺される？ 男性適性者を始末して『次』が出てこないようにするとか聞こえたんだけど。

随分殴られた。

向こうからすれば俺は『女性の権利を奪う悪魔』らしい。逆恨みもいいところだ。

だが最終的にはどれだけ殴ろうとうめき声ひとつ上げない俺に余計苛立つたらしく、縛られたまま放置される。

どうも、そろそろ始末するとか洒落にならない会話をしているんだが。

勘弁してくれ。俺はまだ死にたくない。

学園に入ってから、家族の顔だってロクに見ていないんだ。

俺の所為で要人保護プログラムだかの対象になって、皆違う場所に引つ越さざるをえなくなってしまう。

兄貴のあの世紀末的に似合わないグラサン姿も、会えなくなれば懐かしい。

山田先生にも、まだ教わっていないことが沢山ある。

俺が何かひとつ新しいことを覚える度に、まるで自分のことのように喜んでくれた。夏休みが終わったたら、エアリアル・ワルツの練習を一緒にする筈だった。

特A難度の機動技術だが、俺ならきつと出来るとそう言ってくれた。

更識の専用機だって、まだ完成してないんだ。

一緒に作ろうと、2人で完成させようと約束した。

そろそろ起動テストをしようかなんて、そんなことを話しながら遅くまで組み上げ作業をやった。

プログラミングは得意じゃない俺は、専ら本体整備で。

そうだ。右腕肘部の関節が少しくずってたんだ。

使用しているビスが特注品だったから、発注書を書いてまだ送っていない。

……それに。

夏休みの最中、ずっと俺の訓練を見てくれた会長さんに、まだ何のお礼もしていない。

更識とまた仲良くなりたいたい、1度だけほやいていた。

だからその手伝いが出来ればと、そう思って。

死にたくない。俺はまだ生きていたい。

生きて、また学園に戻りたい。

悔いが多過ぎる。やり残したことが多過ぎる。

残した人が、多過ぎるんだ。

……外が騒がしい。

俺を殺す支度でも、整ったのだろうか。

そんなことを思った刹那。

俺が閉じ込められた部屋の扉が、爆ぜるように吹き飛んだ。

「隆景君!!」

爆音の後に、耳へと届いた声。

学園で、何度も聞いた。

けれど聞いたことのない、心配や焦燥が緋い交ぜになった声。

煙が晴れ、現れたのは会長さんだった。

前に1度見せて貰った、専用機を身に纏っている。

「良かった……間に合った……」

安心したような笑みを見せて、会長さんが縛られた俺の縄を解く。助けに来て、くれたんだ。

「酷い怪我……大丈夫？ どこか、折れてるところは無い？」

アバラが少し軋んだが、少なくとも折れてはいない。首を横にゆつくりと振る。大丈夫だと、告げる為に。

会長さんは、ほっと息を吐いて。

そんな彼女の姿を見て、俺は。

安堵して、気が抜けて。

気が付けば、目から涙を零していた。

「隆景、君……？」

戸惑ったような声を出す会長さん。

そうだろう。俺だって、自分自身に驚いている。

赤ん坊の時以来、1度だって泣いたことなんか無いのに。

なのに目から溢れる熱い雫は、止まらない。

こんな有様を見られたくなくて、下を向く。

瞬間、会長さんに抱き締められた。

「大丈夫……貴方はもう、大丈夫だから」

優しい声。

ひどく心が休まる気がした。

下を向いたままの俺に。

会長さんが、そつと囁く。

「さあ、帰りましょう？ 学園に……私達の、居るべき場所に」



## ☆月&amp;日 晴れ

このスマホでまた日記がつけられるなんて、正直思っていなかった。

俺は今、IS学園に居る。引き続きこの学園で学ぶことが出来るようになったのだ。

それもこれも、会長さんのお陰だった。

あの人が根回ししてくれた結果、俺が研究材料として使われる可能性はほぼ消えたと言っている。

救出後、一旦はIS学園まで戻った俺だったが、やはりすぐにでも施設へ再護送される手筈となっていた。



だが、それに待ったをかけたのが会長さんで。

彼女は俺が再び施設へ連れて行かれる前に、とある策を弄したのだ。

会長さんは俺の学園入学以来からのＩＳ搭乗ログを掻き集め、ロシア本国に提出。

ロシア政府は俺の機動技術と成長速度を有用だと認め、現代表からの強い推薦もあり、とある地位を俺に用意した。

ロシア代表候補生。俺こと藤堂隆景には今、そんな肩書きがくつついている。

要するに俺はＩＳ操縦者としての帰属国家を得て、国に庇護される存在となったのだ。

これで俺に対し非人道的な措置をとれば、ロシアが敵に回る。

それを恐れた各国が、俺を研究所送りにするという採決を続々取り下げ、ＩＳ学園に外部干渉する条件である『加盟国過半数の賛成』が瓦解。

委員会も俺に手出しできなくなり、再び学園に通えるようになった。

学園に戻った俺を、皆は幽霊でも見たかのように驚いた。

山田先生と更識は寧ろ号泣してしまつて、宥めるのに苦労したけど。

でも、先生と更識が、泣きながら俺に縋り付いてくる中。

俺は……戻つて来れたのだと、そう思った。

☆月！日 ……ん、やっぱ曇りだな

ひと事件あつた後だと、自室の風景もなんだか大切な物に思えてくる今日この頃。俺を取り巻く状況……と言うのも、多少変わってきたと思う。

まず更識。朝起きたら、まず俺の手を1度きゅつと握るようになった。まるでそこに居ることを確かめるように。別にもう居なくならないって。

山田先生だが、以前よりも更に熱心に勉強や実技を教えてくれる。

きつと俺が今の地位を確立し、国というバックボーンを失うことが無いようにとの計らいだろう。

正直ありがたい。先生の教えは非常に分かり易く効率的だし、何よりこの人は多分I S学園の中で最も俺と波長が合う。

才人は皆恩師に恵まれたとは言うが、まさにそれだ。

この人が1組の副担任であつたことは、きつと俺にとつてまたとない幸運だつたのだと思う。

そして会長さん……名前……名前、確か『た』で始まつたのは覚えてるんだが。とにかく会長さんも、何かと俺を気にかけてくれている。

学生としてだけではなく、IS操縦者、ひいては国家代表としての先達と、改めて考えればこの学園で最も接点の多くなったこの人は、俺の人生の恩人だ。

借りが大きい過ぎて、一生かけても返せそうにない。なんとお礼を言えばいいかさえ分らない。

せめて少しでも恩返しをするべく、生徒会に入ることにした。

と言っても、放課後の自主補習や更識の手伝いなどもあるので、精々簡単なことしか今はできないが。

☆月◎日 りもく（右読み）

会長さんから代表候補生としての権利、義務などについて教わる。

一応その辺は授業でも一通りやっているのでも大半は知っていたが、やはり細かい部分は抜けがあつたり初耳だつたりもしたので、大変勉強になる。

それと、代表候補生という肩書きを得た俺ではあるが、その目的は国の庇護を得ることがメインであつた為、少々強引に押し込んだ形が強い。

なので本国のISSコアに予備機が無く、当面の間は今と変わらず訓練機を使うらし

い。

まあ俺としては専用機などあまり興味はないし、こうして学園に通えるだけでもロシア万々歳なので、何も異論など無いけど。

そもそも早い内からスペックの高い専用機など使ってしまうえば、それを自分の実力と勘違いしてしまうから寧ろ訓練機で技術を磨きたい。

ただ、既に俺の搭乗データを元に専用機の図面は引き始めているらしい。完成はコアが空いていないこともあって未定だが、会長さんの話だとコンセプトは高機動重視のレースタイプとのこと。

……ちよつと乗ってみたいと思った。

あと更識の機体が、どうにもスラストター関係だけ進みが異様に早い気がする。

これって俺のデータがメインだから？ でも車だつて一番大事なのは足回りなんだから、ISだつてスラストターが重要な筈だ。

武装データが欲しい……荷電粒子砲とマルチ・ロックオン・ミサイルの完成が遠い。

☆月♪日 東アフリカは曇りだったらしい

最近会長さんと更識だが、少しずつ仲が回復しているらしい。

俺の処遇が会長さんのお陰で救われたということもあり、更識としても思うことがあつたのだと。

だがまあ、元々は些細なすれ違いからの仲違いだったのだ。

共通の友人である俺が見るに、双方本当は仲良くしたいって本音が見え隠れしていたし。

この調子で気兼ねなく話せるようになってくれると、俺も嬉しい。

3人で一緒に食事したりとか出来れば、きつと楽しいと思う。

ついでに俺なんだが、どうにも織斑がこっちに対して気まずそうにしてると言うか。まさか試合の件を気にしてるのか？ だとしたら筋違いもいとこなんだが。

や、特に親しい訳でもないから放っておこう。余計なことはいらない主義なんだ。そして、ようやく皆の名前を覚えた。

更識は簪、山田先生は真耶、会長さんは楯無。

友達や恩師の名前を覚えなとか問題だからな。他の人は、相変わらず覚えてないけど。

折角なので、早速まずは更識から名前で呼んでみることにした。

ふとした拍子に、簪と呼んでみる。

顔を真っ赤にされた。俺まで照れるんだけど。

慣れるまで会長さん達は名前呼びしないでおこう。

簪はあれだ。1回そう呼んだら、苗字呼びで返事してくれなくなった。

プイってするんだよ。ちよつと可愛い。

☆月四日 曇れ俺のコスモ

今日の放課後は、山田先生とエアリアル・ワルツの練習をした。

こいつは要するに、超直角的な軌道を描いた動きだと思ってくれればいい。

カーブの瞬間さえ全く減速せず、スラスターとPICの性能をフルに用いて90度以上の直角、場合によつては鋭角で曲がる近接戦用の戦闘動作だ。

稲妻みたいな動きにも見えることから、ライジング・ムーブとも呼ばれる。

流石に難しい。難易度的には螺旋軌道スパイラル・イグニッション・プースト瞬間加速より上、特A難度の

個別連続瞬間加速と同等だと聞いていただけのことはある。まあリボルバーは、機体が4機以上のスラスター積んでないとそもそも使えないんだが。

しかしこれを習得すれば、スパイラルで曲線の動きを、エアリアルで直角鋭角の動きのコツを掴み取れる。

曲と直の動作を使い分けられれば、これ程使える機動も無い。

だがこの技……実は山田先生は元より会長さんも出来ないんだけど……。

山田先生は元代表候補生ついで、国家代表レベルの技術は単純に技量不足。会長さんだが、エアリアル・ワルツはちよつとあの人のスタイルとは違うし。

せめて1回、1度でいいから実演が見れば全く違うんだが。

……あ。

ティンと閃いて、発想の転換で織斑先生に頼んだ。  
見せて貰った。動きは頂いた。

☆月△日 曇ろうとする意志は、何よりも強い

やっべえ、出来るようになった。エアリアル・ワルツ。

あの織斑先生までびっくりしてた。たかが数日で会得するなんて、思ってもいなかったらしい。

俺だっと思って無かったよ。自分でも内心びっくりだよ。

こいつはいい。本気で自由自在に飛べる。

ただ、スラスターのエネルギーをかなり食うから乱用は禁物、とのこと。

今日は織斑達と使用アリーナが被ったので、遠目にしばらく見学してた。

……しっかしアレだな、織斑の専用機。名前思い出せないけど、アレ。

酷いもんだ。スラスターの燃費が悪い、そしてそれ以上に使い方が悪い。

スロットルワークがなくなってないんだよ。マシンセッティングだけで燃費どうにかできると、本気で思ってるのだろうか。



特に瞬時<sup>インシュンション</sup>加速で余計なエネルギーを放出して、無意味に削ってる。

ただ加速減速すればいいんじゃない。大事なのは効率だ。最小限のエネルギーで、最大限のパフォーマンスを。

あの機体なら、スラスタの点火率を少なくとも50段階に分けて使えるようにならないと駄目だ。

その場その場での加速がバラバラだから、ただでさえ悪い燃費をもっと悪くしてしまっている。

機体性能で誤魔化してはいるが……おおう、見てられん。

エアリアル・ワルツを使う際のスロットルワークを、しっかり頭に叩き込んでおく。

これを理解するとしらないでは、エネルギー効率が倍ほども違ってくるのだから。

そして簪の専用機だが、遂に完成した。……スラスタ含む機動関係だけ。

でも凄いぞこれは。飛行試験してみたが、安定感も燃費も最高速も当初のスペック表を上回っている。

わーいわーいと喜ぶ俺達の足元には、未完成の武装が転がっているが……うん。見なかったことにした。

☆月？日　オラに曇りを分けてくれー

会長さんが、今日辺り何か企んでる気がする。

長くはない付き合いだが、その程度は分かる位に密度の濃い付き合いはしているつもりだ。

案の定だった。

学園祭の集会だかで、『投票1位を獲得した催し物の部活には、織斑を入部させる』なんて爆弾発言。

ホール内は音響兵器と化してたよ。耳栓用意の俺は平気だったけど。

あ、俺は既に生徒会役員（役職は書記）だし。俺欲しがらる物好きもそう居ないと思うけど。

そして教室では、クラスの出し物を何にするかで白熱議論。

だが俺はそんなものに参加するタイプじゃないし、何より今は考え事で忙しいのだ。

おおう、簪の武装どうしよう。

まずアレだ。マルチ・ロツクオン・ミサイルは現状不可能だ。ロツクオンシステムの基盤さえ出来てないのに、1から作るなんて無理。

応用できるシステムがあればまだ話は別だが、当面は単一ロツクシステムを使うしかない。

それで一応武器としては使えるから、妥協して貰うしか。

あと、荷電粒子砲ね。こっちはまだ望みがあるけど、やはりミサイル同様データが足りない。

だが荷電粒子砲なんて学園の武器庫に置いてないし、どうデータを取れと。

大体そんなもんどこに行けば……あ、あつたわ。そうだ、織斑の専用機に積んであった。

仕方ない、今度こつそり模擬戦のデータでも記録してパチっておくか。

簪にはナイショ。あの子どうしてか織斑のこと大ッ嫌いなんだよ。

放課後、アリーナで簪と飛行テストをする。

うむ、駆動系はほぼパーフェクト。装甲も問題なし、システムも特にエラーはない。  
……武装？ 何それおいしいの？ ブレード以外全然使えないけど、何か？

☆月？ 日 曇れ、いつそ腐れ

ミッションスタートである。

つつても、織斑のどこに行つて荷電粒子砲のデータくれと頼みに行くだけだが。

しかし簪に見付かると後が大変なので、出来るだけ目撃者を減らしたいのだ。

ささつと隠れながら、1025号室前まで来る。

……なんか中が騒がしい。織斑つて今は1人部屋の筈だつたと思うけど、もしかして  
独り言が趣味？

不審に思つてドアを開けたら、アレだつた。

織斑と、水着にエプロン姿の会長さんが一緒だつた。

取り敢えずドアを閉めておく。

なんとも想定外。よもや織斑と会長さんがアレな関係で、織斑が恋人にアレな格好を

要求する変態だったとは。

今日のことは、俺の胸にだけそつと仕舞っておこう。

つーか忘れたい。タイムマシンで過去に行つて、この部屋の扉を開ける前の俺を説得して今し方の出来事を無かつたことにしたい。

や、もういいや。簪に慰めて貰おう。

弱音を吐くのは嫌だが、そんなこと言つてられん。下手すれば泣きそうさ。

てか、あの子になんて言えばいいんだろう。

もし事実をありのまま伝えたら、ただでさえ嫌つてる織斑への嫌悪がメーカー振り切るかも知れん。

あーうん、取り敢えず。

初恋が実らないつてのは、本当だったらしい。

☆月々日　もしかして曇りですかあゝ!?　YES YES YES YES YES!

現在会長さんから逃走中。

昨日のことを説明したいと言うのだが、そんなもん聞きたくない。

何が悲しくて、初恋の人と他の男のラブノーマルなプレイを仔細に渡り聞かねばならないのか。

あの人の運動神経は常人離れしているが、それでも単純な足なら男女の身体能力差で俺の方が速い。

最後はダンボールの中に隠れてやり過ぎした。こういう古典的な手の方が有効な場合もある。

少しばかり凹みつつ、人気のない廊下を歩く。

……ん、まあ、いつからあの人のことが好きだったかと言えば、そりや最初からだった訳だが。

自覚したのはつい最近だけどね。あの日助けて貰った時に、「あ、俺この人のこと好きだ」ってな具合。

にも拘らず、あのようなことに。

こんなことなら素直に告って玉碎してた方が、まだ良かった。

最終的にガチで俺をとっ捕まえにきた会長さんの仕掛けた罠に引っかかり、ぐるぐる巻きに縛られて確保される。

こうなつてしまえばもう、腹を括るしかない。

全部誤解だった。

今度は別の意味でこの人の前から消えてしまいたい。通りがかつた簪に、縄を解いてくれと助けを求めろ。

ソツチ系のプレイと誤解された。俺はマゾじゃないんだが。

目に涙を溜めて駆け出す簪の姿に、今度は俺達2人が慌てて彼女を追いかける。簪、実は会長さんより足が速かった。

何とか誤解は解けたが……無意味に走ってばかりの1日だった。

……疲れた。

☆月→日 曇りに、俺はなる！

取り敢えず、会長さんから聞かされた話を纏める。

俺が攫われた一件もあり、男性 I S 適性者に対する希少価値や世間への影響、危険度等が修正されることになり。

その結果、最低限の自衛ができるように戦闘能力の向上が肝要だと判断されて。

そしてそれはロシアという大国の庇護があり、I S 乗りとしての技量も代表候補生クラスに達しつつある俺よりも、織斑の方がいつの間にか立場逆転して危険な立ち位置に居て。



当面の護衛と専属コーチも兼ね、会長さんが織斑と同じ部屋で生活することに。

なんかちよいちよい無理矢理な気もするが、あの人のことだから悪戯心十何らかの考えがあるのだろう。

てな訳で、当分会長さんは織斑に付きっ切りとなってしまうのだが……まあ仕方ないのである。

俺には山田先生がコーチしてくれてるし、それに簪の専用機だつてまだ完成してない。

こっちはこっちでやること山積みだし、それらを着実に進めておこう。

……少し、寂しいが。

☆月※日 諦めたらそこで曇り終了

エアリアル・ワルツの行使において必要なのは、エネルギーの効率的使用と機体に過負荷をかけないよう制御することである。

ただでさえ減速無しの鋭角機動なんて無茶苦茶やつてるんだ。制御を誤れば、機体どころか俺自身も危険に晒される。

と言っても、特A難度の技術なんて大なり小なりそんなもんだが。

ラファールは量産機だから、コストの関係で装甲なんかの強度に限界がある。

どうしても専用機に比べてスペックが低いから、その辺の制御が非常にシビアなのだ。

そして現在エアリアル・ワルツを習得しているIS操縦者は、確認されてるだけで俺や織斑先生含め8人。

内3人は、自分の専用機以外では使用不可能。

ISコアの数こそ500に満たないが、操縦者だけならそれこそ数千人以上居る。

この数字がどれだけ少ないか、言わずとも分かるだろう。

数日で習得できたのが、未だに信じられん。

こっそり織斑達の訓練風景をデータ採取して、荷電粒子砲の使用ログを編集。

簪に渡す。これで多少は、完成が早まる筈だが。

☆月@日 心はいつでも薄曇り

会長さんから、織斑の訓練に御呼ばれする。

バトル・スタンス  
 戦闘動作や機動技術の、手本を見せてやって欲しいとのこと。

いきなり連れて来られて、何を見せろと言うのか。

スパイラル・イグニッション・ブースト  
 螺旋軌道瞬時加速？ それとも、エアリアル・ワルツ？

スパイラルはともかく、エアリアルの方はまだ実戦で使うには少し不安だから見せるのは待つて欲しいんだけど。

イグニッション・ブースト  
 シューター・フロアの曲線軌道から、瞬時加速への直線軌道へ移行する際の動きを要求された。

……あ、そんなのでいいんだ。

けどそんなの、4回5回もやればできるよう——ならない？

しかし会長さん、織斑の奴は中々に習得が早いと聞いたのですが。

自分と一緒にすると言われた。

俺の場合は覚えが早い通り越して、異常だったらしい。

☆月\$日 暗雲立ち込める曇り

訓練中、オスカルとミニ子にスパイラル・イグニッション・ブースト  
 螺旋軌道瞬時加速を見せろと要求される。

この中に居る面子で、俺と会長さん以外使えないらしい。

俺の機動技術は見世物じゃないのだが……しつこいので、1回だけやって見せる。

ギヤラリーが沸いた。

平日だからね、アリーナにも結構人が居たんだよ。

ふむ、だがこれはもしかすれば幸いだったかも。

何せ俺がロシア代表候補生になったのは、裏金使ったからだとか言ってる輩も実は居たし。

特に目立った戦績を残してない俺に対して、そう思うのも仕方ないが。

ちなみに、やり方を教わりたくないなら会長さんから聞いてくれ。

俺は自分にしか分からない理屈とか立ててやるタイプだし、教えるのに向いていない。

山田先生からは、その辺の教え方とかだけは吸収できなかった。

人がこつちに注目してきた所で、会長さんが俺と織斑で模擬戦をやってみないかと提案する。

……どうも、今の俺の実力を生徒たちに知らしめたいらしい。

この人、俺が陰口叩かれて結構怒ってたからな。

だがまあ、それについては異論無い。

何せ前にやった時は、内容にも結果にも納得が行っていないのだ。

それに……会長さんや山田先生から直々にコーチを受けた俺の実力が、あんなもんだと思われるのも少し腹立たしい。

俺は、模擬戦を引き受けた。

## Nova ロッスィ

「いい？ それじゃあ、私が合図したら開始。シールドエネルギーが先に尽きた方の負けだからね」

楯無さんが俺達を交互に見ながら、簡単にルールの説明をする。

アリーナには結構な人数の生徒が集まってISの訓練をしていたけど、俺たちが模擬戦をすると言ったら場所を空けてくれた。

30メートルぐらいの距離をとって、俺と藤堂が向かい合う。

前にやった時と同じ、ラファール・リヴァイブを纏ったあいつは、やはり前と同様何を考えているのか分からない目をしていて。

だが、前とは違う所がひとつだけあった。

「……………」

「隆景君？ 先に武装を展開しておかなくていいの？」

そう、あいつは両手に何も持っていなかった。

シャルのような目まぐるしく武装を入れ替えるタイプならともかく、展開の苦手なあいつが開始前に丸腰なのはおかしい。

だが藤堂は、楯無さんの方をちらとだけ見ると。

「……………今回は。これで」

短くそう言って、ふわりと浮き上がった。

そして。

カチャ……………

「?」

外している姿を見たことの無い、薄いブルーの色眼鏡を取った。  
てか、外し方カッコいいな。ツルを片手で左右同時に畳んだりとか。  
藤堂はそれを、楯無さんに向けて投げる。

「つとと……隆景君?」

「短時間なら、この方が、よく見えます」

眩しさに慣れようとする風に、数秒目を閉じて。

「……今日は。最初から、本気で」

普段の眼鏡越しの印象とはまるで異なる、楯無さんのそれともまた違う赤い瞳が。  
俺を、射るように見据えた。



「一夏！ 油断するなよ！」

多分箒が言ったであろう言葉に、顔を向けず手だけ上げて答える。

……大丈夫。この前の時だって、カウンターを当てられはしたが最後の方は動き自体は見えていたんだ。

だったら今回は、以前のように間合いを制圧されはしない……！

雪片を構え、雪羅もカノンモードで機動。

準備が整ったことを確認した楯無さんが、右手を上を上げて。

「……始め！」

大きく振り下ろしたのと同時に、俺はまず雪羅の荷電粒子砲を撃とうとして。

「おそい」

イグニッションブースト  
 瞬時加速で至近距離まで迫ってきた藤堂に、蹴り飛ばされた。

「成程。初手で前回とは全く逆のことをして、一夏君のペースを崩しにかかったのね」

体勢を崩した一夏に、更にもう一発蹴りを入れる隆景を見て、楯無がそう呟く。

重心、バランスを崩しやすい箇所を的確に蹴られた一夏は、数メートル吹き飛ばされつつも何とか持ち直し、雪羅の荷電粒子砲を放つが。

『くっ！』

最低限の動きでかわされてしまう。

隙ができた彼に対し、隆景は銃火器を展開して以前同様間合いを取りつつ、シールド

を削る戦法に移るかと思いきや。

『…………』

どういう訳か、近距離と中距離の間程度の間合いで止まり。何をしてもなく、ただ宙に浮いていた。

「どういふつもりですの…………？」

「知らないわよそんなの！ 一夏！ 今よ、やっちゃいなさい！」

元よりそのつもりの一夏が、零落白夜を発動した雪片で切りかかる。

しかし、当たらない。攻撃先を読まれているかのように、全て小刻みな動きでかわされる。

圧倒的な機動技術。回避に専念すれば、隆景にこれくらいいわけは無かった。

「流石ですな藤堂君は！ 実に無駄の無い動きです！」

「…………隆景の、ここ一ヶ月の戦闘ログ…………敵攻撃被弾率、4%以下…………闇雲な攻撃じゃ、

絶対当たらない」

何故かさつきまで影も形も見当たらなかった真耶と簪が、当然のように観戦していた。

しかも、楯無を左右挟んで。

「せ、先生に簪ちゃん!? いつの間に……」

「ピンと来ました」

「……ティンときた」

答えになっていない。

しかし最近この2名は隆景絡みだと超次元的な働きをするので、突っ込むだけ無駄だった。

悉くの攻撃を回避され、しかし隆景からは最初の蹴り以外一切の攻撃が無い。業を煮やした一夏が、彼に向けて怒鳴る。

『藤堂! どういうつもりだよ!?!』

『……』

けれども、彼は何も答えない。

ただ、その代わりに。

くい、くい、と。

まるで「さっさと斬り込んで来い」とでも言いたげに、指で手招きしたのだ。

『ッ、うおおおおっ!!』

侮られている、舐められていると思ったのか。

咆哮し、一夏ががむしやらに斬りかかる。

「む……まずいな、奴の術中だ」

「だけど、反撃も牽制も無しに全部かわすなんて無理だよ！ 一夏の剣は、1回でも当たれば！」

ラウラ、シャルロットの声に、しかし楯無達はそうは思わない。

確かに専用機、それも近接特化の機体を使用している一夏に対し、量産機で最適化さ  
えしていない訓練機を操る隆景では、今の状況で大半の者がそう思うだろう。

だが、今攻撃をかわしているのはあの藤堂隆景なのだ。機動技術の天才、ロシアでは  
早くも部門別国家代表の最有力候補に名が挙がっている存在。

間合いを離さず全ての攻撃をかわす。

『ステッピング・エスケープ』と呼ばれる技術も、当然習得している。

やがて急激に、一夏の動きが鈍った。

スラストアーのエネルギー、並びにシールドエネルギーを消耗し過ぎたのだ。

『くっ……しまった、零落白夜が……！』

輝きを放っていた雪片もその光を失い、ただの実体剣へと戻ってしまふ。

雪羅ももう使えない。攻撃力が激減した瞬間だった。

「……もしかして隆景君、一夏君の自滅を待ってたの？ 珍しい、そんな甚振るような真

似するなんて」

「そのまま……半殺しにしてい……いっせ、ボコボコに……」

「だ、駄目ですよ更識さん!」

しゅ、しゅと妙に腰の入ったシャドーで物騒なことを言う簪を、真耶が宥める。  
そんな彼女らの姿を尻目に、楯無は。

「……………?」

殆ど自分からは、何も言葉を発さない。

仲のいい自分達との会話でさえ、一言二言で済ませる隆景が。

『……………こんな、もんなのか』

ほんの僅か。

けれど明確に、『苛立ち』を含んだ声で。

自分から一夏へと、声を発するのを聞いた。

「……こんな、もんなのか」

スラストアーのエネルギーギアが底を尽きかけ、シールドエネルギーも残り僅か。攻撃していたのはずつとこつちだったのに、圧倒的に不利なのは俺の方。そんな状況になって。藤堂が、俺の聞いたことの無い声音で喋りだした。

「抜けている、呆けている、墮落している……」

「な!?!」

「お前は機体のポテンシャルを全く引き出せていない。高いスペックで誤魔化しているが、本来ならそいつは無改造ブレイクの、それも訓練用のラファールなど瞬殺できる筈だ」

藤堂がこんなにいっぺんに話す所なんて、初めて見た。

けどそれ以上に……こいつが怒っているところも、初めて見た。



「スロットルワークが甘い。ワンオフの発動時間に大幅な無駄がある、刃の接触時だけで十二分だろうが。操縦者のテクニックひとつで、ISの燃費なんぞ数倍は変わってくるんだ」

そんなことも理解していないのかと、藤堂が呟く。

「……お前がそんな体たらくだと、お前に技術指導をしている会長さんまで低く見られる。授業の大半を担当している山田先生まで、能力を疑われる」  
「そ、そんなこと……」

「だからもういい。お前の程度は分かった、だから俺が証明する」

そう言っ

藤堂は、俺からゆっくり離れて行った。

「俺が普段使うラファールは、主に簪がセッティングしてくれている」  
「？」

「だから俺の背中には、彼女の手が添えられている」

50メートルほど、離れたくらいで。

止まって、こちらを振り向いた。

「俺は、1年1組の生徒だ。俺の左肩には、山田先生の手が添えられている」

「なにを——」

「そして」

一瞬だった。

そこにいたはずの藤堂が。

消えた。

「俺は」

ヒュッ！

「!?」

右隣に藤堂が居た、と思った瞬間。

全く減速をしないまま、あいつはありえない速度で直角にカーブする。

「ロシアの代表候補だ」

ヒュッ！

まただ。

消えていると思うほどに速い、速すぎる鋭角機動。

こんな動き、見たことが無かった。

「俺の右肩には」

ヒュッ!

「会長の。更識楯無の手が添えられている」

ヒュッ!

「うわっ!？」

目の前に、拳を振りかぶった藤堂が。  
俺には、何の反応も許されなかった。

ガッ!!

スピードの乗った一撃で、俺は壁際まで吹き飛ばされる。

シールドエネルギーが、0になった。

「お前の背負うものが、お前にとってどれだけ重いかなんて知らないが」

何が起きたのか理解できず、呆けていた俺の耳に。

「俺にとってあの3人は、俺の中で何より重い」

その言葉が、やけに響いて聞こえていた。

『試合時間 4分52秒 勝者 藤堂隆景』

☆月☆日 曇っていいとも

昨日はつい恥ずかしいことをペラペラ喋ってしまった。

織斑への前回のリベンジと、会長さんの手解きでどれだけ強くなったかの確認のつもりで引き受けたのに。

あいつが余りにも『入って』ないもんだから、少々苛ついてやってしまった。

それも公衆の面前で、エアリアル・ワルツまで使って。

まだ戦闘で使うには不安があったから、そんな出来ない物を晒してしまった。

現在絶賛後悔中。

会長さん達には絶対聞かれた。

何故か居た簪や山田先生にも聞かれたに違いない。

うう、恥ずい。

あんなん下手すりや3人全員にいつべんに告白したみたいじゃないか。

しかも1人は先生なのに。

どうしよう。二股三股かけるような最低野郎とか思われたら。

あの人達に嫌われたら、流石に死ねる。

頭を抱えてると、簪が起きた。

眠気の残る目をくしくし擦りながら、こつちを見る。

視線が合わせられん。

やがて彼女が手を伸ばしてきて、俺の手をきゅつと握る。

心なしかいつもより少し強めな気がするが……どうやら、嫌われてはいないようだ。

……良かった。

朝飯の最中、会長さんにもエンカウントした。

この人は大丈夫だろうかと内心気が気じゃなかったが、どういふ訳か寧ろ機嫌がいい。

いつもより笑顔が6割増しだ。何かいいことでもあったのだろうか。

まあ、機嫌がいいならそれでいいんだが。この人が笑顔だと、俺も嬉しいし。ところで、さつきから視線が突き刺さる。

先日の件で目立ってしまったからか、織斑並に視線が集まってキツイ。俺、目立つのあんま好きじゃないし。

結局俺の不安は、杞憂に終わってくれた。

山田先生も凄くご機嫌だったから。

あと……後で織斑には謝っておこう。

少し言い過ぎたし。

☆月◎日 タモリ あ、間違えたクモリ

模擬戦のお陰で荷電粒子砲の纏まったデータが手に入ったので、簪と整備室で作業中。

てか、ホントにどうやってキーボード3つも4つも使いこなせるんだろうか。前に真似して2つ使おうとしたが、頭痛くなって止めた。

簪が言うに、俺は『高速思考』タイプで『並列思考』には向かないらしい。



だから高機動時での制御に長け、逆に武装の展開等が不得手なのだろう、と。成程。本国にその旨のデータを送っておこう。

俺を相手に徹底的にやられたのが相当響いたのか、織斑の訓練風景が変わった。

前は半ば『義務』のようにこなしていたメニューを、自主的に行っている。

……何か学んでくれたんなら、こっちとしても戦った意義があるつてことで結構です。

だが、毎日のように再戦の要求するのは止めて欲しい。サムライガール達に睨まれるから。

暇を見て、俺自身もエアリアル・ワルツから螺旋軌道スパイラル・イグニッション・ブースト瞬時加速へ、若しくはその逆への移行を練習する。

瞬時切替。クイック・スイッチ要は俺にとって相性最悪な高速切替の機動バージョンで、全く異なる機動所作に瞬時に切り替えるテクニク。ラビッド・スイッチ

どんな動きも瞬時に引き出させてこそ、本当の『機動技術の天才』だろう。

これをモノにし次第、とある機動技術の習得に移ろうと思っている。

最速零速。マックス・オア・ストップ瞬時加速系統の技術で最上位に位置するワザで、その性質は言葉にすると至極単純。

最高速か、停まっているか。ゼロからマックスへ、マックスからゼロへとノータイム

で移行する、言わば擬似的な瞬間移動。

難度は特Aをも上回るS。それも理論上は可能と言われているだけで、実際にこれを習得したIS操縦者は全くのゼロ。

近接戦のみで世界最強の称号を獲得した織斑先生でさえ、これは使えなかつたと聞  
く。

だが、だからこそ挑戦のし甲斐がある。

……正直、ラファールでやれるかどうかは自信が無いけど。

☆月%日 夜になれば曇りかどうかなんてよく分からん

織斑が、あろうことかエアリアル・ワルツを覚えたいと言ってきた。

シューター・フローも満足にできないのに何を言うか。絶対無理である。

取り敢えず俺は人に物を教えるのが苦手——サムライガールやミニ子、お蝶夫人に比べればそりゃあマシだが——なので、織斑先生に頼んでこいと言っておく。

意気揚々と行つて来て、数分後に戻つて来た。

頭にたんこぶができてる。当然だがダメだつたらしい。

そりゃあそうだ。相応の地盤ができていないと、エアリアル・ワルツは身体を危険に曝す諸刃の剣である。

スパイラル・イグニッション・ブースト  
螺旋軌道瞬時加速？

そつちもダメに決まってるだろうに。

ダブルイグニッション  
二段階加速程度でさえ完全にモノにはしてないつてのに、何を言ってるのか。

もうこの際だから、イグニッション・ブースト瞬時加速からきつちりと教え直すことにした。

違う、そうじゃない。どうしてそんな無駄にエネルギーを放出するんだ。

☆月■日 曇りつて、いいよね

何故か本国から送られてきたティーンズ向け雑誌を見て、固まった。

なにゆえ俺の写真がでかでかど写っているのか。

数回電話で話したロシアの担当官は日本語ペラペラ……つか、IS関係者は基本日本語できるから全くロシア語の勉強をしていないので、字は読めないが。

多分『我が国の代表候補生、その素顔に迫る！』みたいな見出しが出てると思う。しかもフアッション誌に載ってるような服装で……いつ撮った。

……待てよ、確かこの前会長さんが色々手続きするからって俺を外に連れ出した際、

服屋で俺を着せ替え人形にしてたな。

あの時か。何がしたいんだあの人。

ちなみに今本国では、俺が愛用している色眼鏡のレプリカが流行中らしい。

しかも値段は円にすると6万。俺がかけてるの、3万なんだけど。何でレプリカの方が高価たかいんだよ。

てか、経済効果すげえ。俺の帰属が決まってるから、株とか全体的に大幅アップしたらしいし。

男性適性者の価値なんて解剖するくらいいしかなない、なんてどつかのニュースか何かで過激派が言ってるの見たことあるが……金の成る木じゃん。

本国もあつさり俺の候補生任命認める訳だよ。政府は今頃ウハウハだな。

雑誌放り出してうんうん頷いてたら、簪がシャワーから出てくる。

……タオル巻くだけじゃなくて、服を着て出てきて欲しい。最近不精って言うか、無防備なんだよこの子。

親友に手を出すほど落ちぶれてはいないので、悪しからず。

そして雑誌を発見。表紙を飾る俺の姿を見遣り、目を丸くした。

ああ止めて見ないで恥はずずかしい。

隠そうとしたら、その前に取り上げられる。

かーえーしーてー。

会長さんに文句を言いに行くことにした。

1025号室に入ったら、10冊ぐらいの同じ雑誌を抱えた会長さんが満足そうにしてた。

しかもそれは、雑誌に載ってた俺の色眼鏡のレプリカ！

……やっぱり俺のより高級品じゃん。

☆月：日 どよどよ

曇っている様子を擬音で示してみる。

クラスのロシア出身の子が、例の雑誌を持って話しかけてきた。

止めて、これ以上傷を挟らないで。

山田先生が3冊買ったとか言ってたけど、ホント許して。

会長さん曰く、代表候補生にはこうしてメディア露出なんかの仕事も結構回ってくるらしい。

特に俺は本国唯一の男性適性者だから、写真1枚が五千ルーブル札何枚にも変わると

のこと。

勘弁して下さい。

だがギヤラとして、結構な額を貰ってしまった。

ポケットに入れて歩くのが怖くなる厚みが。

捨て金が大量に手に入ったので、今度簪&会長さん交えた3人で休日にも食事でも取り付けた。

山田先生も誘ったんだが……当直だとかで断念。

お土産を買ってくることにしよう。

☆月A日 ク・モリー

本国から連絡。しかしこの担当官の女性、やたら声音が甘ったるくて聞き取り辛い。言葉自体はペラペラなのに。

なんでも専用機の件だが、急遽コアにひとつ空きが出そうなのだと。

そこで、俺に用意される専用機の名前を候補の中から決めて欲しいと頼まれた。

なんだそりゃ。何で名前がそんな一杯あるんだ。

その後メールで大量の名前のリストが届いたのだが、読めないので会長さんの所に行く。

100近い名前の内、過半数以上が厨二だった。

駄目だ。あんな名前のIS乗りたくない。

何だよ雪スニエグの姫君ラチカって。俺男だよ。

ヴォルグ・ズイェールカラ鏡の狼とか、意味分からんよ。

……会長さんとの30分にも渡る激論の末、専用機の名が決まる。

本国に連絡して、俺はそれを伝えた。

新星ノウヴァ。まともな候補がコレ含め数個しか無かったことに泣きそうになったが、割と気に入っている。

しかし。機体も出来上がっていないのに、どうして名前だけ決めなけりゃあかんだ。

☆月●日 お出かけ日和の曇り

休日、俺と会長さんと簪の3人で出かける。



いつかこうして出来たらいいと思ったことが本当に叶うと、こう、ほっこりした気分になる。

だがよく考えれば、他人が見たらこの状況はよろしくないのでは。

美少女姉妹を左右に歩く。うん、許されるならぶつ飛ばすね。

周囲の視線も、恨みや怨念の色が強い。

あ、今誰かがザキ唱えた。

アレだなコレは。普通に歩いてるならまだしも、会長さんは普通に腕を絡めて来ていて、簪は控えめに手を繋いで来て。

その所為で憎しみのパワーが増大している。

きつとこれを離せば多少は和らぐんだろうが、2人とも凄くご機嫌だからそれを損ねたくはない。

俺に呪詛が降りかかるだけで彼女達が笑顔なら、まあそれでいいや。

ふむ……よく考えたら、これってデートになるのか？

男1人に女2人だから違うのかな……悩む。

3人で買っ物を楽しんで、一緒に話しながら食事をした。

お互い最近あった面白い出来事なんかを語り合う2人の姿は、本当に仲の良い姉妹そのもので。

彼女らが仲直りできて良かったと、心から思う。

……そう言えば。

会話の内容が学園祭になったところで、俺はふと考え込んだ。

ウチの催し物って、なんだったっけ。

## 更識簪の手記

濡れた黒髪と、私のそれより幾分か暗い、赤い瞳。

そして、眼精疲労で直射日光を嫌うことから、ほとんど日焼けしていない白い肌。私が最初に彼と出会ったのは、学園入学式の日。

放課後『打鉄式』の組立作業を切り上げて、部屋に戻った時だった。

そこに居たのは半裸の男の人。

びっくりして、気を失ってしまった。

まさか私のルームメイトが、世界にも2人しか居ない男性適性者の片方になるなんて考えもしてなかった。

ただ、もう片方じゃなかったのはせめてもの幸いだと思った。

もしそうだったら、私はグーで殴っていたかも知れなかったから。

でも彼は、私にとつてとても付き合ひ易いルームメイトだった。

殆ど何も語らず、夜遅くまで起きて作業をしている私に文句も言わず。

それでいて、気遣いのできる人だった。

最初にそれを感じたのは、入学して数日後のこと。

思った以上に難航していたプログラム作成にピリピリしていたら、不意に肩を叩かれた。

『……飲め』

そう言われて渡されたのは、マグカップに入ったホットミルク。

舌が火傷しない適度な温かさで、ハチミツの香りが苛立った気分を解してくれた。

そんなことがあつてから、私は彼と少しづつ話すようになった。

と言つても、彼はとても無口だったから、大体私が喋っていただけだったけど。

彼はとても勉強熱心で、放課後はいつも自主的な補習授業を受けていると聞いた。

私が休日に整備室に行つて打鉄を組み立てると言つたら、興味深そうに一緒に行つてもいいかと聞いてきて。

そんなことが何回もあって、整備室で作業する時は彼が横に居ることが珍しくなくなっていた。

私は機体を一人で組み上げようと躍起になっていたけど、いつの間にか彼が手伝ってくれることを容認していた。

彼はフォローが上手かったから。1人じゃ押さえるのが難しいところに手を貸してくれたら、丁度欲しい工具を手渡してくれたり。

自分だけでやっているよりもずっとやり易くて、なんだか温かくて。だから、いつの間にか作業を2人でやるようになっていた。

……彼が夏休み中に、お姉ちゃんへの指導を受けていると知った時は、少しだけ、悲しかった。

彼が私とあの人を比べるようになったら。

周りが当然のようにしていることを、彼までするようになったら。

ちくちくと、胸が痛くなった。

だけど彼は、隆景は。

『……整備も少し、教わったが。お前の方が分かり易い』

訓練に使っているラファールの整備中に、そう言ったの。

私じゃあの人に、お姉ちゃんに適わない。

ずっとそう思い続けて、落ち込んでいた私の殻を。

隆景は簡単に、壊してしまった。

嬉しかった。

この人は私を見てくれる、この人は私を認めてくれている。

それが嬉しくて、だから。

だからこそ彼がこの学園から居なくなつた時は、本気で絶望した。

そしてお姉ちゃんが彼を連れ戻してくれて、隆景に縋り付いて泣いた。

ちなみに私は織斑一夏君が嫌い。

私から専用機を奪つた、それはもういい。

お陰で隆景と、一緒に居られたから。

でも許せない。彼の所為で隆景は危うく死ぬところだった。

隆景がそれを恨んでいない以上、筋違いの恨みだと分かっているけど。

それでも、嫌い。

お姉ちゃんのお陰でロシアの庇護を受けられるようになってからの彼は、以前にも増して成長した。

殆ど事故とは言え、以前敗れた織斑君にほぼ一方的に勝利したのだから。  
……その時に彼が言っていた言葉を、私は絶対に忘れない。

『俺にとつて楯無<sup>あ</sup>、真耶<sup>の3</sup>、簪<sup>人</sup>は、俺の中で何より重い』

私は、隆景のことが好き。

私に光をくれた彼が、私とお姉ちゃんの仲をもう1度紡いでくれた彼が好き。  
だからこそ、隆景とお姉ちゃん。

3人で、ずっと居られたらいいと思う。

「……………今日の、復習か？」

「わ……み、見ちや、ダメ……！」  
「？」

書きかけの想いを、見られないように慌てて隠した。  
……もうちよつとだけ、私の心は彼にはナイシヨ。



## 山田真耶の放課後

今年度から、私は初めてクラスの副担任を受け持つことになりました。最初は正直私なんか勤まるのかと不安で、頭の中で不安ばかりが勝っていて。けれど。

『それですね、これは明日の授業でやることなんですが……』  
『……成程』

こうして放課後、藤堂君の自主補習を指導させて貰って。少しづつ、自信を付けることができたんです。

藤堂君が私に補習をお願いしてきたのは、入学式の日からすぐのこと。

言葉少なに頭を下げた彼に、私で大丈夫だろうかと思いつながらも承諾しました。

藤堂君は『男性』であるからこの学園に入った存在で、だからこそ授業のレベルに苦戦していて。

それでも私の説明に頷きながら、ガリガリと力強い筆記でノートにペンを走らせていました。

その甲斐あつてか、彼は少なくとも授業について行けなくなる、ということは無くなって。

必然的に座学指導に充てていた時間は、徐々に実技指導の時間へと塗り替えられました。

武器を繰ることにかけて、彼はお世辞にも優秀とは言えませんでした。

けどそれは仕方の無いことです。適性Cという数値は、I S行使の際に何らかの綻びが出ることを意味しています。

藤堂君の場合は、そもそもの武器を扱う才能の無さに加えて、武装の展開収納が他人に比べて致命的に遅い綻びを抱えていました。

それはどうしようもないことです。恐らく彼は、どれだけ訓練を積んでも2秒以内に武装を展開させることはできません。

でも私は教師として、どうにもできないことが悔しかった。

だからせめて、彼が自由に飛べる翼をあげようと思ったんです。

そして藤堂君は、翼を繰ることにかけては天才でした。

搭乗時間数時間の状態で、空を軽やかに飛べるようになって。

ただ一度見せただけで、決して簡単ではない瞬間イグニッションブースト時加速を習得して。

私の教える機動技術の全てを、砂漠に水を撒いたかのように吸収する。

素晴らしい生徒でした。

それだけに、思いました。

彼に技術を教えるのが、私なんかでいいのだろうか。

もっと相応しい人が、もっと藤堂君の才能に見合ったことをして上げられる人がいる

んじゃないかと。

ある日、私はそのことを彼に伝えました。

すると彼は、少し考え込むようにして。

『……アドレス、を』

何故か携帯電話のアドレスを教えて欲しいと、そう答えました。

意図が分からなかったけれど、取り敢えず言う通りにしたら。

『……………』

カチカチと、少しの間携帯電話を操作した彼が。

私にメールを送ってきました。

喋るのがあまり得意じゃないからと、申し訳無さそうに。

『俺は貴女の教えに不満を持ったことなんてありません』

メールの書き出しは、そんな文章でした。

『授業にしても補習にしても、実技の指導にしても、俺にとって、先生ほど分かり易く親身に教えてくれる教師は他に居ません』

『だから自分など、なんて悲しいことを言わないで下さい。俺は貴女の教えを心から望みます』

『誰がなんと言おうと、貴女自身がなんと言おうと、山田先生は、俺にとって最高の教師

です』

それを読み終えた後に、私は思わず泣いてしまいました。

藤堂君はそんな私を見て、珍しく慌てたように困っていて。

そして。

『俺にとって楯無<sup>あ</sup>、真耶<sup>の3</sup>、人<sup>人</sup>、簪は、俺の中で何より重い』

織斑君との模擬戦の中で、話すことの苦手な彼がはつきりと言葉にした台詞。

それを聞いて、私は嬉しかった。

そして誇らしかった。色々な事情を織り込んだ末のこととは言え、入学して半年足らずでロシアという大国の代表候補生となった彼が。

だから私は、心から思いました。

藤堂君に、隆景君にしてあげられることをしよう。

そしてもう、自分の力を不安に思うことを止めよう。

だって、私は。

彼にとって、尊敬できる教師なのだから。

「……先生。少々、聞きたいことが」

「はい！ なんだって聞いて下さい、ばしばし答えちゃいますよー！」

私に弟がいたら……もしかしたら、こんな気持ちを抱くのかも知れない。

いつか彼に、「お姉ちゃん」と呼ばれてみたいと思いました。

## ☆月★日 世界的に曇れ

学園祭を数日後に控え、会長さんから呼び出される。

なんでもこの学園祭に乗じて、なんとかタスクって連中が乗り込んでくる情報が掴めてるらしい。

そいつらの狙いは、十中八九専用機持ちで男性適性者の織斑だとか。

奴らを誘き出す為の策に、一役買って欲しいと頼まれた。

内容を聞いてぶっっちゃけ物凄く断りたかったけど、会長さんに両手を合わせて「おねがい♪」と小首を傾げて言われ、コンマ5秒で了承してしまった。

アレを断るのは、俺にはストIIでガイル相手にザンギエフで勝つぐらい困難なことがある。せめてリユウを使わせてくれ。

……ホント、俺のバカ。

☆月←日 呪術で曇らせた

待つてもいない学園祭だこんちくしょー。

ウチのクラスはどういうわけか、メイド喫茶ならぬ執事&メイド喫茶だった。

当日になって初めて知った。

てか山田先生、なんでアンタまで接客してんだ。

メイド服恐ろしく似合うな、オイ。

俺に接客をやれとか、普通に無理だと思う。

クラスメイド達も扱いに困った様子だったが、「それでもいい」という客がなぜか殺到したので忙しくてしようがない。

さつきから延々『執事にご褒美セット』とやらのオプシジョンで、ポツキーをぼりぼりぼりぼり食わされてる。



俺少食なんだけど……もうお腹一杯なんだけど。  
会長さんが来た。何故かこの人までメイド服で。

容姿的には似合わなくもないが、明らかに傅くタイプの人じゃないから違和感がバリである。

そしてどういう訳か、一緒に連れてこられたらしい簪までメイド。

こっちは普通に似合う。

新聞部の人が来て、3人で一緒に写真を撮って貰った。

当然後で焼き増ししてくれと約束を取り付けた。

自由時間だが、まあ生徒会の出し物の準備で殆ど潰れた。

会長さんも一緒だったし、それは別にいいんだが。

これからやることを考えると気が重くなる。

それに……聞いた話だけでも、会長さんが危ない目に遭うかも知れない。

確かに彼女は俺よりも強い。

けれど。好きな女性ひとを心配するのは、当然のことだと俺は思う。

あの人は大丈夫だと笑ったけれど。

んで、いざ作戦開始。

作戦つても、俺はこの生徒会の出し物である観客参加型演劇『シンデレラ』で、織斑

同様王子役として出演するってただけけど。

しかし最早これは、シンデレラでも何でもないとと思う。

俺か織斑の頭上にある王冠をゲットすれば、そいつと同室になれる。

そんな触れ込みがあつたからか、参加してるシンデレラズはどいつもこいつも目が本気で怖い。

どうでもいいが、参加の条件が『生徒会への投票』って辺り、一石で何鳥も狙う会長さんの性格が見て取れるな。

そういうところも好きなんだが。

とにかく俺は、途中で消えるだろう織斑に意識を向けさせないよう舞台上で大立ち回りすればいいらしい。

その間に会長さんが、全部終わらせると。

正直そつちに行きたいんだが、まだ専用機を持っていない俺では役に立てないし。

だからこそ、できることをしようと思う。

執拗に織斑を探すサムライガールズ ver. シンデレラはともかく、何とか他の女子たちはこつちに誘導している。

まあ、ロシア系の生徒は最初から俺の方に来てたんだが。

王冠が外れると電撃が流れる仕組みになつているから、こつちも必死なんだ。

されど機動技術の天才、その力量を生身だからと舐めて貰っては困る！  
喰らえエアリアル・ワルツ生身バージョン！

他愛無し。

減速なしでカットしまくったから足の筋が若干痛い、生徒は振り切った。

そして耳のインカムから会長さんの連絡。

向こうも終わったらしい。これで俺の役目も終わりだ。

ひと仕事終えてホッとしてると、簪がとてとて近寄ってきた。

シンデレラ系のドレスも似合うなーとか思ってたなら、簪は手に持ってた精密ドライ

バー達を駆使して3秒で王冠の通電装置をカット。

そして王冠を取り、きゅつと胸元に抱きしめる。

……え？

や、早業過ぎて訳が分からなかったんだけど。

どうやって通電装置カットしたんだこの子。当然だが殺気も何もないから反応でき

なかった。

つーかドレス着てる時点で参加者だと気付け俺。

という訳で、俺は引き続き簪と同室ってことになった。

ちなみに織斑だが、会長さんが王冠持ってたってことであの人と同室。

要するに今までのまま……という訳だ。

ん、ちよつとだけ会長さんと同じ部屋になりたかつたと思う気もするが、そこはそれ。俺はまだあの人の横に立てるような男じゃない。

いつか、自分で自分を認められる日が来たら。

その時は、はつきりとこの想いを告げようと思う。

あと会長さんの迷惑通り、織斑は生徒会に入ることとなった。

役職は副会長。新参にしてナンバー2だが、その実態は他の部へのレンタル品なので同情しか湧かない。

俺？ 俺は忙しいから。

会長さんも俺は貸し出さないって、はつきり公言してたし。

……ま、あの人に怪我がなくて良かったよ。

戦利品である王冠を嬉しそうに飾ってる簪を眺めつつ。

俺は、心からそう思った。

♪月◎日 雲量0、だが曇りだ！

生身でのエアリアル・ワルツは無理があつた。

下半身を苛む筋肉痛に、悲鳴を上げそうだ。

されど、今の俺に悠長な休み時間など存在しない。

学園祭が終わり授業も通常運行に戻った今、次のイベントが控えているのだ。

そう、その名はキャノンボール・フアスト。

秋開催のISによる高速バトルレース。

本来は国際大会として扱われるが、ここにはIS学園があることから市の特別イベン

トとして学園の生徒達が参加する催し物なのだ。

あえて言おう。俺の見せ場であると。

ロシア代表候補生にして、国家機動部門代表候補筆頭の俺の為にあるような催しではないか。

なので早速一般生徒の中でも要注意とすべきライバル達の情報を洗い出す。

操縦ログから1組の鷹月、2組のハミルトンが最近頭角を現し始めている。この大会で一気に入台頭してくるかも知れない。

後は5組の四楓院と、7組のテストタロツサ、8組のヴィルヘルミナ……一般生徒の中で頭ひとつ抜けているのはこの辺りか。

……なんかこの3人、どこかで見たような連中ばかりだが……気のせいだろう。

気のせいだったら気のせいだ。統一性も無いし。

情報収集と平行して、当然訓練もしなければ。

高機動戦闘訓練用の第6アリーナは、しっかりと使用許可を受けている。寧ろ常連と言つても差し支えない。下手すれば又シだ、管理担当官とも普通に顔見知りだし。

後は使うパッケージ。当然使用機体はラファールだからな、それを踏まえた選択が肝要だ。

やはり機動特化型仕様の『サウンド・レイト』か、燃費こそ悪いが加速と最高速は第

2世代最速と謡われる高出力後付ブースター『アフターバーナー』のどちらかだろう。

妨害ありのルールを考えれば機動戦想定の『ソニックハービー』も有用ではあるが、戦闘行為そのものが得意じゃない俺には向かない。外見は好みなんだがな。

それにしても楽しみでしようがない。俺の持ち味が最大限に活かせるし、ここで結果を出せば山田先生や会長さんの名にも箔が付く。

本国も、俺に期待している様子だった。既に雑誌で優勝インタビューを企画していると例の甘ボイスな担当官が言っていたが、流石にそれは気が早いと思う。

何せ勝負とは水モノ、何が起きるか分からない。

最近は多少マシになったが、織斑のように「やれば何とかなる」と思えるほど楽観的にはなれないのだ。

人事を尽くして天命を捕らえる。やってやり過ぎということは無い。

そしてそれでも、勝てるかどうかは分からない。

だが、今の俺には立場というものがある。立場には実績が伴わなければならないのだ。

最低でも、上位入賞。狙うはもちろん優勝。

さて、『アフターバーナー』の貸し出し申請をしなければ。

♪月四日 晴れやかな曇り

中々な暴れ馬だぜ、『アフターバーナー』は。

スピードは間違いなく第3世代級だが、エネルギー効率が悪く恐ろしく悪い。

制御も高機動パッケージの中では群を抜いて困難、少しでもスロットルワークを間違えればあつと言う間にエネルギーが尽きる。

大会に近いこともあつてか、いつもより人の多い第6アリーナにちらほら見える生徒の中でも、コレ使ってるの俺だけだし。

ついでに言えばこのアフターバーナー、取り付けに武装の大半を外さなければならぬ。  
い。

武器、特に銃の扱いが下手な俺にはそもそも高機動時の射撃なんぞ、あつても無くても同じようなもんだが。

要するに今大会、純粋な機動技術のみで向かう必要があるのだ。

あと、ロシアから連絡。

新星は完成を急いでいるそうだが、キモであるスラストとブースターの調整がやや

難航しているらしく、装甲をコアに馴染ませる作業もありキャノンボール・ファストに



はやはり間に合わないとのこと。

専用機持ち達とスピード勝負してみたかったが、間に合わないのでは仕方ない。

なので、機体受領時に大会の優勝トロフィーを手土産として持参する心積もりで臨むことにしよう。

そう言えば簪は大会をどうするのか聞いてみたけど、まだ機体のフェーズが最終調整段階で、いきなり高機動での運用は不安があるから止めておくとのこと。

武装も、せめて荷電粒子砲は完成させておきたいと言っていたし。

♪月凸日 空が青い？ いやいや、あれは青い雲だよ

パッケージ装備状態でのスロットルワークも、山田先生と会長さんのアドバイスによりだいぶモノにできてきた。

ただ元々エネルギーを食うエアリアル・ワルツの使用は、できることなら控えた方がいい。

簪監督の下で行ったエネルギー分配効率セッティングと俺の節約技術を以ってしても、ちよいと厳しいものがある。

あと、最近気付いた。

この後付ブースターがあれば、リボルバー・イグニッション・フリースト個別連続瞬時加速ができるのではないかと。無論難易度はAの螺旋起動瞬時加速スパイラル・イグニッション・フリーストより上の特A、つまりエアリアルと同等の技術ゆえにそう簡単には行かないが。

コレが使えれば、奥の手として心強い。早速練習しよう。

まずはアメリカ代表であるイーリス・コーリングのIS操縦映像記録を、片っ端から見ることにした。

……むむ。2回に1回は失敗しているが、それでも不発に終わらせず途中でダブルイグニッション二段階加速に移行している。

素晴らしい技術だ。専用機のフアング・クエイクの仕上がりも見事だし、何より基礎的な技術が会長さん並に高い。

こいつは勉強になる。もうこうなったら、各国の歴代国家代表や機動部門代表の映像も集めるだけ集めよう。

途中から簪と、あと遊びに来た会長さんも交えて3人で批評会になっていた。あれ、俺何が目的で映像記録見てたんだったつけ。

♪月→日 曇りのマークの隆景製菓

二晩ディスプレイに齧り付き、各国の代表ないし機動部門代表の操縦記録映像を見た結論を述べよう。

イーリス・コーリング……素晴らしい使い手だった。

近接格闘主体の高機動戦闘型。つまり分類としては織斑に近いが、比べることもおこがましいほど技術レベルに差がある。

専用機のファンング・クエイクを手足の如く扱う経験値もさることながら、俺が最も感動したのはその判断力と対応力だ。

どの場面でどう動くべきか、相手の動きに対してどう対応すべきか。それらを身体が、完全に覚えていてる。

実際のところ、機動技術だけに絞ればその技量は俺と彼女に然程差は無い。

だと言うのに動きが全然違って見えるのは、つまりそう言うことだ。

今後の課題がはつきりと見えた。

俺には、動きの先読みとそれに対する対応、状況に応じた最適な動きを瞬時に引き出す応用力がまだまだ足りていない。

どんなに優れた機動技術を持っていようと、それが適材適所で使えなければ意味が無い。

要するに、これまでの俺はカードゲームで言うところのレアカードを集めていただけ。

これからは、そのカードの切り方を学ばなければならないのだ。

参考になったのは、イギリス・コーリングだけではない。

スペイン代表のミー、カナダ機動部門代表のレナ・ブルーム。

ひと通り観賞した映像の中でも、特にこの2名は俺にとって大きな収穫をくれた。

まずはスペイン代表ミー。何故か苗字は特定できなかったが、そんなことはどうでもいい。

彼女には驚かされた。

どちらかと言うとパワータイプ寄りの操縦者だったが、姿勢制御と回避の技術がずば抜けて高かった。

魔女を模した外觀のやたら装甲部が少ない専用機に、主武装はISを装着した状態の身の丈より更に巨大な斧。

そんな不安定な出で立ちをしているにも拘らず、どんなに斧を振り回しても姿勢がぶれない。

そして決して機動力は高くないと言うのに、ただ最低限の動きで防御と回避をこなす。

俺も習得している近接用戦闘動作『ステツピング・エスケイプ』の達人。悔しいが、練度がまるで違う。

余談だが、大変妖艶な美女である。故に動きを食い入るように見ていたら、簪や会長さんが何かを誤解しているような目を向けてきた。

違う、乳揺れ乳揺れを見ていた訳じゃない。

そして、4姉妹全員が代表ないし代表候補生に任命されている、『カナダのサラブレッド』ブルーム・シスターズの次女、レナ・ブルーム。

国家機動部門代表である彼女は、紛うことなき高機動タイプの操縦者だ。

歳は俺の1つ上、つまり会長さんと同い年。

レナ・ブルームは、俺含め世界で8人しか使えない機動技術『エアリアル・ワルツ』の使い手。

しかも抜群のスロットルワークで、最小限のエネルギーで以って超速移動をこなす。

……スロットルワークは、スペックの低い訓練機を使っている俺の方が多分上。

しかし彼女はエアリアル機動でのルート選択が上手い。

的確に最短距離、最適軌道を選択しているから、ただでさえ追うのが困難なワザであるのに更なる磨きがかかっていた。

流石は機動部門代表、俺の目指す最初の場所に居るだけはある。

血が熱くなるのなんて久し振りだ。この学園に来て改めて知ったことだが、やはり上を目指すのは楽しい。

できることなら彼女らの動きを生で見たいが、流石にそれは無理な相談だ。

後会長さんに簪、本当に違うから。

胸は特に見ていない、どちらかと言うと動きのキモである腰をだな。

余計に誤解された。

だから喋るのは嫌なんだ。

♪月○日　ハイカモン積乱雲

誤解を解くのは大変だった。

それはさて置き、ロシアからの通達である。

新星の完成予想スペックと、積載予定武装のデータが届く。

………馬鹿なんだろうか。

大型4機と中型2機の計6装スラスト。

スピードだけなら多分、競技用どころか軍用ISとしても十二分に通用する。

そしてこいつがノーヴァの第3世代機構らしく、イメージ・インターフェースにより他機体とは比べ物にならないほど細やかな出力調整ができるそう。

当然その分操作難易度も跳ね上がるが、俺にとっては少々面倒な程度だった。

ついでにコッチのスロットルワークを加味した調整らしく、燃費が織斑の専用機ほどじゃないが相当悪い。

SとFの7段階で分けたら、Dつてとこ。織斑の専用機をFとするならね。Aが差し

詰めで、武装。

こっちは、素直に俺のデータを参考にした物だと言える。

機動技術とは裏腹に、武装の展開と武器その物の扱いが致命的に不得手な俺。

その特性を良く考えていると言っておこう。

流石に予想とは言え詳細なスペックデータを他国の代表候補生である簪に見せるのはまずいから、会長さんとデータを睨めっこしながら話し合う。

あと15%装甲を軽量化した方がいいとか、シールドエネルギー総量をもう100減らしても大丈夫だとか。

色々纏めて、甘ボイスな担当官にメールで送っておく。

ちなみに電話連絡の場合、ディスプレイ通信にして俺は半分ほど手振りで意思疎通している。

それで理解してくれるのだから、担当官って凄い。



## 小話集

## 『藤堂隆景の一日』

朝。6時頃に大体起きる。

「……………」

割と寝起きがよろしくないもので、30分ぐらいは半身を起こしたままじっとしている。目が覚める前後くらいに、簪起床。

「ふわ…………おはよう、隆景…………」

「……………(コクツ)」

そして恒例の朝の握手(?)。

最近は慣れたもので、隆景の方からそつと手を差し出している。

「……………ふわ」

差し出された左手を両の手できゅつと握る彼女の表情は、柔らかく笑っていて。まさに、愛しい男へ向けるそれであった。

午前の授業。

教鞭を執る真耶の授業を聞く隆景の態度は、真剣そのもの。

「なので、この文の接続詞は——」

ガリガリガリガリ。

存外筆圧の強い彼がノートを取ると、ペンの音が荒々しい。

外見は全くの無表情であるギャップから、周囲の生徒も最初こそ何か不機嫌なのかとびくびくしていたが、今ではもう慣れっこになっている。

昼休み。

自炊スキルゼロ（実は掃除も洗濯もできない）な彼は弁当など当然作れないので、食が主であるが。

「……うまい」

「あ、ありがとう……良かった……」

最近は簪や楯無が作ってくれたりすることもしばしばあったりする。

極度の偏食家である隆景に食事を作るのは困難だが、お陰で楯無は元より簪の料理スキルも飛躍的に上昇していた。

ちなみに味付けだが、隆景は楯無の濃くも薄くもない絶妙なバランスのそれより、若

干薄味な簪の方が好きだったりする。

惚れた相手の作る料理を、必ずしも一番好む訳ではないのである。

まあたとえ全く口に合わなくとも、楯無の作る料理を残しはしないが。

午後の授業。

基本的に実技が主となる午後は、ここところは専用機持ちと一般生徒で分かれてメニューをこなすことが多くなっている。

しかしながら、ロシアの代表候補生である隆景は、グループとしては専用機持ち側に分けられていて。

「てやあつ！　せつ！　はあつ!!」

「……………」

実体剣状態の雪片で、ラファールを纏う隆景へと斬り込む一夏。

だがそのほぼ全てを身体の制動だけでかわされ、偶に芯を捉えた攻撃はシールドで防御される。

「……アレが……こう、傾いて」

「へ？ いや、ちよつと分からねーんだけど!?! 指をちよいちよいされても、何のことだ!?!」

擬音で説明する為、さっぱり意味が分からない筈。

『ノリで』とか『感覚よ』とか、そも説明になつていない鈴。

説明が具体的過ぎて、感覚派の一夏とはギアの噛み合わないセシリア。

そして、言葉足らずで何が言いたいのか理解できない隆景。

自分の周囲にしっかりとレクチャーできる者が教師以外ではシャルロット、ラウラ、楯無しかいない彼だが、それでも『ある条件』の下では隆景の説明は結構分かりやすい。

その条件とは。

「織斑君、つまり藤堂君は「剣を振る際に身体の芯が徐々に傾いて、追撃が出し難くなる傾向がある。PICとスラスターを併用した姿勢制御を戦いの中でも心がけるようにしろ」と言ってますよ」

「何で分かるんですか山田先生!?!」

彼としつかりコミュニケーションの取れる者が間に立てば、である。

放課後。

簪の専用機『打鉄式』が武装以外最終調整段階に入り、大して手伝えることの無い彼は、真耶の指導や楯無含む一夏達との合同訓練をしたりしている。

武装は正直門外漢で、こうした実戦データを保持していく位しか出来ないのだ。

「……………（スツ、ちよいちよい）」

「だから手振りじゃ分かんねえって!？」

怒鳴ったり怒ったり逆ギレしたりしない分、簪達よりはやり易かったが。

それでも伝えようとしていることは、2割も分からないのであった。

更に。

「あー、うんうん。そうよね、私もそう思ってたのよ」

「ええ……それと……（くいっ）」

「いいわね。じゃあそれでやってみましょうか！」

「わざとやってます？　ねえ、藤堂も楯無さんもわざとやってます!？」

楯無の場合だと、内輪話に発展することが大半なので、結局分からないままだったりする。

夜。

就寝前のひと時は、予習復習に資料閲覧と中々やることが多い。

そして今日は。

「……作画が、いいな」

「うん……戦闘シーンも迫力がある……」

2人して、ロボットアニメを見ていた。

簪は勿論のこと、隆景も何気に影響されたらしい。

『機動技術研究 スペイン代表ミー』

「……………」

『ハイ！ ブエナス・タルデス！ こんにちは！』

たゆんっ

「……………凄い専用機だな」



スペイン代表IS操縦者、ミー。

専用機の名は、『ダンスマカブル』。

爪のような手甲と金属のブーツ、三角帽子の形をした頭部装甲。

その他胸部と腰部を僅かに覆う以外装甲を持たない、軽量の機体。

更にスラスタは小型が2機のみと機動力も低く、一見か弱そうに見える。

しかし、それは誤り。

この専用機は容量の大半をエネルギーに注がれており、凄まじいパワーを誇る第3世代機。

主武装として扱う巨斧の威力は、近接武器でも最強クラス。

瞬く間に削られる、対戦相手のシールドエネルギー。

それに彼女は先程から、間合いを一切離していない。

相手側も当然近接攻撃で対応してくるのに、それらを全て身体のコなしだけで回避していた。

『昂ぶるわあ……壊れちゃダメよ?』

たゆんつ

「……ッ」（巨大な武器を扱っているにも拘らず、全く崩れない姿勢制御と近接回避技術に見入っている）

思わず隆景が、ディスプレイに食い付くと。

「……………」

何故か冷たい視線を感じ、振り向けば。

ジト目の簪と楯無が、そこに居た。

「また……スペインの人の、見てる……やっぱり、胸……？」

「責めちゃ駄目よ、簪ちゃん。隆景君だって男の子なんだから」

何やら誤解を受けていた。

流石に心外なので、ふるふると首を振って隆景が否定する。

「……胸は、特に……どちらかと言うと……腰を」

『腰フェチ』のレッテルを剥がすのに、殆どひと晩使った隆景であった。

『ほとんど出落ち』

「藤堂隆景さんは居ますか！」

キャノンボール・ファストの近付いたある日、1組をある女生徒が訪ねてきた。

彼女は他の者には目もくれずに、ディスプレイを操作しパッケージのエネルギー分配

を思案していた隆景の前に立った。

「……………？」

視界に影が差して、前を見る。

するとそこには、長い金髪をツインテールに括った、赤い瞳の少女が。

「こんにちは。私は7組のフェイト・テスタロッサです。今日はどちらが学年最速かを決める、その宣戦布告に来ました」

「……………」

それは暗に、速さにおいては他の専用機持ちなど歯牙にもかけないという自信の表れ。

隆景はしばしの間、じつと彼女の顔を見ていたが。

「……………出落ち」

「ええ？」

「世界観を崩すな。ミッドチルダに帰れ。何で制服を黒に染めて、しかも秋だと言うのに袖が無いんだ」

ぐさ、ぐさ、ぐさ。

彼にしては珍しい容赦の無い口撃が、テストロツサの胸を貫く。

何よりもまず、制服のデザインがいただけなかつた。

♪月?日 空を曇りにする程度の能力

はて。

ブルーレイに保存しておいた、ミーの戦闘映像記録が見当たらない。

レナ・ブルームとイーリス・コーリングのはちやんと置いてあるのに、何故?

簪に聞いてみた。

首を傾げて知らないと言われた。

どこ行つたんだ……もうちよいで彼女の動きを盗めそうだったんだが。

スペイン代表の動きは大変参考になる。

何せ『ステッピング・エスケイプ』やその他近接技術は、織斑先生にも引けを取らないからな。

あの人に、「雪片が無ければ確実に勝てるかどうか分からん」と言わせるぐらいの使い手だし。

流石は第2回モンド・グロツソの総合3位にして格闘部門『ヴァルキリー』。パない。

マジで1回直に戦う姿を見てみたいと思ったが、揃って面識があるらしい織斑先生と会長さんは微妙な顔をした。

そして口を揃えて、「会わない方がいい」と。

……なんで？

あとディスクだが、会長さんが持って行ったらしい。

ミーの近接技術は大変参考になる為、織斑にも見せるのだと。

や、別にいいけど……せめてひとこと言ってくれ。

まさか、まだ誤解したままなんじゃ……。

♪月◎日 曇りの守護者

………ミーの、ミーのブルーレイが。

スペイン代表の技術が収められた映像記録媒体が、粉々に……。

織斑が戦闘記録を見ていたら、サムライガールズの数名が部屋に来たとのことで。

何度も言うようだがスペイン代表は大変妖艶な美女、それも外見的に少々過激な専用機を使っている。

あらぬ誤解を受けた奴さん、相当ボコボコにされたらしく。

ついでとばかりに、ディスクも破壊されたのだ。

なんでやねん。

AV観てたならまだしも、戦闘記録だろうが。

どんだけあいつ等嫉妬深いんだよ、流石に呆れるよ。

そして俺のディスク……また焼き直さないと。

特に悪くないのに、織斑が必死に謝ってきた。

いや、別にいいんだけど。それよりさっさと誤解でも解いて来いよ。

俺でさえひと晩かかったんだぞ。あの優しくて物分りのいい簪と会長さん相手に、ひと晩。

お前の場合三日三晩かけても足りないんじゃないだろうか。



あと、また例の出落ちに絡まれた。

お前が出てくると話がややこしくなるって言うのが分からんのか。

ミツドチルダに帰れ、露出狂。

黒制服ミニスカノースリーブって、何に對して気合を入れているのだ。  
あとの2人まで集まってきたらどうする気だ、帰れ帰れ。

♪日！日 曇れ、さもなくば死ね

寄って来たよ。

もうヤダ、俺突っ込み担当じゃないのよ。

ミツドチルダに帰れ。

ソウル・ソサエティに帰れ。

紅世に帰れ、お前ら。

出落ち3人も相手にしてられないので、逃げる。

もう2度と会わないことを祈ろう。

♪月#日 私の曇天力は53万です

他2名はともかく、テスタロツサを振り切れねえ。

だつてあいつ、更に加速するとか言つて制服脱ごうとするんだもの。

服を脱ぐことで空気抵抗云々と説明されたが、こつちとしてはたまつたものではない。

簪や会長さんに誤解される、止めろ。

仕方ないので、この色んな意味で危険な出落ちと第6アリーナで合同訓練などすることに。

思えば7組の奴となんて初めてだ。授業だと、基本2組とだし。

……………速い。

機体のセッティングとか、スラスターの使い方とか。

そういつた理屈以前に速い。

機動技術で言えば俺の方が当然上だが、その中の更に一点、スピードだけに限定すれば俺と殆ど遜色ない。

エアリアル・ワルツこそ見せていないが、単純な機動だけなら会長さん以上の俺と互

角。

成程、専用機持ち共をガン無視して俺に最速勝負の宣戦布告をしてくるだけはある。絵面的に作品の関係でマズイ気もするけど、こいつとの訓練は会長さんや山田先生とは別の意味で実になる。

特に今俺が必要としている機動技術の応用力や対応力、ルート選択等の即時判断などが養われる。

気付けば互いにスラスターのエネルギーが尽きるまで飛び回っていた。

……出落ちの癖にやるじゃないか。

要注意人物にマルをつけておいたのは、正解だった。

負けられん。

こちとら機動はたったひとつの自慢なんだ。

それに俺にはまだまだ伸び代がある。

向こうも同じことが言えるが、絶対負けん。

ま、出落ち呼びわりは止めることにしよう。

いざとなったらタグを追加する覚悟で、俺の好敵手と認めることにした。

互いに握手を交わす。

簪に見られて、少しむくれられた。

♪月⇄日 気付いた。曇りじゃないなら曇りのところに行けばいいと

マガジンの人気漫画を読みつつふと思って、周囲の人達に『七つの大罪』の起源と言われる『八つの枢要罪』のどれが当て嵌まるのかを考えてみた。

まずサムライガール。迷うところだが『憤怒』。

続いてお蝶夫人。言うまでもなく『傲慢』。

ミニ子。サムライガールとやや被るが、こっちは『強欲』の色が強いと思う。

オスカルはアレだ。ガールズの中では比較的穏やかな『嫉妬』。

ミニマムシルバーこと薔薇水晶はいつそ『暴食』だね。肉食系女子的な意味で。

ちなみに残る『憂鬱』は簪、会長さんは……『虚飾』？  
『性欲』は山田先生辺り。

図にして訓練中の織斑に見せたら、納得の後に爆笑された。

背後にいた5人に、襟首持つて引き摺られて行つたけど。

暇になってしまったので、会長さんと模擬戦を行う。

ミステリアス・レイディは外見に反して防御が厚過ぎる。緻密なナノマシンコントロールの結果だろうから、会長さん以外が使つたら途端に半減するだろうけど。

……しかし。レイディノイズアといい新星に積載予定の武装である『アレ』といい、ロシアのISは独特だな。

なんでも完成は、キャノンボール・ファストが終わつて暫くした辺りらしい。

スラストの調整は俺が毎日のように送るデータに加え、先日のテストロツサとの合同訓練でかなり質のいい機動データが取れたらしく、無事上手く行つたらいいのだが。

今度は武装の取り付けがアレらしい。確かにあの武装は分類としては特殊兵装に該当するし、ロシアとしても実際に投入するのは今回が初だから、難航するのは分かる。

その上操縦者が世界に2人しかない男性適性者だし。俺としては訓練機でも十分技量は磨けるから、納得行くまで技術者様方は頑張ってくれていいと思う。

それに、もし万が一キャノンボール・ファストに間に合うなどと言われたら盛大に困

るところだ。

今からじゃあ殆どぶっつけて機体を使わなければならない。せめて専用機で20時間は訓練をさせて欲しい。

そして何より、そんなことになったらテストタロツサと決着をつけられないじゃないか。奴とケリをつけて学年最速の称号を頂いた後に、専用機を受領させて貰いたい。

ブレードを投げ付けて会長の動きを一瞬止めた隙に、エアリアル・ワルツへと移行する。

カナダ国家機動部門代表レナ・ブルームのルート選択術を準拠したニューバージョンだ。会長さんとして、簡単には捕まえられん！

放った蹴りが水の盾で勢いを殺され、ついでにとつ捕まってフクロにされた。

やっぱつえーや……。

♪月\$日 屋内なら晴れてても関係ないし

本来休日には訓練に充てているのだが、今日は珍しく本当に休日である。

こここの所織斑達に構いつ放しだった会長さんが、簪と俺の3人で遊びに行こうと誘っ

てくれたのだ。

さらば訓練。数日後のキャノンボール・ファストも、今だけは忘れよう。

我が好敵手テスタロッサ。あ、顔思い出せない。

最近では代表候補生のギャラで懐が暖かいどころか発熱しているので、支払いは全て俺が。

どうせ金なんてスマホ買い換えるぐらいにしか使わないし、親しい女性と出かけるというのに支払いをさせるなんて俺の矜持に反する。

そも、2人とも今更そんな細かい遠慮する仲間でもないし。

なんか織斑がオスカル連れて他の女と出くわし、軽く修羅場つてる光景が遠くに見える気もするが、あんな今に始まったことじゃないので放っておく。

頑張れ、織斑。何ならロシア来るか、我が国は国として認めてこそいないが、内実増えてるらしいぞ一夫多妻。

俺は1人居れば十分だと思っただけね。

面白い物に食事と、オーソドックスな休日デートを過ごす俺達。人数は3人だけだ。

でも遊びに行くならこの図がすっかり恒例化して、違和感もまるで感じないよ、もう。

ISグッズ専門店を発見した。

……例のお高いレプリカ色眼鏡を見た気がしたが、気のせいだろう。

おお、これはスペイン代表ミイのブロマイド。

こっちはカナダのブルーム4姉妹の専用機キーホルダーか。

なんとなく買おうとしたら、後ろからやや冷たい視線を感じたので止める。

まだ腰フェチの汚名が、完全には晴れていない様子だった。

解せぬ。



♪月「日 キング・クリムゾン！ 『晴れ』という過程を消し去り、『曇り』という結果を残す！

やって来ましたキャノンボール・ファスト。

アリーナは超満員の大盛況だ。各国のIS関係者や政府関係者も、当然集まっている。

ロシアの役人さんも来てた。1年の部と専用機部門での優勝はロシアがいただきだと、悪役笑いしてむせてた。

慣れないことやっただと思う。

あとついでに。

実はこのレース、本来は2、3年だけで学年別に行われるものだったらしい。

けれど今年はやたらと学生に専用機持ちが多いことから専用機部門が急遽作られ、俺やテストタロツサなど一部の1年に頭ひとつもふたつも抜き出た者が散在していたことから、同じく1年の部も設立。

例年よりも規模のどかい、一大イベントになったという訳だ。

さて、最初のプログラムは1年の部。

つまり初っ端から出番だった。

ラファールに『アフターバーナー』を装着、待機する俺の元に、会長さんや簪、山田先生に織斑達が集まって、激励を飛ばしてくれる。

ま、仲間内でこれに出るのは俺だけだし。織斑先生まで来てくれたのは正直意外だったが。

そしてレース開始。

感想としては、そうだな……上位陣が結託して、まず俺とテストタロツサを総掛りで潰しに来やがった！

古武道の達人である四楓院は、巧みな高機動制御で絶え間なく拳と脚を飛ばしてきて。

機動特化でこそないが、オールマイティに技能の高いヴィルヘルミナ——こいつの場合逆に苗字を知らん——が、何を考えているのか10本のワイヤーブレードで全方位から攻撃を仕掛け。

やはり睨んだ通り頭角を現した鷹月とハミルトンが、中々のテクで援護射撃をかます。

特にワイヤーブレードは死ぬかと思った。機動技術が如何に高かろうと、それが回避に直結するってわけでもないのだ。

お陰で開始早々エアリアル・ワルツを使う羽目になり、エネルギーを大分無駄に消耗した。

だがしかし！ 四楓院の格闘技術はまだ会長さんには及ばず！ 拳に蹴りを当てて弾き返し、隙ができた所を吹き飛ばす。

うん。実は俺、銃も近接武器も苦手だけど蹴りは結構得意だったりする。生身でも回し蹴りとか超得意、密かなあだ名が『IS学園のジャンクロード・ヴァン・ダム』だ。続いてアフターバーナーの超加速を利用し、アサルトライフルを構える鷹月を撃破。同時にテストロッサが、ハミルトンを撃破。

ヴィルヘルミナは厄介なので放っておく。あいつのワイヤー操作はホントに一般生徒かと思えるほどの練度だが、特化型の俺やテストロッサに追いつけるほどの機動技術

はない。

更に装備パッケージの差もある。アフターバーナーで一気に引き離し、ワイヤーの射程圏外に出た。

残る敵はテストタロツサのみ。奴の装備パッケージは機動特化仕様の『サウンド・レイト』、流石にすぐには引き剥がせない。

ついでにこいつには、俺と違い戦闘技能もある。奴は主武装の実体大鎌、『ノワール・サイズ』でこちらに幾度も斬りかかった。

……………ええい、仕方ない。こうなつたら奥の手だ！

横薙ぎの回し蹴りで鎌の側面を弾き、巧みな連撃に決定的な空白を生ませる。

1秒邪魔が入らなければ……………!!

リボルバー・イグニッション・ブースト  
個別連続瞬時加速。

成功するかどうかは少々賭けだったが、上手く行った。

今まで感じたことが無いほどのGを帯びた、急激な加速。

設計想定外の圧がかかっているからか、ラファールが悲鳴を上げる。

だが……………それももう終わりだ。

ゴールイン。俺の前には誰も居ない。

湧き上がる歓声。アリーナの空間ディスプレイに、俺の姿とタイムレコードが表示さ

れる。

数秒遅れて到着するテストロッサ、続いてゴールするヴィルヘルミナ。手強いライバル達を押し退け、俺は見事に勝利を手にしたのだ。

セッティングを手伝ってくれてありがとう、簪。

パッケージ装備時の操縦指導をありがとう、会長さんに山田先生。

そして……テストロッサにも礼を言っておこう。

速さで俺に並ぶ者の存在で、俺はまたひとつ自由に飛べる翼を得た。

これでロシアの役人さんにも面目が立つってもんだ。

また悪人笑いしてむせてる。やり慣れないならやらなきやいいのに。

……まあ、ここまでは良かったんだが。

俺と簪が無茶な加速でぐずったラファールの修理をしている最中、専用機部門のレース中に例のなんちやらタスクの襲撃があったらしく。

せつかくのレースは、中断になってしまった。

トロフィーは貰ったけど、少し気まずいんだが。

なんか浮かれてるみたいで。いやいや実際浮かれてたけど。

けど会長さんが笑顔で褒めてくれたので、そんなもんでも良くなった。

\$月#日 シェンローン！ 今日曇りにしてくれー！

キャノンボール・ファストでの優勝からしばし。

中断されたとは言え、専用機部門以外のプログラムは消化されていた訳で。

1年の部で優勝した俺の活躍は、新聞やテレビなどでも報道され、今まで以上に顔と名が知られてしまった。

ここところは織斑以上に騒がれている気がする。

休日に街を歩くのも難しくなってきた。アイドルでもあるまいに、何故変装なんてしなきゃならないのだ。

ついでに日本政府は今更のように、俺が日本人つてことで帰属の権利をロシアに主張しだしたらしいが……本当に今更だな。

だが残念なことに、俺は既にロシア国籍なのだ。それと会長さんが色々根回ししてくれたらしく、バラバラになってた家族も今はロシアで一緒に暮らしている。

住み慣れた土地を離れさせて申し訳ないと思つたが、両親はロシア料理が気に入つたらしく永住すると言い張り、兄貴に至つてはロシアの美女を口説いて回る日々に忙しいとのこと。

親はともかく、兄貴は殴つところ。前に会長さんを紹介してくれとうるさかつたし。それに知ってるんだぞ俺。俺の研究所送りで加盟国から採決取つた時、日本政府が賛成してたの。

つーか、反対したのはロシアとスペインとアメリカの3国だけだったよ。

人道つてもんがねーのかオイ。

ちなみにロシアが俺をすんなり代表候補にできたのは、その採決で反対してたのが大きかつたらしい。

そうだ、ロシアと言えばそろそろなのだ。

いよいよ俺の専用機である『新星』<sup>ニュースター</sup>が完成する。

当初の予想よりかなり早いっちゃ早いけど。確実に来年以降だと思つてたもん、俺。

ついでには機体の最終テストと受領の為、しばしロシアまで行かなければならない。  
向こうでの滞在期間とか考えると……専用機持ちタッグマッチにはギリで間に合  
わん。

中々イベントに参加できないぜ。間に合ったら間に合ったで、専用機での訓練準備期  
間無くて困るんだが。

武装が特殊過ぎて、使用に相当の慣れが要りそうなんだよ……それに俺、イメージ・  
インターフェースの使用訓練一回もしてないんだよ。

本国の方でそれを短期集中コースメニュー組んで貰ったとして……あー、マジでギリ  
間に合わん。

タッグマッチは無理だな。今回からは、せっかく簪も参加できそうだったのに。

『打鉄式』だが、遂に武装含め完成したのだ。

マルチロックオン・ミサイルは単一ロックシステムを代用せざるを得ないのだが、そ  
れ以外はパーフェクト。

特にスラスターの出来は神だ。前作である打鉄とはまるで違った機体性能に皆も驚  
くことだろう。

……ん？ でも俺が間に合わなくて丁度いいのか？

確か専用機持ちは3年に1人の2年に2人、1年に俺含めると8人で11人。



タッグマツチだと一人余る。俺が欠けてるのはある意味好都合か。会長さんと組みたかつたんだが。ほら、ロシアコンビで。

そもそも戦闘型じゃねーから俺。誰と組んでも大して変わらん。

しかし俺が出られないとなると、やっぱ簪と組むのは会長さんか？

織斑なんかは苦勞しそうだよな……誰と組んでも地獄なんだからよ。

\$月%日 曇ればどうということはない

……さて、どうなってるんだ一体。

専用機持ちタッグマツチのタッグ申請が出揃ったと聞いたから、どんな組み合わせになつたのかなーと興味本位で織斑先生に聞いてみれば。

まずダリル・ケイシーとフォルテ・サファイア。

……誰？

次にお蝶夫人とミニ子。

妥当と言えば妥当だと思う。

オスカルは、柳生ちゃんことボーデヴィツヒと。

こいつらもまあ、相性はいいし。

だから俺はてつきり、織斑はサムライガールと組んだのかーと思つてたんだが。最後の2組が、予想外にも程がある。

『織斑一夏&更識簪』

『篠ノ之箒&更識楯無』

何が起きればこんなシャツフルユニットが発生するんだ。

サムライガールに会長さんはともかく……織斑と簪つて、俺には上手く行く様子が見えないんだが。

なににせよ事情を聴くべく、会長さんの所に。

ひと仕事やってやったぜつて顔をしてたこの人に、仔細を尋ねた。

なんでも、簪の織斑に対する恨みを解そうとした試みらしい。

あと友達作りのきっかけ。

簪はかなり渋つたらしいが、姉のお願い攻撃をかわしきれずこれを承諾。今も渋々合同訓練しているのだとか。

彼女としても、自分の恨みが逆恨みだと分かっているからだろう。

俺としても自分が原因で簪に人を恨んで欲しくは無かつたし、これを機にせめて普通の会話ぐらいはできる仲になってくれればと思う。

……部屋に戻ったら、すつごく不機嫌そうにキーボード叩いてたけど。

\$月\*日 俺が曇り？ 俺がcloudy!?

ストレスの溜まってるらしい簪がヤバイ。

目が据わってたのでほつぺをコネコネしておく。

柔らかいなオイ。

できることなら織斑と簪が友達ぐらいにはなれるようフォローして回リたかつたんだが、生憎と俺は明日からロシアに行かなければならない。

機体の受領とか起動テストとかその他諸々の都合で。

……いや、寧ろ俺が居ない方がいいかも知れん。

俺の後ろに隠れて織斑に呪詛の視線を送る簪を見ながら、そう思った。

\$月へ日 ソビエトの空は灰色だった

いざ、やってきましたロシア。

いやー、懐かしいなー。初めて来たけどな！

すっかり仰々しい移動だったよ。学園の私有ジェット機に打鉄2機が警護についた。

帰りはもう専用機があるから、普通に民間の飛行機で戻るけど。  
はてさて、空港からは車での移動になる。

迎えを寄越してあるとのことだが、どこにいるんだ？

それとどうでもいいが、空港についてから凄い注目度だ。

……あ。あそこに貼ってあるのは俺のポスター。

やめて皆さん交互に俺と見比べないでお願い。

目立ってしようがないので、せめてもの対抗策に最近外出時に使ってるキャスケット帽と、パープルの色眼鏡で容姿を誤魔化すことに。

そしてどこだ迎えは。甘ボイスの担当官は、見れば分かると言っていたが。

……………居た。

世紀末的に似合わないサングラスをかけた見知っている男が、居た。

近くの女性に声をかけまくっている奴が、居た。

取り敢えず、兄貴に回し蹴りをお見舞いしておく。

何でてめーがここに居るんだ。

とうとうもとはる  
藤堂元春。

どこに出しても恥ずかしい俺の兄は、あろうことか俺の専用機を製作しているアミエーラ社で最近になってアルバイトをしているらしい。

ドーせあそこの社長令嬢あたりが目当てなんだろう。以前俺の専用機製作を受けた件で、わざわざ社長自ら挨拶に出向いて頂いた際に、一緒に来日して1度だけ会ったことがあるが、かなりの美少女だったし。

名前なんつたっけ……アリサ・イリーニチナ・アミエーラ？ 学園の出落ち連中と  
いい、最近どうもどっかで見たような連中とよく会うのは気のせいだろうか。気のせい  
だと思いたい。

しかし兄貴よ、俺を迎えに来たのはいいが車の免許持ってたか？ ギリ18じゃねえ  
か。

持ってた。ドヤ顔された、うざい。

外に停めてあつた車に乗り込み、アミエーラ社所有の試験用アリーナのある本社まで  
向かう。

……これジルじゃねえか……事故るなよ、馬鹿兄貴……。

事故りやがった。

何が「高級車は肌に合わんな……」だ。免許とりたての癖しやがって。

曇りなのにサングラスなんかかけてるからだ。ぜんぜん似合ってるねーんだよ。  
社の方から迎え出して貰った。

兄貴のバイト代は向こう3ヶ月は飛ぶことだろう。

\$月！日 いつから曇りではないと錯覚していた？

昨日のことは記憶の彼方へと忘れ、稼動試験に移るとしよう。

朝飯はアミエーラ氏と会食だった。テールブルマナー覚えといてよかった、ありがとう  
会長さん。

何故か俺、この人に異様に気に入られてるんだよな……。

稼動試験はまず起動テストから最適化を済ませ、機体を一次移行させたなら機動テス  
ト。ややこしいが間違えないように。

そして武装テスト。ノーヴァの武装はひとつだけだが、特殊兵装に分類されるためこ  
こはみっちり行われる。

メインはその3つで、後はちよいちよい細かいのをやったら受領完了。家族の方に顔  
出して、帰る予定である。

図面とCGで完成図は知っていたが、実物を見るとまたアレだ。  
……かっけー。

機動性を追い求めたシャープで鋭角的なフォルム。総じて大型な第3世代機の中  
じや少し小柄で華奢だが、これがイカス。

カラーリングは黒に近いダークブルー、これまたかっけー。

つかスラスターまじバねえ。織斑の専用機にも引けをとらない大型のが4機と、主

に制動補助で使う中型2機の計6機、ウイングスラスターが備わってる。

すっげー機動力ありそう。絶対暴れ馬だなコイツ。

乗った。フィッティングして、一次移行完了。

なんだこれ。機体調整を操縦者に100%合わせると、こんなに違うもんなのか。

織斑が初戦でお蝶夫人相手に善戦できたわけだ。ただ立っているだけなのに、動きの切れが根本的に違うと身体の芯から理解できる。

これが専用機。これが第3世代機。

スペックの何もかもが、ラファールとは比べ物にならない。あれだって本来は第3世代初期と同等の基礎性能は持っているが、訓練機はデチューンしてあったし。

試しに浮いてみた。10センチほど上昇する筈が、反応が鋭すぎて50センチ上がってしまふ。

……面白い！

即座に、ラファールから打鉄へ、またはその逆へ乗り換えて、機体毎に異なる反応へと自分が合わせる訓練をした時の感覚を思い出す。

アレと同じ。コイツに俺が合わせればいい。

加速する。初速でトップスピードのヴェイロンも軽くちぎれる速度に達する。

音速越えをした辺りで急停止。停止時間は0.08秒。



遅い。こいつならもうコンマ03秒早く止まれる筈。

俺の持つ機動技術を、片っ端から試してみた。

はっはっは。甘い、甘い、俺の制御が甘い！

ラファールで鍛え抜いた俺の機動技術でも操りきれん！　まだノーヴァに慣れていないことを加味しても、話にならん！

最高だ。乗りこなし甲斐がある。

技術者様方に頼み込み、数日ほど時間を貰う。

その間にこのじやじや馬を、なんとしてモノにしてやろうじやないか。

\$月◆日 あなたが落としたのは金の曇り？ それとも銀の曇り？

経過は中々だ。

新星の奴はかなりの御転婆さんだが、技術基礎をほぼ完全にマスターしている俺の技ノリウツア量なら、慣れ次第で理論上は言うことを聞かせられる筈だと担当官が言っていた。

てか、あの甘ボイス技術者だったのね。考えてみれば、直に会うのも初めてだ。ちなみにノーヴアの待機形態だが、なんと色眼鏡だった。

俺の目のことを考慮に入れてくれたエンジニアの方々が、男が派手なアクセサリーもないだろうと設定してくれていた。

レンズの色は前のライトブルーからダークブルーに変わったが、寧ろ前より良く見える。

どうやら待機状態でも機能の一部が使えるようで、UVカットだけでなく透過光量の自動調整、視力補正など大変ハイテクな色眼鏡に変貌した。

これでもう、レプリカの方が高いなどと言わせない。コイツは言うなれば、世界一高価な色眼鏡だ。

超便利。もう手放せない。

あとどうでもいいが、兄貴がアミーラお嬢さんから口癖の「どん引きです」を、今日だけで13回食らってた。

ほんつとどうでもいいわ。

\$月◎日 曇ることから逃げるな！ これは、命令だ!!

機動訓練中に、偶然とんでもないことをしてしまった。

イクシジョン・フーリスト  
瞬時加速を応用し、動きの緩急を高めようと試行錯誤していたら、なんと残像を残していた。

リアル残像拳。何度か繰り返し試してみたところ、他のISでも可能な動きらしく、そして明らかに新しい機動技術として教本に載せられるレベルのモノだと。

名称は『クロス・イグニッション・ブースト残影 瞬時加速』。難度は推定A―。

更にこれは、当然だが本来センサーを誤魔化すことまではできないのだが、ノーヴァの場合限定で『あること』をすれば、コンマ4秒ハイパーセンサーを錯覚させられるらしい。

その数字を聞いて愕然とした。高機動型のISなら、それだけあれば2発は殴れる。通常の瞬時加速よりやや反動と負荷が大きい為に連発こそ難しいが、俺の睨みだと3連はイける。

こいつはいい。学園に戻ったら会長さんに教えてあげよう。

後織斑にも。ちと難しいが、瞬時加速が得意なあいつならもしかしたら覚えられるかも。

前にドラゴンボール好きだって言ってたし、きつと必死に練習するぞ。

それと、新しい技術を確立したら、それだけでも結構なおひねりが入ってくるのとこのと。

……内緒で兄貴のぶつ壊した車の修理代差っ引いてくれと、頼んでおいた。

アミエーラお嬢さん、いくら兄貴がうざいからって俺の後ろに隠れるのをやめて下さ

い。

だって俺もうざいんだもの。

\$月☆日 雲は出ているか!!

半ば訓練と化したテストを終わらせたら、帰る前に顔を出す予定だったんだが。親父とお袋が、わざわざ向こうから会いに来た。

慣れないロシアで少し痩せ……てはないな。

寧ろ、親父に限っては太ったんじゃないのか。

ロシアの漬物は旨い？ 前菜とスープの種類が多くて毎日飽きない？

……あつそ。いや、満足してるならいいんだよ別に。

軽く話した後、帰って行ってしまった。

半年近く会っていない次男に対して、これはないんじゃないだろうか。

兄貴、アミエーラお嬢さんは脈無いからやめとけ。

下乳なんて単純な色気に引つかかりやがって、別に見下げ果てはしないが。

だって元々見下げ果てるし。

学園はどうかなーと思ひ、会長さんに連絡する。

簪が、俺が居なくなつて禁断症状を起こしている以外は順調とのこと。

織斑と会話する際の距離も、5メートルから4メートル80まで縮まつたらしい。

……誤差だろ、それ。

\$月?日 ソロモンよ、私は曇つてきた!

約束の期日が過ぎ、今日から武装のテストに入る。

実はこいつのデータ取りが、今回一番の目当てだったりするんだが。

機動の方は、一応満足できるレベルには達した。

残影クロス・イグニッション・ブースト瞬時加速含め学園のアリーナで更なる研鑽を積むのは当然だが、少なくとも

受領終了前としては水準に達している。

専用機なのに稼働率5割以下とか、許せんし。

……しかしながら、改めてアレな武装だな。

誰が考案したんだこんなもの。特殊兵装の中でも更に頭ひとつ抜けて異質だぞ。

ちなみに考案と設計をしたのは、例の甘ボイス担当官だった。

声がとろつとろの癖に、存外凶悪だなオイ。  
軽く稼動してみた。

思ったよりは使いやすい。展開する必要があるってのも大きいし、何よりまっとうな武器ですらないから俺には寧ろ合っているのかも知れない。

射程の分類としては、近接と中距離ってところか。

『飛ばす』のは少し難しいが、この分なら射撃の命中率上げるよりは遥かに楽だ。

それに、これひとつで攻防一体ってところもいい。

なんと言うか、機動と回避で誤魔化しているから武器に比べて余り目立ってないが、俺は防御も下手なんだよ。

織斑と夏休みに戦った時、シールドで変な逸らし方して内蔵してた盾シールド・ピアース殺し破損させちやつたし。

まあ、アレは運の悪さもあつたんだが。

アミーエーラ氏との朝晩の会食にも慣れてきた。

俺が偏食するのをどこで聞いたのか、メニユーも上手く選んでくれてるし。

つかアミーエーラお嬢さん、なんで服が全部下乳なんだろう。





\$月▲日 無礼者。我が曇れと言ったのだ。疾く曇るが礼であろう！

織斑が俺に連絡してきた。

なんでも4メートル50まで距離が縮んだらしい。奴さんの声には、達成感が溢れていた。

だから誤差だつて。会長さんの目論見、絶対上手く行かないつて。

さて、武装の扱いにもだいたい慣れた。てか、やっぱり通常の武器への適性が低い俺だと、寧ろ特殊兵装の方が上手く扱える気がする。

つつてもよし悪しだけど。並列思考苦手だから、お蝶夫人のビットとか絶対使えない

だろうし。

ビット……アレはやバかった……今ならかわせるだろうが、初戦でアレは本当に無理ゲーだった。

……全包围攻撃ってフレーズが引き金になって、ヴィルヘルミナの10本同時ワイヤーブレード攻撃のことまで思い出してしまった。

あれこそ悪夢だ。逃げ道全部塞いでくるんだもん、俺に蹴りが無かったら雁字搦めにされてたよ。

近距離の的を『纏った』回し蹴りで薙ぎ倒し、離れた位置には『飛ばして』対応する。んむ、飛ばす際にも殆ど散らなくなった。ここ数日の成果だな。

狙いは少し甘い……俺にしてみりや上出来か。

テストとデータ取りも今日でほぼ終了。あと2、3日したら、学園に帰る手筈だ。

何だかんだと2週間近くはこっちに居たから……授業内容は山田先生に連絡して教えて貰ってはいるが、やはり不安だ。

少し予定を詰めて、専用機持ちタッグマッチの当日に帰ることにしよう。

もしかすれば、イベント終了後にエキシビジョンで誰かと試合させて貰えるかもだし。

そうだな。個人的には負けっ放しなお蝶夫人か、オスカルと戦らせて欲しいもんだ。

戦闘で勝てるかどうかは正直自信ないが、新星ノイザでなら少なくとも善戦はできる筈。どうにも俺、戦うの得意じゃないからな。

聞いた話によると、アミーラお嬢さんも来年からI S学園に通うらしい。

つか、俺のIコ下だったのか。大変立派な物をお持ちだったから、てつきり同い年か年上かと。

流石世界に轟く巨乳大国。15でコレとは恐れ入る。

別に巨乳が特別好きって訳でもないけどね、俺。

\$月×日 藤堂隆景が命じる……曇れ！

明日帰る。

そう簪に連絡したら、電話の向こうで泣かれた。

最近禁断症状が進行して、手の震えが全く止まらなかつたらしい。

……ずっとスルーしてたんだが、禁断症状って何？

織斑とのことも聞こうとしたんだけど、名前を出した瞬間声がIオクターブ低くなったので、それで全てを理解し聞くことを断念。

会長さんの『簪ちゃんに友達を作って貰おう』計画は、そもそものターゲット選択が悪過ぎた為に失敗に終わりそうだ。

こればかりは簪の自由意志でもあるし、俺からは何も言えません。

アミーエーラ氏は俺が発つことを惜しんでくれた。

だから何でこの人、俺のことやたら気に入ってるんだろう。

『完全個別稼動スラスター』に、例の武装。

専用機には虎の子の最新鋭技術を2つも導入して貰って、データが欲しいにしても随分な大盤振る舞いだ。

貰えるもんは、貰つとくけどさ……。

あとついでだから、アミーエーラお嬢さんに聞いてみた。

その服寒くないのかって。

屋内着だから平気とのこと。そう言えば外出時は、普通に厚着してたな。

……え、じゃあ何で室内だと下乳なの？

女の服装センスは良く分からん……。

にしても、兄貴もいい加減しつこい奴だな。

すつかり俺の後ろに隠れるのが常套手段と化してしまった。

簪を思い出す。

電話連絡すると、会長さんが凹んでた。

ま、こうなることは薄々感じてたが。

だつてこの人、妹のことになると大概やること裏目に出るんだもの。

そーゆートコが、凄く可愛い。

\$月※日 曇りで、いいよ……曇りらしいやり方で、話を聞いて貰うから……。

学園に帰る当日。

親父とお袋、見送りに来いや！

空港で見送ってくれたのは、アミエーラ氏とお嬢さん、あと兄貴に甘ボイス担当官。

……兄貴は絶対に、お嬢さんが来てなかったたら来なかつたな。

それで、甘ボイスな担当官さんだが……名前、なんだったっけ。

確かこう……篠ノ之束も吹けば飛ぶような、超極悪ラスボスキャラみたいな名前だつ

た気が……。

ええと……せ、せつしよ……あ、殺生院！

そうだ思い出した、殺生院キアラ特殊兵装開発技術部長だ。

何でこの人、技術官やってるんだらう。

彼女のさじ加減ひとつで世界終わりそうな気がするのって、俺だけ？

え、「苦も楽も同じこと、命の色でございます」？

説法は間に合ってます。この人とは3歩ほど退いた距離で付き合うべきだと思う。のめり込んだら骨まで舐ねぶられそうだ。

兄貴は大丈夫なのか？ いいよ、年下趣味カのことは気にしないで。

アミエーラお嬢さんからは、また来てくださいとのひと言。

たぶん次は冬休みになると思うが。

ともあれ、無事日本へ帰還。

途中でハイジャックされかけたが、部分展開すればエネルギーシールドが発生するか  
ら銃など効かん。

空港からタクシー呼んで、学園近くのモノレール駅まで行こうとして。

突然。携帯に連絡があった。

山田先生が慌てた声で、俺の現在位置を聞いてくる。

そして、学園の状況を告げられた。

謎のISから、襲撃を受けていると――

## 降り立つ新星 前

それは、突然の事態だった。

学園のイベントとして開催された、専用機持ちタッグマッチ。

その1回戦が、始まろうとしていた時。

仰々しく荒々しく現れた、複数の無人IS達。

名を、『ゴーレムⅢ』。

侵入者達は散在していた専用機持ちの生徒達へと、次々に襲い掛かる。

裏で手を引く者の、迷惑通りに。

「せやあつ！」

巧みな加速で『ゴーレムⅢ』との間合いを詰め、『ノワール・サイズ』を振り下ろすフェイト。

しかしゴーレムはそれを右腕と一体化した大型ブレードで弾き、再び距離を取ろうとする。

だがそれは、彼女等の狙い通りだった。

「捉えたのであります」

フェイトが自ら急激に距離を離す。

直後、12本のワイヤーブレードが一齐に全方位からゴーレムへと襲い掛かる。

「ちよ、前より増えてません!？」



「当然であります。貴女と藤堂隆景にしてやられた時の私ではないのであります。何れ共々リターンマッチを申し込むので、お忘れなきよう」

「……ちよつと、忘れたいかも」

ブレードを全身に突き立てられ、或いは絡め取られ。

しかしそれでも決定打には及ばず、振りほどこうともがいて。

「残念じゃったな。まだワシがおる」

絶妙のタイミングで、打鉄を纏った夜一がゴーレムの腹部に掌打を叩き込んだ。

それも数発の連撃。流石の無人機も無防備な状態でそれを食らえばひとたまりも無く、されど容赦ない攻撃に装甲は見る見る変形して行く。

蹴打が20を越えた辺りで、ゴーレムは完全に動かなくなつた。

動きを拘束していたヴィルヘルミナがワイヤーを解き、地面へと着地する。

そしてその所作に、フェイトと夜一も続いた。

「山田教諭。討伐目標の沈黙を確認したであります」

『は、はい！ ご苦労様でした、他戦闘区域の方も各個増援が到着、沈静化しています！

カルメルさん達は、そのまま待機しつつ休んでいて下さい！』

「了解したであります」

プライベートチャネル

個人秘匿通信を切り、ヴィルヘルミナ達は揃って直前まで戦闘をしていたソレに目を向ける。

夜一の手により無残な姿と成り果てていたゴーレムⅢを見て、ヴィルヘルミナがひと言。

「摩訶不思議であります」

「その台詞は少々危険な気がするのじゃが。いや、この場合危険なのはワシら3人の存在か？」

かかか、と豪快に笑う夜一の姿に、フェイトが呆れたように嘆息した。

「もう……それにしても、他の人達は大丈夫かな……」

「揃いも揃って専用機持ちじゃろう？ 一般生徒のワシらが心配するような輩でもある

「まい」

「けれど、その一般生徒に増援要請をするほどに、事態は切迫しているのであります」

つんつん、としゃがみ込んでゴーレムの残骸を指でつつきながら、抑揚の無い声でヴィルヘルミナが言う。

現に学園にあるＩＳは訓練機まで全て駆り出され、彼女達のように生徒の中から腕の立つ者を選別して、増援に向かわせるような状況であった。

フェイトは手に持った大鎌を肩に担ぐと、上を見上げる。

雲で覆われた空は、学園の不穏をそのまま体現しているかのようにだった。

「……………う？」

「どうした、フェイト」

小さく声を上げた彼女に、夜一が話しかける。

「あ、いえ……多分気のせいですから」

「なんじゃ、疲れておるのか？ この分だとワシらの出番はこれで終わりじゃ、座って休

んでおれ」

「ではそうするのであります」

「いや、お主には言つたらんのじゃが……」

2人が漫才のようなやり取りをする中、フェイトはかぶりを振って上を見ることを止めた。

「（一瞬、何か見えた気がしたけど……）」

暗雲を切り裂くように煌いた、瞬きする程度の存在だった何か。

彼女がそれを錯覚で無いと知ったのは、この事件が終わった後のことだった。

場所は変わり、アリーナ。

本来は全学年合同タッグマッチ、その一回戦が行われる筈だった場所。そこは今や、凄惨な有様となっていた。

「……………ッ！」

複数のキーボードパネルを手足で操作し、簪がゴーレムに向けミサイルを放つ。複雑な軌道をそれぞれ描くミサイルの群れは、見事に全弾命中する。

だが――

『……………』

それらはシールドビットに阻まれ、対象にまともなダメージを負わせることはできなかった。

歯噛みするも、攻撃の手を止める暇など無い。

先程まで一緒だった一夏と箒は、もう一機のゴーレムとの戦いの最中で分断された。だから。

背後で血を流し、倒れ伏す姉を守れるのは。

自分だけなのだ、そう心の中で念仏の如く繰り返して。

簪は隆景と共に完成させた武器、荷電粒子砲『春雷』を放つ。

シールドビットには使用に多少のインターバルがあることは、これまでの戦いで把握していた。

攻撃をかわし切ること適わなかった鉄の乙女は、左腕を損傷する。

「これ、で……！」

これで左腕に備わった、超高密度圧縮熱線は使えない。

となれば、あれに残された武器は。

右腕の大型ブレードを振りかぶり、凄まじい加速で接近するゴーレムⅢ。

だがそれを読んでいた簪は、予め展開しておいた超振動薙刀型近接ブレード『夢現』で対抗。

数合の打ち合い。だが片腕のゴーレムに対し両腕で挑む簪に、徐々に軍配が上がり。

「……貫つ、たっ!!」

『——ッ!!』

ブレードを弾き上げ、隙だらけのボディへ。

振動により通常の実体剣と比較し、段違いに切れ味の高い夢現を。

力の限り、薙ぎ払った。

上半身と下半身を分断され、ゴーレムがオイルを撒き散らす。

バチバチと奔る紫電は悲鳴のようでもあり、同時にその最期を表していた。

地面に崩れ、動かなくなった無人機を。

簪は息を切らせつつ、じっと見下ろして。

「……ッ、お姉ちゃん!!」

弾かれたように、重傷の姉へと振り返り。

そして。

「キャアッ!?!」

横合いから、何者かに吹き飛ばされた。

天才的センスの持ち主であるルームメイトからレクチャーを受けたP I C制動術で、何とか壁に衝突する前に姿勢を取り直した簪。

するとそこには、倒した簪のゴーレムⅢ。

……否。まだ残っていたのか、新手のゴーレムが立ち塞がっていた。その姿を見定めた直後、簪の血が凍りつく。

「……………め」

ゴーレムⅢは、倒れた姉のすぐ近くに居て。

「だめ……………」

近くに居る楯無へと狙いを定めたのか、彼女に熱線の砲口が備わった左掌を向けていて。

——そんなものを受けたら、お姉ちゃんが。スラストを全開とするも、間に合わない。

ゴーレムの掌が、光を帯びて。



その光景が、余りにもゆっくりと目に映っていて。  
僅かに意識を保っていた楯無と、簪の視線が合わさった。  
掠れた声で、彼女が放った言葉は。

「……かんざ……ちゃん……にげ……て……」

「ダメEEEEEEEEエツ!!!」

喉が裂けんばかりの絶叫。

けれども手は、届いてくれなくて。

鉄の乙女の繰り出す無慈悲な光が、姉を貫こうとした瞬間。

「鉄屑がああああああッ!!!」

ゴーレムⅢが、地面に叩き付けられる。

もうもうと立ち込める砂煙に包まれたゴーレムの代わりに、無人機が居た場所には『彼』が居た。

「あ……あ……あ……」

その姿を見た瞬間、簪は堪え切れずに涙を流す。

床屋に行く時間も惜しいと、この数ヶ月で無造作に伸びた黒髪。

色素の通っていない、酸化前の血の色をした赤い瞳。

纏うI Sは、完成図の画像だけ見せて貰ったことのある、彼の専用機。

この学園で誰よりも長い時間を、一緒に過ごした。

「さっさと立て……回路一本として、この世に留まられると思うな……ッ!!」

彼女の大好きな人が、そこに居た。

## 降り立つ新星 後

地面へと叩き付けられたゴーレムⅢが、砂煙を払い除けるように再び空中へと躍り出る。

外見には大した損傷も見られず、まだまだ健在の様子であった。  
更に。

「……………ん？」

「なっ……………!？」

新手は、1機だけではなかったのだ。

更に2機、合計3機。

単純な数だけならば同じだが、隆景達の側は楯無が重傷、簪もエネルギーが底を尽きかけている。

実質戦えるのは、到着したばかりの隆景のみだった。けれど。

周囲を取り囲む3機のゴーレムⅢへ、それぞれ一瞥ずつ視線を向けると。隆景は特に焦りも含んでいない声音で、後ろの簪に振り向くことなく告げる。

「会長さんの、傍に。固まっていた方が、守り易い」

「たか、かげ……？ で、でも、相手は——」

多勢に無勢だ。

そう言おうとした簪は、しかし言葉を止めた。

くしやり、と。

金属の腕で、彼に頭を優しく撫でられて。

「大丈夫……俺を、信じろ」

口数は少ないけれど、その強い意志を伝えてくれる赤い瞳に見つめられて。

こんな状況だと言うのに頬を染め、彼女は小さく頷いた。

そして隆景は、ゴーレムⅢ達と相對する。

刹那。

ガリヤアアアアアアツ!!!

装甲を抉り取るような、凄まじい金属の衝突音。

一瞬で手近なゴーレムⅢの頭上を取った隆景に殴られ、錐揉み回転しながら吹き飛ばされる敵機。

無論、それで終わりではない。

「トロトロしてるんじゃないよ……ッ!」

残りの2機も難なく蹴り飛ばし、またも3つの砂煙が立ち上る。

根本的な機動能力に、余りにも差があり過ぎた。

新星は、スピードにおいてならばかの『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルをも凌駕する。

否。それどころか現行しているISの中で、ノーヴァの機動力をスペック上で超えているのは『紅椿』と『白式』の2機のみ。

更に言えば上記の操縦者達は、未だそれらの機体を十全に使いこなせていない。

結果として、藤堂隆景は現状世界最速のIS操縦者だった。

だけれど、楯無の『ミストルテインの槍』、そして簪の猛攻撃を立て続けに食らい、ようやく1機を仕留めるのがやっとだった。

それ程の防御力を持つゴレムⅢは、そう簡単には沈まない。

多少装甲の表面を削られた以外にダメージは無く、そして敵方が攻勢に移る。

「チツ……」

1機が放った熱線を、上昇して回避。

そこを狙ってきた2機目のブレードも、蹴りで弾き命中させない。

——けれど。

「……隆景!!」

簪が叫ぶ。

しかし、時既に遅し。彼は3機の間にも上手く挟まれ、取り囲まれていた。

いくら隆景でも、包囲されてしまえば動きようが無い。

突破の為に何れか1機へ攻撃を仕掛ければ、その隙を突いて残り2機が総攻撃してくるだろう。

このままでは、隆景まで姉と同じ目に遭ってしまふ。

だがもうミサイルは弾切れ、荷電粒子砲も使えそうに無い。

絶体絶命の危機に、彼女は自らの無力を呪う。

そして。

仕留めにかかったのか、3機のゴーレムIIIが一齐に隆景へと飛び込んだ。  
愚かな、ことに。

バチチイツ!!!

ダークブルーの機体表面に、閃光が。

いや……『紫電』が奔る。

それは凄まじいまでの放電だった。

全方位へと放たれた雷の切っ先が、ゴーレムⅢ達を刺し貫く。

夥しい電撃を食らい、3機は一瞬だがショートする。

次いで、隆景は手を翳した。

鋼の腕の掌に埋め込まれた、クリスタルの外観をした『増電装置』ポルトフリースターが。

その内部で、強い光を放つ。

バチイツ!! バチツ、バチチチツ!!!

今度は放射状ではなく、一直線に束ねて放たれた電撃が三筋。

まるで雷のように、3機を紙屑さながらに吹き飛ばした。

その様を見ていた簪は、眼前の光景に目を見開く。

彼女に抱きかかえられた楯無が、弱々しい声で呟いた。



「まるで、雷雲みたいなIS……完成、5年は先って聞いてただけだな……」

ノーヴァには、2つの第3世代機構が備えられている。

ひとつは、自在な機動を可能とする完全個別稼動の6連装ウイングスラスター。

そしてもうひとつが……彼の機体に搭載された、唯一の武装。

「アミエーラ社の、最新鋭技術……どうだ？ 味の方は」

機体へ内蔵したバッテリーの電気を、四肢部にそれぞれ備わった増電装置により瞬間的に増幅。

帯電装甲に増幅した電気を蓄積し、それを自在に放電する。

攻防一体にして変幻自在、凶悪無比な自然災害の権化、その一端を操る兵器。

その名を――

『ライライコクウン雷来黒雲』……この、形の無い最速の刃……回避は不可能、だ』

雷来黒雲により放たれる電撃は、最初に空気中へ『通路』を作り出し、そこから放電を開始する。

通路作成用の『先駆放電』ステツブトリーダでさえ、そのスピードは約マツハ600。

実際に攻撃を行う『帰還電撃』リターンストロークに至っては、実にマツハ3万もの速度にまで及ぶ。回避など、できる筈もなかった。

ゴレムⅢ達は、所々ショートさせながらも再び動き出す。

絶対防御でのガードがあつた上、本来ひと束に纏めて放つ攻撃を3つに分けたからだろう。

更に言えば、雷来黒雲は恐ろしく燃費が悪い。

スラストーともシールドエネルギーとも独立した電力エネルギーを用いてはいるが、それだけに他動力での代用も利かない。

現に2度の攻撃で、既にバッテリーの4割近くを消耗していた。

「それは、それで、解決策もあるんだが……今回は、いい。どうせ次で終わる」

再び、掌を前に翳す。

左腕だけではない、四肢全ての増電装置を稼動。

バッテリー容量の5割を増幅。装甲へ帯電、左腕部へと集中。ゴレムⅢ達は、まだ満足な動きを取り戻せない。

先駆放電によるロックオンが、3機全てにマークされた。それは神をも殺すと言われた雷の槍。

楯無の『ミストルテイン』と同様、神話よりその名を借りた必滅の武器。

一撃という限定条件なら、かの『零落白夜』さえ凌ぐ文字通り最強の攻撃。隆景は小さな声で、その名を囁く。

「…………『ヴァサヴィ・シヤクテイ』」

極光と轟音が、アリーナの一角を包み込み。

それが晴れると、後に残っていたのは3機のISの残骸のみであった。

# 『Nova』紹介

和名：新星<sup>しんせい</sup>

型式：nnn—o—a4

世代：第3世代

国家：ロシア

分類：機動特化競技型<sup>レースタイプ</sup>

装備：4連装増電装置<sup>ボルトブースター</sup>『雷々黒雲』<sup>ライライコクウン</sup>

装甲：耐摩擦性耐熱帯電装甲

仕様：6連装完全個別稼動スラストー

スペック S F

シールドエネルギー総量：250

スラスタージェネレーター総量：1000

火力：計測不能

装甲：E—

機動：S++

制御：A+

エネルギー消費効率：D

射程距離：D+

操縦難易度：A+

・ロシアの一大企業『アミエーラ社』の最新鋭機。非固定浮遊部アンロック・ユニットの撤廃、装甲の軽量化など、機動に特化させたレース仕様の機体。カラーリングは黒に近いダークブルー、待機形態はダークブルーレンズの色眼鏡。鋭角的でシャープなフォルムと、大型になりがちな第3世代機内ではやや小柄で華奢な外観が特徴。

・4機の大型、2機の中型と計6機のウイングスラスタージェネレーターを備えており、それぞれが完全に独立した操作を可能としている。その分細やかな制御が必要になるのだが、スベック上は現行機でも『紅椿』と『白式』に次ぐ機動性能を持っており、間違いなく第3世代機内では最速である。

・四肢部にそれぞれ備わった増電装置、『雷来黒雲』により内蔵バッテリーの電力を極端に増幅して全身の装甲に帯電させ、それを操ることで攻防一体の武装とする。内蔵電力そのものに限りがある為乱発は禁物だが、高機動飛行により発生する空気摩擦からの静電気を蓄電、増幅することが可能なので、ノーヴァの機体特性にマッチした理想的な武装と呼べる。

・操縦には高い機動技術と針穴を穿つスロットルワークが要求される、乗りこなすこと自体が困難なじやじや馬。現在確立されているIS機動全ての動き、その全てが再現可能な文字通り飛ぶ為に生まれてきたIS。

・増電装置は常に全稼動している訳ではないので、4機中2機までは損傷しても問題なく無損傷状態と変わらないパフォーマンスを発揮可能。ただし、損傷状態では最大出力における放電攻撃『ヴァサヴィ・シャクテイ』の使用は厳禁。高圧電流から自己を守るべく、受け流し用の電気も大量に必要とする為、ブースター全機の稼動が必要不可欠となっている為である。

・余談ではあるが、操縦者である隆景は『雷来黒雲』や『ヴァサヴィ・シャクテイ』の名称を密かに恥ずかしがっている。ちなみにこのふたつの命名者は、アミエーラ社の社長令嬢。

・普段の生活においても、ノーヴァは大活躍！ 不意な停電で気になるテレビの続き

が見れない時、携帯電話のバッテリーが切れそうな時、掃除機のコードが短くて、お家の隅々まで掃除できない時！ 電気に対するあらゆる問題を、このISなら一網打尽！ 尚、電圧等の調整を間違えると大惨事になるので、くれぐれも自己責任で。

## 更識刀奈の本心

目を覚ました私が最初に見たのは、医務室の天井だった。

身体を起こす際にあちこちで響いた痛みにも、自分がどうしてここに居るのかを思い出  
す。

学園の受けた襲撃。私は無人機を相手に深手を負って、それで。

傍で寝息が聞こえて、横を向く。

そこでは、隆景君が椅子に座ったまま器用に眠っていた。

……助けられた、のよね。

私も、簪ちゃんも、あと少しで取り返しのつかない事態になってしまおうとしていた



時に。

隆景君は現れて、私達を助けてくれた。

雷を纏った隆景君の姿は、私が今まで見たことの無い彼だった。

声を張つて、怒りを顕わにする所なんて初めて見た。

意識の朦朧としていた私は、何であんなに怒っているんだろうと態々考えなくちゃ分からなくて。

しばらくして、彼が私を傷付けられて怒っているんだと理解した。

それに気付いた私が感じたのは、彼に心配をかけてしまった申し訳なさでも。

あの温厚な隆景君を怒らせる原因になった、自分自身への不甲斐無さでもなくて。

嬉しかった。

滅多に感情を表に晒さない彼が、一番晒そうとしない怒りを見せてくれたことが。

私の為に怒ってくれたことが、不謹慎だけど嬉しかった。

隆景君は一夏君と違って、誰彼構わず優しくするようなタイプじゃない。

基本的に自分からは人を寄せ付けないし、近付いて来れば逃げはしなくても警戒する。

人あまり懐かない、野良猫のような人。ちよつと、簪ちゃんに似てる。

その彼が心を開いてくれている事実が、嬉しかった。

彼が目を覚ます。不安げな様子を僅かに見せて、私に大丈夫かと聞いてきた。

……優しい人。私や簪ちゃん達にだけ、特別優しい人。

私の傷はしつかりと手当されているから、命に別状は無い。

でも。多分、背中に受けた傷は痕になつて残るだろうと言われた。

仕方ない。それで簪ちゃんを助けられたんだから。

……それに。

『傷痕……俺は、気にしませんから』

不覚にも、頬が熱くなった。

言葉足らずな彼は、こうして時折あまりにもストレートに好意を伝えてくる。

簪ちゃんは、隆景君を心底好いている。

手を差し出してくれた彼を、あの子が一番欲しかったものをくれた彼を。

私が傷付けてしまったあの子を、彼は救ってくれた。

だからだろうと、最初は思っていた。

……いいえ。そう思おうとして、無理やりそう決め付けていた。

この胸の中にある、燻るような痛みと熱を。

大好きな簪ちゃんの恩人で、私とあの子を仲直りさせてくれた人だからなのだ。

でも、ダメ。

もうそんなゴマカシ、できそうにない。

分かってしまった。本当は最初から分かっていた。

簪ちゃんが好きな人、だからじゃない。

『私が』好きな人だから。

私が、更識楯無が。

……『更識刀奈』が、好きな人だから。

だから嬉しい。だから特別が嬉しいの。

初めて会った時から、ずっとずっと好きだった。

でも分かってたから。その時にはもう簪ちゃんも、彼を好きになりかけてたことを。

だから隠してた。だから誤魔化してた。

簪ちゃんはきっと、私が隆景君に抱いてる思いを分かっている。

分かった上で、3人で居られればいいと。そう思ってくれているけど、けど。

ダメなの簪ちゃん。

私は本当は、嘘吐きで欲張りだから。

誰にも渡したく、ない。

彼には私だけを見て欲しい、私だけを愛して欲しい。

そんな思いを隠して、あなた達と一緒に過ごしているから。

だから伝えられない。

伝えたくても、伝えられない。

そんなことを言ったら、私達に優しい彼は困るから。

浅ましい私を、見られたくないから。

全てを壊してまで思いを伝えられるほど、私は強くないのだから。

「んふふ、おねーさん怪我人だから林檎剥いてー隆景君♪」  
「……血だらけの林檎で、良ければ」

私には、本当はこうして彼に甘える資格なんてないのに。  
嘘に慣れ切った自分が、心底イヤになる。

——ああ。

彼の血がついた林檎なら、食べたいかとも思った私は。  
もう、簪ちゃん以上に彼へ溺れているんだろう。

## 小話集 その2

『ロシアにて』

「……あの、担当官」

『はい、なんででしょう?』

ノーヴァを纏った隆景が、珍しく眉を擧めて困った風に呟いた。

「……これ……本当に、やらないと……?」

『音声認識による自動操作プログラムですから……こちらのデータも取らなくてはいけません』

柔らかな笑みを画面の向こうで浮かべるキアラの姿に、彼は更に眉間へと皺を寄せた。

そして。30メートルほど先に出現したターゲットを、胡乱気に睨み付ける。

「……し、『真の英雄は目で殺す』！」

直後、彼の左目付近に高圧電流が集まり。

そこを起点にした収束電撃が放たれ、ターゲットを粉々に破壊した。

『はい、コード『梵<sup>ブ</sup>天<sup>ラ</sup>よ、地<sup>マ</sup>を覆<sup>ス</sup>え』は問題なく動作しましたね。では、残りの放射放電コード『日<sup>カ</sup>輪<sup>ワ</sup>よ、具<sup>ツ</sup>足<sup>ク</sup>となれ』と、最大出力放電コード『日<sup>ヴ</sup>輪<sup>ア</sup>よ、死<sup>シ</sup>に随<sup>シ</sup>え』もお願い致しますね?』

「……………」

ノーヴァの特殊兵装である『雷来黒雲』は、電撃操作に意識を割けない事態でも使えるよう、音声認識により幾つかの放電パターンが使えるようになっていた。

初心者が使用する場合は、こちらの方が適切だったのだが……。

「(……恥ずかしくて死にそうだ)」

それをしたくない一心で、彼は僅か数日の鍛錬である程度のボルト・コントロールを習得した。

ちなみに、羞恥を堪えつつコードを叫ぶ彼の姿に、担当官キアラは身悶えていたという。



## 『ロシアにて その2』

アリサ・イリーニチナ・アミエーラは、見た。

夜中にこつそりと試験用アリーナへと向かう、隆景の姿を。

何してるのかなーと思つた彼女が、そつと後をつけてみると。

アリーナ内でノーヴァを纏い、複数のターゲットを出現させた彼が。

「並列……エレキパンチ」

振るつた拳から放たれた電撃が、いつぺんに全てのターゲットへと伸び焼き焦がす。  
更に。

「……並列エレキカッター」

刃物のように鋭利に束ねた電撃を、刀でも扱うように放つ。

電圧の抑えられたそれはターゲットの触れた部分だけを焦がし、結果として両断した

ように割れて。

そこで彼が、アリサの存在に気付いた。

「ツ…………!? お、お嬢、さん」

「あの…………」

少し目を見開いた隆景の姿に、なんだかいけないものを見たような気になってしま  
う。

現に彼は、慌てたようにアリーナのシステムを落として。

「そ、それではお休みなさい…………」

そそくさと去って行くのだった。

「…………このことは……内密に」

と思つたら、不意に戻ってきて真剣な顔でそんなことを。

意外と可愛い人だなーと、アリサが思った瞬間である。

『ノーヴァ』

I S 学園生徒会は、通常の学校における生徒会とは異なり、ある程度の自治権が認められている為その分必然的にやることが多い。

なので今日も、生徒会役員でも『デキる』側は大変だった。

「じゃあ一夏君、今日は柔道部お願い」

「はい……」

主に他部活動への貸し出しが仕事である一夏は、今日も今日とて部の助手へ。

本来書記である本音は役に立たないため、この場に居ない。

なので必然的に、負担は会計の虚と実質的に書記を担つて隆景へと向く訳で。

「すみません藤堂君。こちらもお願ひできますか?」

「……………(くくつ)」

カタカタとキーボードに走らせる指を止め、書類を片付け始める隆景。  
ふとその視線が、虚へと向いた。

「……………」

「? どうかしましたか?」

「……………」

ちよい、ちよい。

軽く手招きされて、虚が彼の方に近寄る。

そして、隆景の指が彼女の肩に触れた。

瞬間。

パチチツ

「ひゃあっ!?」

軽く流れる電撃。

通常のマツサージでは届かない内部の筋肉をほぐされるくすぐったさに、虚は思わず声を上げた。

「……肩凝りは、良くないので。目に、来ます……先輩は視力が低いですから、特に」

いつの間にか背後に回り、両肩へ電気治療を施す隆景。

ISをこのように使う者など、世界広しと言えど彼ぐらいなものだろう。

「あ、ありがと……ひうつ……で、電圧をもう少し下げて貰えませんか？」

「(っ)くっ」

酷い肩凝りで最近悩んでいた虚は、それを甘んじて受ける。  
そしてその光景を、ジト目で見る者が1人。

「……………じー」

「? 会長さんも、やりますか?」

「ツ! いいの? して貰っていいの?」

「どうせ、俺に負担は……………ありませんし……………」

ちなみにノーヴァはこの程度の電気なら、待機状態からでも操作可能である。  
元々は護身のスタンガン用なのだが……………応用すれば、便利な機能だった。  
ついでに言うと、彼が使っていたパソコンもそれにより随時充電されている。  
性能の無駄遣いと言えば、無駄遣いだった。

## 『楯無と隆景 本名編』

「私、そろそろ元の部屋に戻るのよね」

「……………ですか」

隆景らの部屋に来ていた楯無が、彼のベッドで横になりつつ言う。

その本人は、パソコンで本国への報告メールを打っていた。

「……………となると。今度は俺が、織斑と同室に？」

「そうねー。それともいつそ、私と同じ部屋になってみる？」

「……………」

ふいつと顔を背けた彼の姿に、寧ろ内心では楯無の方が照れる。

最近気付いたことだが、どうも隆景は行動の節々が可愛かった。

背中を抱き締めたくなる衝動を堪えつつ、彼女はころんと仰向けになって更に続けた。

「……ね、隆景君。ちよつとお願いしてもいい？」

「いいです、よ」

内容を聞く前に了承された。

嬉しいが、彼が将来騙されやしないか不安にもなる。

「まあいいわ。コレ、読んでみて」

「……？」

さらさらと何かを書いたかと思うと、紙切れを渡す楯無。  
そこに書いてあつたのは、ひらがなが3文字。

「……かた、な？」

「もう1回」

「……かたな」



首を傾げつつも、言う通りにする隆景。

「ワンモア！」

「かたな」

「アンコール！」

「かたな」

※以降5分ほど同じことが続く。

「んふふ〜♪」

「……何だったんですか」

満足げな彼女に対し、隆景は事情が分からず首を傾げるばかり。  
けれど楯無が楽しそうだったので、まあいいかと思うのであった。

『楯無と隆景 名前編』

「会長さん、書類を——」

生徒会での仕事中心にて。

書類を提出しようとした隆景に、楯無が言った。

「ねえ隆景君。今更だけど、私のことは楯無でいいのよ？ たつちゃんでも可」

「……たつちゃんだと、俺とかぶります」

言われてみれば、確かに彼も隆景たつちゃんだった。

「じゃあ楯無。楯無って呼んで」

「……名前呼びは……まだ」

目を逸らす彼に、いもつと簪は名前で呼ぶのに、と思う。

ただ確かに、彼が誰かを名前で呼ぶのなんて簪ぐらいのもので——  
違う。そう言えばもう一人居た。

「むー。私が駄目なら、簪ちゃんはともかくどうしてヴィルヘルミナちゃんまで名前で呼んでるの?」

「……覚えやすかった、から?」

なぜ疑問系なのだろう。

そして本当に覚えやすいだろうか。彼の交友関係の中で、多分一番名前が長い人物なのに。

「そもそも苗字、知らないんです」

「カルメルだけど……」

「……カラメル?」

「カルメル」

「キャラメル？」

そして。

「だから、カ・ル・メ・ル！」

「キャンベル」

「カールーメーラー！」

「パラレル」

どんどん遠くなって行く。

結局彼が、ヴェルヘルミナの呼び方を改めることはなかった。

## 小話集 その3

## 『2人でお話』

・織斑一夏の場合

「……………これが、ああなる」

「だから何度もいうけど分からないんだよ!?  
んだって!」

俺には擬音翻訳機能も手話の心得も無い

「……………」

心底困惑した様子の一夏に、隆景は。

「……チツ」

「え……お、おい藤堂、今舌打ちしなかったか？」

「さあ」

「絶対しただろお前!! 絶対舌打ちしたよな!!」

「……」

I don't understand what you are saying

「何で英語!!」

・篠ノ之箒の場合

実を言うと、この2人。

「……ぐつとして、くいつと」

「うむ、そうだな。しかしこの場合、ぐあーつと行くのもありではないか？」

「……言い得て、妙だな」

擬音での会話が成り立つ。

・セシリア・オルコットの場合

「では、行きますわよー！」

セシリアがボールを投げ、見事なジャンプサーブでゲームの幕が上がる。  
時速180キロ近いそのボールを、隆景は。

「……動くこと、雷蹄の如し」

一瞬でボールの位置まで移動し、凄まじい勢いで打ち返す。

まるで落雷のように直角の軌道を描くそれをセシリアは反応できず、ボールはフェンスに衝突する。

「……まだまだだな」

「つて、何で私達テニスやってますの!？」

ネタ的に。

・鳳鈴音の場合

「……………」

「アンタとあたしつて、正直接点全然無いんじゃない？」

「……………」

首を傾げる鈴に対し、以前脛を蹴られまくったことから警戒している隆景。頑なに2メートル以内に近寄ろうとしない彼に、やがて。



「うがあああつ!! なんなのよもう、あたしが悪いワケ!? 土下座でもしろっての、ねえ  
ちよつと!!」

「……………」

鈴がキレて終了。

この2人は仲良くなれそうにない。

・シャルロット・デュノアの場合

「なんか、いきなり話せて連れて来られたんだけど……」

「……………ああ」

ケータイの画面から目を離さない隆景に、少々気まぎくなるシャルロット。  
何とか会話の糸口を掴もうと、食いつきそうな話題を振ってみる。

「そう言えば、藤堂君ってラファールの搭乗時間どれくらいになるのかな？」

「……400時間」

「え、!? まだ入学して半年くらいなのに!?」

「……打鉄込みなら、550時間。ノーヴァ含めちょうど600時間」

夏休みも休日も訓練に充てていた成果である。

その後多少は話も膨らんだが、この組み合わせだとヤマもオチもない会話しかできないのである。

・ラウラ・ボーデヴィツヒの場合

「……………」

「……………」

……………。

「……………」  
「……………」

始終無言。

どちらも積極的に人付き合いをする方ではないので、緩衝材無しではどうしようもな  
かった。

・織斑千冬の場合

「お前は少し休めと思うぐらい勤勉だな……織斑にも見習わせたいぐらいだ」  
「こうでもしないと……才能だけで、結果は出ませんから……」

教師としての適性はともかく、教師としての対応で接してくる千冬は、隆景にとって  
そこそこ話しやすい。

「ところで山田先生をどうにかしてくれないか。生徒自慢と言うか、弟子自慢と言うか、

もうほとんど弟自慢で流石の私もそろそろ疲れた」

「……………すいま、せん」

彼女の疲れたような笑みを見た数少ない人物となる隆景には、謝ることしかできないのであった。

・フェイト・テスタロッサの場合

「聞いたよタカカゲ、専用機のこと！ 見せて見せて、見せて！」

「……………」

ささっ。

興奮した様子のフェイトに少し怯えて、距離を取る隆景。

キャノンボール・ファスト以降も絡んでくる彼女の話は、少々以上に苦手だった。いつの間にか敬語とれてるし。

「雷出すんでしょ!? 出るんだよね!」

「……出る、が」

何故この娘は執拗に電気に拘っているのだろう。

冬も近付きつつあるのに相変わらず軽装であることも踏まえ、相変わらず読めない女である。

「私もやってみたい! 貸して!」

「む、むり……」

その後30分付き纏われる。

何とか撒いた頃には、ほうほうの体であった。

・ヴィルヘルミナ・カルメルの場合

「ワイヤーブレードの同時操作数が14本になったのであります」

「……………すごい、な」

確かに凄いが、どうして数が増える度に報告に来るのだろうか。  
そう思う隆景であった。

「20本使えるようになったら、再戦を要求するのであります。首を洗って待っているがよろしい」

「……………ああ」

「それと、これを」

手渡されたのは、メロンパンだった。

「それでは、失礼するのであります」

「……………」

メロンパンには何の説明もせず、去って行くヴィルヘルミナ。  
結構好きだったので、遠慮なく食べた。

## ・四楓院夜一の場合

「ワシと生徒会長のキャラが微妙にかぶつとる気がするんじやが、その辺どう思う？」  
「俺に、言われても」

飄々としている所とか、猫っぽいところとかはそつくりだと思つた。  
特に猫っぽさにかけては、こちらの方が上な気さえした。

「ほれ」

「ふにやつ」

突然目の前でパン、と手を叩かれ、思わず変な声が出る。  
夜一がさも面白そうに、にやりと笑つた。

「ワシとしては、お主の方が猫っぽく見えるんじやがのう」

「……………」

確かに似てる。

悪戯を好むとことか、ホントそっくりだった。



## スペインの魔女

休日のアリーナ。

普段は生徒で賑わうアリーナも、休日となれば話は別。

恋に遊びに大忙しな少女達は、折角の日曜までせっせと勉学に励む訳もない。

なのでアリーナはガラガラであり、集中して訓練するには持つて来いの環境である。

「……………」

隆景はアリーナ中に出現したホログラムフープを、見事な機動で通り抜ける。

そして次のフープへ向け、一瞬で方向転換した。

これは『シャツフル・リング・ゼロ』と呼ばれるIS競技のひとつであり、アリーナ内にランダムイズで出現する1〜99までの数字が振られたフープを順番通りに抜け、最後に0のフープでフィニッシュするという内容のものだ。

モンド・グロツソ機動部門公式競技のひとつとしても採用されている難易度の高いゲームで、数字が大きくなるほどに通るのが難しくなる特性を備えている。

たとえば数字が40を超えた辺りでフープが回転しながら動き回るようになり、80以降になるとホログラムであるだけに瞬間移動を始める。

また、フープに触れてしまうと即失格。ただでさえランダム出現の中から瞬時に次のフープを捜さなければならぬのに、この仕様は正直鬼だった。

クリアするだけでも、代表候補生並みの技量が要求される。

だがこれは、機動部門競技で隆景が1番得意なものであった。

乱回転しつつ3秒おきに居所を変える89番のフープを、再出現した瞬間に加速して通り抜ける。

「ラスト90番台……」

ひしめくフープを巧みにかわし、彼は続く90のフープへと肉薄する。

無事『0』を通り抜けたのは、それから30秒もしない内のことだった。

「……自己ベスト更新は、難しいか」

着地してラファールを待機させ、隆景はひとつ嘆息する。

彼はノーヴァを得て以降も、訓練では1日おきにラファールを使っていた。

それに対し一夏が「何でわざわざそんなことを？」と尋ねた際、こう答えている。

『ノーヴァだけだと、感覚が馬鹿になる』

専用機のスペックは高い。

だからこそ、自分の素の実力が分からなくなる。

それを懸念した隆景は、こうして訓練機と専用機を交互に扱うことで、自分の実力を

正確に測り、また向上すべき点を模索していた。

ちなみに彼の言う『自己ベスト』とは、ノーヴァで立てた記録のこと。

ラファールを繰る際には背中を見せるノーヴァを追い、逆の時はラファールを繰る自分から必死に逃げる。

彼の高い機動技術から来る感覚の鋭さなら、それがどれくらいの差なのかは明確に分かっていた。

「……………」

もう一回アタックするか。

そう思い、彼が再びラファールへ乗り込もうとした瞬間。

「エス・トウペンド！ 凄いじゃない」

「……………」

そんな陽気な声が、アリーナ内に響いた。

どこかで聞いたことのあるようなその声音に、隆景は周囲を見回す。その人影は、観客席にいつの間にか在った。

薄い紫色の髪。それと同色の瞳。

手摺の上に立っていた女性は、隆景へと手を振る。

「ハイー！ ブエナス・タルデス！ こんにちはー！」

「……………」

まさか、と彼は思う。

映像記録で幾度も見た姿。

だが、IS学園じくに居る筈が無い。

「しつ」

その女性は軽快に観客席から飛び降り、フィールドに着地する。

そして、隆景へと歩み寄ってきた。

間近で姿を見遣り、間違いないと彼は確信した。

「スペイン、代表……ミー」

「あら？ 私のこと知ってるのかしら？」

こくりと、隆景は頷く。

無論だった。彼女の公式戦闘記録を彼は全て網羅しているし、第2回モンド・グロツソ総合部門の準々決勝で、惜しくも千冬に敗れた名試合だけでも10回は観た。

その技量は、単純にIS操縦者として尊敬と憧憬に値する。

「へえ……ね、貴方が藤堂隆景よね？」

名を尋ねられ、またひとつこくりと頷く。

するとミーはくすくす笑い、辺りを見回した。

「ひとりで訓練してるの？」

「……休日はい」

「そうなの。見てたわ、シャツフル・リング・ゼロ。デチューンされた訓練機であれだけのタイムを弾き出せるなんて、流石はロシアの秘蔵っ子ね」

「……………」

今度は隆景が、彼女に問うた。

何故スペインに居る筈の貴方がここに、と。

ミーは楽しいげな調子で、トントンと手に持っていた鞆を指で叩く。

「勧誘よ、代表候補生の。でも今日は留守だったから、こうして学校内見学」

「……案内の人、はい」

「居ただけで途中で撒いたわ、好きに見られないもの」

映像記録の印象からも多少感じたが、どうやらかなりの自由人らしい。

そう思っていると、アリーナに昼のチャイムが鳴り響いた。

「あら、もうこんな時間。良かったら食堂まで連れて行ってくれませんか？一緒にランチで

も食べましょう」

「……………」

こくり。

再三頷いた隆景に、ミーが笑いかける。

ラファールの返納に向かった彼の後姿を見遣りつつ。

彼女は小さく、呟いた。

「フフ……可愛い」

その頃。

学園内では真耶と千冬が、ミーを探し回っていた。



「少し目を離した隙にこれだ……だから許可など出したくなかったと言うのに……」  
「あうう、私が見失ったばっかりに〜！」

## 壁は高く

「良くない気配を感じるわ！」

「分かりましたから仕事をして下さい、お嬢様」

言うが早いか椅子を立ち、生徒会室から出て行こうとした楯無の腕を、虚が掴む。  
会長卓には、まだまだ山のように書類が積み上げられていた。

「離して虚ちゃん！ 妖気を感じたのよ、学園が危険だわ！」

「お嬢様が書類から逃げて、学園は危険です。藤堂君が居る時だけ真面目に仕事

するのは止めて下さい」

「はーなーしーてー！」

「これ食べる？ トルティージャよ、スペインのオムレツ。中々美味しいわ」

「……いただきます」

ミーとの昼食を終えた隆景は、午後も使用許可を得ていたアリーナへと戻ってきていた。  
た。

そして保管庫からラファールを引っ張り出そうとしていたら、一緒についてきた彼女から思いがけぬ提案を受ける。

「ねえ、隆景君？ 良かったら私とすこーし遊ばない？ 『ダンスマカブル』を再調整し

たばっかりだから、ちよつと調子を確かめたいの」

「……………」

願つてもない申し出だった。

第2回モンド・グロツソ格闘部門ヴァルキリーの近接戦闘術。

1度間近で見たいと、何度も思つたそれを。

己の身で、体感できる。

「……………」

「フッフ、それが噂のロシアの最新鋭機？ カッコいいじゃない、素敵よ」

ノーヴァを纏うことで返答した隆景を、楽しそうに見るミー。

次いで。予備動作も殆ど無く、彼女は自らの専用機を展開させた。

鋭い爪のついた手甲、金属のブーツに三角帽子を模した頭部装甲。

彼女が『スペインの魔女』と呼ばれる由縁のIS、死の舞踏会<sup>ダンスマカブル</sup>。

展開に要した時間、凡そ0.2秒。

武装の展開同様にIS本体の展開も苦手な隆景には、到底不可能な数字。

それだけでも彼女が凄まじい手練れだと理解ができる、一切の無駄が省かれた動作だった。

軽やかなステップで歩き、ミーは隆景から30メートルほど距離をとる。そしてくるりと振り返ると、誘うように手招きした。

「先手は譲ってあげるわ。いつでもどうぞ」

「……」

そう、彼女が告げた瞬間。

間髪を入れずに、隆景はミーに向けて放電した。

バチチチイツ!!

遠慮も躊躇も一切無い攻撃。

当然だった。相手は遥か格上、国家代表。

それも恐らくは、自国の代表である楯無よりも強い。

この世界に数えるほどしか居ない存在、『ヴァルキリー』なのだから。倒せたとは思えないが、多少は効いただろうか。

雷撃と共に立ち上った砂煙を見据え、隆景はじつと様子を見る。すると。

「フフ……せつかちなだね、でも嫌いじゃないわ」

「ツ……」

煙が晴れ、姿を現したミー。

だがそのISには焼け焦げどころか傷ひとつ見当たらない。

如何にチャージを殆どしていない攻撃だったとは言え、俄かに信じがたかった。

「どうしたの？ ダメージを与えられなくてびっくりした？」

「な、何故……ツ、そう、か」

地に足を付けたままのミーを見て、隆景はタネに気付く。

彼女の専用機であるダンスマカブルは、世代が進むにつれ装甲部の少なくなるISSの中でも特に異質で、全身の2割程度にしか装甲が纏われていない。

しかしその分、強固で密度の高いエネルギーシールドを備えていた。

つまり、シールドの表面から地面へと電気を逃がした。

よって最低限のダメージしか受けなかったのだ。

「ペルフェクト！ ダンスマカブルは現行機の中でも、エネルギーシールドが一番厚いの。半端な攻撃じゃあ、まだまだお子様ランチよ？」

「……………」

何故お子様ランチ。

隆景は内心でそう呟くも、油断無く彼女を見据えた。

どうやら事前に、ノーヴァの性能や武装のチェックはしてあったらしい。

『雷来黒雲』の完成は公開情報だから、知っていてもなんらおかしくない。

しかし厄介だった。エネルギーシールドの表面から地面をアースにして電気を逃がされては、ダメージが通らない。

シールドよりも装甲の硬さが防御のキモだった、ゴーレムⅢのような機体ならば強引

に焼き焦がせるが、エネルギーの楯が相手では少々分が悪い。

電撃対策に地上戦。ダンスマカブルのような機体でしか取れない戦法だが、効果的だ。

「じゃあ、次は私から行くかしら」

そう言つて、ミーが手に一瞬で武装を展開させる。

身の丈よりも大きな巨斧。数多もの敵を斬り伏せてきた武器、『レディ・パール』。隆景は飛び上がった。近接戦では勝ち目など無い、それにダンスマカブルはあれに大きく攻撃の比重を置いた機体、中距離以遠の戦闘は不向き。

だとすれば、こうして飛んでしまえば追つてくるほか無い。

そこで電撃を撃ち込みさえすれば――

「ツ!!?」

駄目だ。すぐにかわせ、右でも左でもどっちでもいい!!

隆景は自分が目にした『レディ・パール』の姿を見て、即座に回避運動に移った。



瞬間。

「せやー！」

巨斧をその場で振り抜くミー。

直後斧の太刀筋から、衝撃波が一直線にアリーナを突き抜けた。

フィールド内のシールドに命中したそれが、凄まじい衝撃音を響かせる。

……速い！

「あら？ どうして分かったのかしら。『バニツシユ』は今回の調整で取り付けた新機構だったのに」

形が違っていたのだ。

隆景は、ミーの戦闘記録は全て見ている。

その中で、彼女が『パープル・レディ』を振るう場面など何百回と目にした。

記憶に焼き付いた斧と、目の前のそれとの形が違う。

新しい機構が取り付けられたことなど、一目瞭然だった。

「でもやるじゃない、素敵。じゃあこれはどう？」

息をついたのも、束の間のこと。

今度は連続で放たれる、音速越えの衝撃波の嵐。

それも闇雲にはなく徐々に退路を狭めるかの如く撃たれるそれを、隆景は必死にかわし続ける。

「アハハハッ、凄いいい！ スペインの候補生達はみーんなこれで沈んだのに！」

「（強い……！　これが国家代表、これがヴァルキリー……）」

こちらの攻撃には即座に対応し、相手の特色に応じた戦法で優位に立つ。

衝撃波が1本、掠める。250しかないシールドエネルギーでは、それさえも軽くは無傷。

性能の全てを機動と攻撃に費やされたノーヴァは、装甲もシールドも紙のように薄い。

『攻撃を全てかわす』ことをコンセプトに作られたのだ。頼みの電撃も相手が地面に

しつかり足を付けていては効果が薄く、実弾ではなく衝撃波では、放射放電による軌道歪曲もできなかつた。

相手のタマ切れを待つにも、あの衝撃波はかなり燃費がいらしく、ハイパーセンサーが捉えた残エネルギー量もあまり減っていない。

さらに一撃、掠める。この調子では、そんなものを悠長に待っていたらその前に負けてしまう。

「(撃つか……? ヴァサヴィ・シャクティを……)」

出力の高いヴァサヴィ・シャクティなら、恐らく電気を逃がしきれずにまともに食らう。

けれども、それにはひとつ問題があつた。

隆景が武装展開を苦手とする大きな理由は、並列思考への適性が無いことだつた。故に彼は、移動しながら電撃を放てない。

先手必勝を狙つたこともここにある。集中力を必要とするイメージ・インターフェースを行使するには、一旦動きを止めなくてはならなかつた。

だが一応、それを打破する手も無くはない。

無いこともなかったが……抵抗感があった。

「(アレをやれと……俺に、アレをやれと……!)」

ふざけた機能を備えた担当官の笑顔が、脳裏に浮かぶ。  
けれど迷っている暇はない。

この状況を変えるには、ヴァサヴィ・シャクティを撃つしかなかったのだから。

「……………ッ」

ぎり、と歯をかみ締める。  
そして。

「……………か……………れ。い……………よ……………し」

「?」

ぼそぼそと何かを呟く隆景。

だが。

「……なツ。あ、相手に、聞こえないと、コード発動不可……!? 担当官、あの魔性菩薩  
……!!」

「どうしたの? もうお終いかしら?」

ぶるぶると身体を震わせ、珍しく悪態を吐く。

遠いロシアの地で、さる女性がくしやみをした。

ともかく、やり直しである。

屈辱に震えつつも、半ば自棄になつた隆景が音声コードの入力を開始する。

「……『神々の王の慈悲を知れ。インドラよ、刮目せよ。絶滅とは是、この一刺し』……ツ  
!」

四肢部に備えられた増電装置ポルトプレスターが、一気に輝く。

増幅した高圧電流が装甲に帯電し、左腕部に収束。

それはさながら本物の落雷が如く、極光と轟音で放たれようとして。

「『焼き尽くせ、ヴァサヴィ・シャク——ッ!?』」

帯電した電気が散る。

放とうとした直前、彼の攻撃は無理矢理中断させられた。

イクニツションブースト

瞬時 加速で間合いを詰めてきた、ミーの腕に首を掴まれて。

「つ・か・ま・え・た。 やつと隙を見せたわね」

「な……瞬時、加速……!?!」

隆景は驚く。

ミーが瞬時加速を公式戦で使用した記録はない。

そもそもダンススマカブルの小型スラスタでは、使えるかどうかも怪しかったと言うのに。

「言ったでしよう？ 再調整したつて。スラスタアのサイズを変えることなく、瞬時加速の行使に耐えられるようにする……苦労したのよ？」

「斧……だけじゃ、無かった……」

そちらにばかり気を取られていたことを、今更ながらに後悔する。

そしてこうなつては、もう逃げられない。

放電しようにも、スラスタアを使って振りほどこうにも。

「ほら、分かる？ 私達の触れ合う場所から、貴方を吸つてるのが」

「くっ……はな……！」

いくら暴れようとも、見た目に反してパワータイプの機体による拘束を剥がせない。その間も、ノーヴァからはエネルギーが吸い取られていた。

ダンスマカブル第3世代機構、『ネブレイド』。

接触したISのエネルギーを吸収する、近接戦において厄介極まりない能力。

これの最も恐ろしいところは、吸収されている最中は武装もスラスタアも使えないと

ころにあつた。

捕らえられてしまえば、吸血鬼に血を吸われるかのように、弱々しくもがくことしかできない。

エネルギー残量を示すゲージが、見る見る削られて行く。

「衝撃波に1度も直撃しなかつた機動能力は、素敵だったわ。今度はダイナーコースを一緒に、ね？」

「……………」

だから、何でダイナーコース。

そう内心で呟き、これがヴァルキリーの實力かと感服して。

「(まだまだ……遠い、な……)」

ノーヴァのエネルギー残量が、0となった。



『試合時間

2分09秒

勝者

ミ』

◎月%日 真の英雄は目で曇る！

負けたし。

スペイン代表、どんだけ強いのか。

戦ってみて分かったことだが、彼女の強さは技術の高さだけじゃない。

相手の長所を殺し、気持ちいい戦いをさせないところに真価があった。

オスカルの多用する戦術、デザート何とかに近い概念かもしれない。

技量は……桁違いだったけど。

俺のように一点特化した使い手は、その一点を潰されてしまえば何も出来ずに終わ

る。

それも今回は完全な封殺。相性の悪さも手伝って、ボッコボコにやられてしまった。あれだね、うん。今回の件で俺の欠点というか改善点というか、とにかくそんな感じのネガティブが大量に露見しちゃったね。

やはり100の勝利より1の敗北だ。負けた方が得るものは大きい。まず、武装について。

『雷来黒雲』が移動しながら撃てないのは辛い。や、集中のあまりいらぬ放射放電なら使えるんだけど、あれは防御とか包囲から抜け出す際に使う受動的な技だし。

その対策に音声認識を付けたなんてふざけたことを担当官は抜かしてたけど、あんなん羞恥プレイ以外の何者でもない。

ノーヴァの機体特性を考えれば、移動しながらの放電がそもそのメインなんだけど……今のところ、ちよつと無理。

そいつが出来れば、また少しは違った戦いが出来ただろう。

……あー。それかいっそ、放電は止めて装甲に帯電させた状態で格闘戦つても有効かも。

今回のミーさんみたいな近接戦こそ本懐な人相手だとキツイけど、考えとしては悪くない。節電できるし。

それと機動。やっぱまだまだ実戦での対応力が欠けてる。

即時に最適な動作を引き出せない。だからこそ競技なんかで動くのは得意だけど、戦闘機動、つまり回避行動は数歩見劣りしてしまうんだよね。

それでもつて、俺の戦いについての才能の無さがここにも出てきた。

戦闘における回避行動は、相手の行動予測が肝要なのだけど、俺はそれが死ぬほど苦手だった。

感覚派ではなく理論派だから、不測の事態に弱い。

次に何をしてくるのか分からない対人相手の行動予測なんて、最たるものだ。

織斑とか相手に『ステツピング・エスケイプ』で攻撃回避できるのは、事前に戦闘記録なんかを穴が開くほど観てパターンを覚えているからであつて。

それでも時々パターン外の攻撃をしてくるから、結果としてシールドで防御して回避率がどうしても100%にならないという。

被弾率4%。ここから上にどうしても行けないのは、俺の戦闘センスが致命的に欠けているからだ。

こればかりは、織斑が羨ましい。

考えるな感じろとか、許して欲しい。

ハイパーセンサーの感度を上げて、目視からの反応で何とか対応しているけど、予め

相手の行動をある程度予測できる戦闘のプロフェッショナル相手だと苦しさは隠しきれない。

何せミーさん、多分俺のやろうとしてること全部一秒前ぐらいに予測してたし。

残影瞬時加速とかエアリアル・ワルツとか、その動きに移行しようとする一瞬の『間』に必ず攻撃を仕掛けてくるんだから。

始終呼吸を乱され、衝撃波回避している最中全く攻勢に移れなかった。

みーじゅーくーすーぎーるー。

俺が戦闘タイプじゃないとか、ノーヴァが完全にレース仕様だとか除いてもこいつは無い。

いつそ武装を足すか。ロケットパンチも出来る腕部装備の巨大クロウブリュンヒルデ・ロマンシア『死が2人を断つまで』とか、ブースター付きの空飛ぶ槍『絶頂無常の夜間飛行』とか。名前が悉くアレだが、アミーエーラお嬢さんと担当官に文句を言っても聞く耳持っていない。

しかしなー、己の未熟を武装に頼るのはなー。そも、武器の扱いが苦手な俺にあまりわらわら武器があってもなー。

駄目だ、課題が多すぎて一旦思考停止。会長さんとか山田先生とか簪とかに相談しよう、そうしよう。

ちなみにミーさんだが、織斑先生に連行された。

ふらつと居なくなつた後、相当あちこち探していたらしい。

……織斑先生が手玉に取られている姿なんて初めて見た。

山田先生と、あと騒ぎを聞き付けた会長さんがやってきて、頻りに「おかしなことされなかつた!？」とか聞いてきたが……別に何も。

そうだな、精々……うん。

ほつぺた舐められた、ぐらいか。

ヨーロッパだとキスぐらい挨拶だつて聞くから、それも別に普通なのでは。少しびつくりしたけど。

……違うの、だろうか？

◎月&日 オイお前、ちよつと曇つてみ？

会長さんが警戒した様子で、俺の周りをうろちよろしてる。

先日ミーさん相手に喧嘩していたが、それと関連しているのか。

俺は今後の課題を踏まえ、訓練メニューを作成してた。

……やっぱ、メインは移動中の放電訓練かなー。

パソコンで表を作っていたら、ヴィルヘルミナがやってきた。

ワイヤーブレード15本達成したのかと思いきや。

スペイン代表候補に任命されたのであります。

……お前かい!!

それと、ワイヤーブレードの同時操作数が16本になったのであります。

2本増えてた!!

あと、メロンパンも貰った。

これやたら旨いんだけど、どこの商品だろ……。

## 34

◎月！日 千のくもりにならなくて、泣かないで下さい

いつだろういつだろうと思いつけ、早半年。  
とうとう俺の部屋換えである。

思えば長かった。

入学初日に簪と半裸でエンカウントしてから、ずーっと一緒だったのだから。

織斑を見てみなさい。最初はサムライガールで次にオスカル、しばらくー人部屋を挟んで会長さん。

半年で何度ルームメイト変わってるんだ。



いやしかし、いざ部屋が変わるとなると感慨深いものがあったりする。

この壁の傷は、本を積み上げ過ぎた簪がぶつかった時のもの。

床の凹みは簪が落としたスパナの跡。

部屋の簡易キッチンをよく使ったもんだ。家事スキルゼロな俺が唯一まともに作れるホットミルク、簪が大層気に入ってくれて。

牛乳とハチミツは、この部屋に必ず常備してあった。

見事に簪絡みばかりだが、ルームメイトが彼女なのだから当然だ。

後はよく遊びに来た会長さんか。簪と仲直りしてからは、3日に2度くらいの頻度で来ては俺のベッドを占領してたな。

……たまに布仏先輩に引き摺られてったけど。

いやはや、思い出深いっていいもんだね。

だけど人間前を向いて歩かないと。いつまでも過去にばかり囚われてたら、未来が見えなくなるんだよ。

……だから、さ。

いい加減手を離してくれないかなー、簪。

「や」って。ー文字で否定ですか。

お願いかんちゃん、俺今日から織斑と同室なのよ。

「アイツか、またアイツのせいか」みたいな顔しないで。別に織斑、何ひとつ悪くないから。

大体今までの方がおかしかつたんだからさー。

男女七つにして……あれ、九つだったかな……とにかく、年頃の男女が同じ部屋つてのはよろしくないのだよ、世間的的に。

そもそも簪は最近無防備が過ぎるのね。風呂上りはバスタオル一枚だし、寝る時下着だし、襲われたって文句言えないっての。

俺との共同生活に慣れ過ぎです。これを機に感覚を元に戻しなさい。扉を溶接しようとしなくて欲しい。

そんなことしたってこのドア、結構簡単に破壊されるんだから。

特に1025号室のドア辺りなんか、あんまり修理申請出されるもんだから次壊したらベニヤ板にするって警告があつたんだから。

ノックしてもコンコンいわなくなるぞ。精々ばやんばやん、だぞ。

会話係数の著しく低い俺にネゴシエーションとか、普通に無理ゲーだと思う。

頑なに部屋の移動を嫌がる簪を宥め、どうにか部屋換えを完了させるのにえらく時間が掛かった。

そりゃ俺だって、むさい男より可愛い女の子がルームメイトの方がいいさ。

半年も一緒だったし、今更他の奴とルームメイトとか疲れるだけだし。

つーか3人も女子と同室経験があり、どの子にも手出ししてない挙句一部ではホモ認定受けてる織斑と一緒に部屋とか、もしかして俺身の危険？

や、俺だつて簪に手出してないし……だがこの男、如何にも女に興味ありませんみたいなオーラが……まさか本当に!?

その日は怖くて寝れなかった。部屋の匂いとか違つたし。

早くも挫折しそう。

### ◎月\$日 特盛り

どうにも1度疑つてしまつと、人間疑心暗鬼になるらしい。

もう俺の中では織斑が普通に同性愛者に思えてならない。

1メートル圏内に近寄ってくる度、退いた。

なので結局、簪の部屋に遊びに来ていたり。

前と大して変わらん。

会長さんも来たので、前から1度試してみたかったことを実行してみた。

手にするは櫛とドライヤー。

簪の内巻きヘアーと会長さんの外跳ねヘアーを、1回入れ替えてみたかったのだ。こう、印象が変わると思う。

……………。

たれ目に外跳ねは似合わない。逆もまた然り。

いつもの方がいいや、戻しとこう。

しかし……部屋に戻りたくない。

疑いを晴らさなければ、俺は安心して眠れないのだ。

寝不足ー。

◎月#日 温もり

このままでは不味いと思ひ、織斑が居ない間に室内チェックをする。

奴も男だ。己の欲望を発散するもののひとつやふたつ持っているだろう。

ちなみに俺は、その手のものは全部スマホだ。何せ簪が同室だったし、その辺証拠を残しちゃならねえ。

まずは基本から行くか。

ベッドの下……無い。

天井裏……無い。

引き出しの二重底……そもそも、んなもんじゃない。

うむむむむ。あまり取り出し辛いところに置いたら実用性が無くなるし……枕の中、

無い。

チツ、奴め。中々巧妙に隠すじゃないか、どこにしまいかんである？

筆筒の裏か？ それとも本棚にカモフラージュか？ 若しくはUSBか何かでデー

タ保存してる可能性も。

小1時間探すも見付からない。

まさか持つてない？ 本当は奴さん、女子生徒にこっそり手を出してるんじゃないかな

うか。

それなら俺は安心なんだが……む？

本の中に挟んである紙切れを見付け、引っぱり出してみる。

……水着姿の織斑先生の写真だった。

なんだ、良かった。ソツチか。

その日俺は、ぐっすりと眠れた。

◎月〆日 この世の全ての曇りに感謝を込め、いただきます

一晩寝て思った。

織斑がシスコンの姉スキーなのは良い。

だが考えても見ろ。もしも奴が姉スキーなうえにバイセクシャルだったら？

俺に安息など存在しない。

同室になってから馴れ馴れしさの増した奴さんの態度を見るに、そいつを否定できない。

何故一緒に着替えようとするのだ。

どうして食事だの何だの、とにかくセツト行動をしようとするのだ。

意を決し、転入当初は男子扱いだったオスカルに、奴と同室だった時のことを尋ねてみる。

結果はクロだ。

奴は姉スキーなうえにバイだったのだ。

なんとという変態指数の高さ。近親相姦は俺に被害が無いから2歩くらい譲って見逃してやるが、どっちもイケルだなんて2億歩譲っても認めない。

俺は普通に女性が好きなのだ。強気より内気で、吊り目よりたれ目で、饒舌よりやや無口で、理系か文系かで言えば理系で、眼鏡かけてて手料理がちよつと薄味で、髪は内巻き気味の女性がタイプなのだ。

好きになったのは、会長さんだけど。あれ、条件にひとつも該当してない。

とにかく奴の変態指数の高さに、俺のスカウターは測定限界越えのドカンだ。身の危険が危ない。

くつ、こうなつたらどうする。簪の部屋に立て籠もるか、会長さんに助けを求めるか、山田先生にエマージェンシーを出すか、いつそ織斑先生にどうかして貰うか。

こちとらノーブアの調整とか訓練メニューとかやること目白押しだったのに、何でこ

んなことに悩まなくてはならんのだ。

心労で辛い。メロンパンが食べたい。

だがただのメロンパンじゃ駄目だ。ヴィルヘルミナがくれる、炎髪印のカリカリもふもふメロンパンが食べたいのだ。

アレは癖になる。でもどこで売ってるのか。

聞いても教えてくれないのだ。最近は毎日のようにくれるから問題ないけど。

結局消灯寸前まで部屋に戻らず、簪のところに居た。

ごめんね、迷惑かけて。でも織斑が怖いの。

◎月@日 俺がお前の、最後の曇りだ

織斑をどうにかしてくれと、とうとうサムライガールズに申し立てる。

元はと言えば、お前達に女としての魅力が欠けているから奴が同性と姉に走ることになつたんだ！

そうに違いない、だから何とかして300円あげるから。

ボコボコにしてドーすんだよ。そんなだからオマエタチは……！



ほら見ろ、俺に助けを求めに来たじゃないか！ もうほんつとにもうほんつとに！  
簪と会長さんを見習えー！ あの2人は天使だぞ、多少の余所見は許してくれるタイ  
プだぞきつと！

ですよねーとちようど近くに居た会長さんに言ったら、一瞬目に光がなくなつた後顔  
を逸らされ、「そうね」ととても平坦な声で返された。

なんだろ、何かまずいこと言つただろうか。

仕方ないので、奴さん方に乙女としてのあり方を指南することになつた。

どうしてそんな流れになつたのかは知らない。俺が知りたい。

まず彼女らに必要なのは、男の性を許せる寛容さだと思う。

なので優しいことに定評のある簪を連れてきて、こう在りなさいと言葉少なに熱弁す  
る。

結婚するなら結局はこんな子が一番ですと言つた辺りで、顔を真っ赤にした簪が氣  
絶。

医務室まで連れて行き、一旦講義中断。

そして何故か、会長さんにほつぺを抓られた。

氣を取り直して、テイク2。

魅力ある女性に必要なのは母性である。

なので母性なら学園屈指の山田先生に来て貰い、こう在りなさいと教え込む。しかしどうにも、最近先生のことを時々「お姉ちゃん」と呼びそうになる。不機嫌そうな会長さんに、うにーとほっぺを引つ張られる。なにゆえ。

しかし、慣れないことをすると腹が減る。

何か食いたいなーと思つた辺りで、ヴィルヘルミナがメロンパンをくれた。んむ、うまい。

こうやって気の利く女を演出するのも効果的だと刷り込んでおいた。

……だが彼女らは恋愛面に関して、明後日の方に向いた認識を持つているからな。上手く行くかどうかは、分かんない。

ところで会長さん、何で凹んでるんですか。

「私なんてどーせどーせ」とか……もしかして、例に出して欲しかったのか？ あつはつは、そいつは無理だ。

だつてあの5人が、会長さんみたいになれる訳ないじゃん。

急に泣き出した会長さんに押し倒された。

ちよ、窒息するー。

◎月\*日 もう、みんな曇るしかないじゃない!!

ほうほうの体の織斑と遭遇した。

やはりあの5人に、まともな感性を期待した俺が間違っていたらしい。

だが今日の俺には、心強い味方が居るのだ。

後ろでべったりくっついてる会長さん。

あの、嬉しいけど離れて下さい、歩き辛いです。

俺、過度にくっ付かれたりするの苦手で……こう、押されると引いちやうんで。

織斑は会長さんが追っ払ってくれるので、伸び伸びとノーブアの訓練メニューやセツティング調整ができる。

……『雷来黒雲』の音声認識プログラムを発見！ 消してやる、消してやる！

なんですと!?! パスワードが必要!?! なんもん知るか、あんの魔性菩薩め!!

簪にハッキングを頼んでみるが、見たことも無いほど強固なプロテクトがかけられているらしく、手も足も出ないらしい。

学園のファイヤーウォールより堅いとか、ふざけてんのか。

破るには少女の秘密とやらが必要らしいが、意味が分からないので捨て置いた。

ノーヴァを調整してたら、どこから聞きつけたのかテストタロツサが。  
こいつ苦手なんですけど……。

会長さんと簪が2人がかりで追っ払ってくれた。感謝感激。

5人から『ラブ師匠』と呼ばれ、指南を求められる。

何故こうなった。

◎月◎日 眞実は、いつも曇り！

いつか織斑に襲われるんじゃないかと、戦々恐々している世界で2番目の男性I S適性者、藤堂です。

ハジメテが男だなんて死んでも御免だ。そんなことになるくらいなら、いつそ舌を噛んで自害する。

ロシアに連絡して、音声認識を外せと抗議した。

俺の戦闘センスの無さは誰もが知っている。一朝一夕で移動中の『雷来黒雲』使用が

できないことなど、百も承知だ。

だが、だからと言ってあんなな中学2年生丸出しな台詞で代用なんかしたくない。ただの羞恥プレイだあんなもん。

要求は却下された。あの魔性菩薩、いつか報復してやる。

もういい、使わなければいいんだあんなん。

それよりも、サムライガールズ5人の問題が切実だった。

なんだよラブ師匠つて。恋愛経験の無い俺に師事してどうするんだよ。

そもそもお前達、自分が何で駄目なのか全然分かってない！

まずサムライガール！ 口より先に手が出るのを何とかしろ！

いや、手ならまだいい。真剣や木刀を持ち出すな！

見ろ、織斑のあの顔を！ まるで潰れたアンパンみたいになってるぞ、元がイケメン

だっただけに悲惨すぎるだろ!?

次、お蝶夫人！ サープの際の手首にスナップが足りてない、もつとこう鞭のように

！

ボールの回転が弱いからツイストサーブが完成しないのだ、某テニス漫画だと最初期の技だぞ！

そんなことで竜巻サーブや竜巻スマッシュができると思ってるのか、グラウンド10周

走って来い！

ミ二子！ 貴様は酢豚以外のものを作れ、延々同じものだど相手だつて飽きる！

あと暴力を振るうな暴力を！ お前の場合、言葉の暴力まで殺傷性が高いのだ！

穏やかに、楚々と咲く花の如く振舞え！ 体の小ささを利用して相手の保護欲を誘え

！

あざとかろうが何だろうが知ったことか、萌えだよ萌え！

んで、オスカル！ お前は一見問題無いように見えるがその実大問題だ！！

普段大人しい奴ほど怒ると怖い、そんなマイナスのギャップを完全にイメージとして持たれてるじゃないか！

猫被るんならずつと被つてろ！ 頭に縫い付けとけ！

そしてお前はなんと言つても間が悪いんだよ！ 空気読み過ぎて逆に深読みし過ぎなんだよ！

最後に柳生！ じゃ無かった薔薇水晶！ いや、やっぱりもう柳生ちゃんでもいいわ！  
歯の治療費はもういいから、取り敢えず俺にひと言謝れえええええつ！！  
などなどなどなど。

喋るの苦手だから、そんな感じでメルマガ風に5人全員に送り付けた。

そしてメルマガ風にしたのが悪かった。全員定期購読を申し出てきたのだ。

かくして、HN『毛利家の三男』たる俺の発行する『隆景恋愛指南虎の巻』が、世に羽ばたくことに。

これが後々会員数2万を超え、俺にひと財産築かせるなど、本人である俺さえも今は知り得ないことであつた。

どういつもこいつもアホばつかりだ。

◎月※日 ド派手なcloudyになりそうだぜ

ガールズ共には期待できそうに無いので、自分からも手を打つことにしよう。

とにかく奴の興味を女にだけ向ければいいのだろうか？ やつて見せようじゃないの。

同性であることを利用し、異性の好みなどについての話に持つて行く。

俺の手振りを理解できないあ奴との会話は骨が折れたが、身の安全の為だ。

だが……だ・が！

よりによつて「特に考えたことも無い」だど!? おま、それ人としてどうなんだ！

十代男子としてどうなんだ！

アレか、「俺女に興味ないから」とか、中学生男子みたいなことを未だにほざいている



のか!? あんなの思春期の照れ隠しに決まってるだろうが!!

それともやはり男がいいのか貴様! もう嫌だ部屋を変えてくれ!!

挫折して簪の所に逃げ込む。

弱音など吐きたくも無いが、今回ばかりは話が別だ。

誰か助けて。

◎月△日 ピカチュウ、曇りだ! できない? 雷落とせるなら曇りくらいどうにかしろ!

生徒会室で仕事をしていると、見たことの無い生物が現れた。

人間に似ているが、服の袖がやたらだぶだぶしている。

もしや妖怪『袖余り』かと思ったら、布仏先輩の妹だった。

てか、クラスメイトらしい。初めて見るけど。

織斑との同室に耐え兼ね、会長さんに相談した。

事情を話すと、あの人は「それなら私と一緒に部屋の部屋になる?」と提案してくれたが。

そこまで迷惑はかけられない。でも気持ちとはとても有難かった。

昼のメロンパンを頬張りつつ、この問題についてどうしたものかと考える。

いざとなったらノーヴァのスタンガンで撃退できると言えど、精神衛生上とてもよろしくない。

四楓院に護身術を習うことにした。

蹴りだけやたら筋がいいと褒められた。

何故か、練習中に物陰から会長さんが恨めしそうに見てるけど。

◎月☆日 曇らなきやダメだ、曇らなきやダメだ、曇らなきやダメだ

心労で2キロ痩せた。

ただでさえ56キロしかないのに。死ぬ。

さて、藤堂元春とかいう人物から連絡があつたんだが。

誰だつたろう。俺と同じ苗字だなんて、ハハハハハ。

冗談だ。あのバカ兄貴め、俺に一体何の用だつてんだ。

もしやとうとうアミエーラお嬢さんに対して強攻策に出てバイトを首になつたばかりか、ムシヨ入りにでもなつたのか？

ロシアの刑務所は地獄だぞ……あんのバカ。

違ったらしい。フラれたそうだけど。

まあ本国に居た時、脈など欠片も感じられなかったから意外性も何もないが。

しかし違うのなら何だというのだ。こっちはストレス過多でバカの相手などしてられんと言うのに。

ホモ疑惑が払拭できなくて困っているのだ。お陰で俺の中じや織斑ホモ率が9割超えなのだよ。

ガールズの株を上げようと懸命に画策もしているが、あの連中まるで役に立たん。いつそ俺の知り合いを紹介してみるか？ テスタロツサとか、四楓院とか。

あの2人なら少なくとも、ガールズよりは100倍マシな筈……ヴィルヘルミナはダメだ、メロンパンの女神にそんなことさせられん。

で、何の用なのか。

散々人にフラれたことやナンパが上手く行かないなどの愚痴を語り1時間。

俺はよく耐えた、もう通話ブッチしてもいいよなど7回思ったあたりで、ようやく本題に。

本国からの、通達。

この俺藤堂隆景はこの度、ロシア本国の国家機動部門代表に任命。

来年開催の第3回モンド・グロッソ機動部門への出場が、決定しました。

.....。

はい？

◎月×日 見ろ、人が曇りのようだ！

とうとう機動部門代表になってしまった。

確かにこここの所、戦闘技術の停滞が浮き彫りになっている中、真逆の現象として機動技術の冴えは留まる所を知らなかった訳だが。

ノーヴァの機体稼働率も最高で91%弾き出したし……『雷来黒雲』は40パー前後だが。

被弾率も2%になった。クロス・イグニッション・ブー스트 残影瞬時加速で残像を残す地点に軽く放電してハイパーセンサー誤魔化す技術も向上したし、エアリアル・ワルツのキレも目に見えて良くなっている。

ちなみに残影瞬時加速だが、会長さんは無事習得した。あの人一緒に水分身残すから、多分この技は俺より向いていると思う。

織斑？ その名を俺の前で出すんじゃないねえ。

しかし、幾らなんでも早過ぎるだろう。

次のモンド・グロッソ来年じゃん。準備期間1年しかないじゃん。

本国何考えてんの。抗議の電話かけたら、いつぞやの悪人笑いな役人さんが「無問題」言ってた。

ロシア人が広東語を話すなああああつ!!

会長さんとこに相談に行った。

生徒会室のソファでお昼寝中だったから、毛布かけて出直す。

かわええ。

続いて簪の所に。

打鉄式式の調整を手伝いつつ、顛末を話した。

励まされた。和んだ。

山田先生。きやーきやー喜んでくれた。

や、その気持ちは嬉しいが。

一緒に居た織斑先生からは、任命された以上優勝する気概で行けとのありがたいお言葉が。

そりゃ目指すけど。

ヴィルヘルミナからメロンパンを貰う。

精神値が回復した。

どこからか聞きつけてきたテスタロッサが、いずれ自分も同じ舞台に立つて決着をつけるかと再度ライバル発言。

つーか、お前つて国どこだっけ。イタリア？

織斑と遭遇。脱兎で逃げる。

◎月■日 スタープラチナ・ザ・ワールド！ 『時は曇る』

数日悩んだが、結局のところとても名誉なことなので素直に喜ぶことにした。

今度本国で代表任命のインタビュー受けるのが辛い、そこは耐えよう。

さ、て。俺は今、別のことで悩んでいる。

自分を少しでも誇れるようになれば。

今まで『それ』を機会として、俺は考えていた。

何をつて。決まってるし。

会長さんに告るんだよ。

曲がりなりに、国家代表の一角として名を連ねることになった。

今なら、あの人の隣に立ちたいと。

そう伝えても、いいのではないだろうか。

しかし。

しかしだ。

それには少々、いや、でかい問題がひとつあった。

結論を先延ばしにしていたが、もうそろそろ限界だろう。

つーか、限界迎えたんだよっいさつき。

簪に告られた。



◎月◇日 曇りがお前の、ゴールだ

分かった。

簪が俺を『そういう目』で見ていることぐらい、分かった。

織斑じゃあるまいし。素直な好意を向けてくれる子の想いぐらい、分かるさ。

でもそれは、簪の方だって同じ。

俺が会長さんを好きなことぐらい、彼女はお見通しだった筈。

なのにああして俺に告白してきたのは、俺の事情が変わったからだ。

2学期が終わったら、俺はモンド・グロツソに備えてロシアに帰る。

開催は夏だから、来年の2学期まで学園を休学するのだ。

同じく国家代表の会長さんは曲がりなりにも生徒会長だからもうしばらく学園に残るが、それでも開催半年前になれば俺同様国での強化合宿に入る予定。

つまり、当分会えなくなる。

半月ロシアに行っただけであれだけ寂しがってた簪だ。少なくとも1年近く他国へ行く俺に、自分を刻んでおきたかつたんだと思う。

俺が簪の立場なら、きっと同じことをする。

それに自分を誤魔化したってしょうがない、認めるさ。

俺は簪のことが好きだ。お世辞にも対人関係を築くのが上手くない俺の、唯一の親友だ。

言葉を余り口に出さない俺の意思を理解してくれるし、何より彼女が居なければ今の俺は有り得ない。

最初に俺に手を差し出してくれたのは……簪だ。

『お姉ちゃんの次でもいい』

彼女はそうも言った。2番目でもいい、と。

だが俺には、そんなことできない。

2人も3人も俺は人を愛せない。

簪や山田先生のこととは好きさ。大好きだ。

けれど好きと愛は違う。

俺が愛してるのは。

心の底から好きだと言える人は、たった1人。

……なの、だが。

逃げる会長さんを追う俺。

いつだかとは逆のシチュエーション。

あの人に、簪から告白されるシーンをばっちり聞かれてしまっていた。

いや、そもそも最近彼女は気付けば近くに居た気がするから、それも必然だったのだと思う。

ともかく俺は、あの人に伝えたいことがあると言うのに。

けれど会長さんは聞きたくないと言わんばかりに背を向けて、俺から逃げる。

足は俺の方が早い筈だが、それだって多少の差。

何よりあの人逃げる方が巧みで、中々追い付けない。

けれど余程動揺しているのか、見失いもしない。

多分ここで会長さんに追い付けなかつたら、俺は一生後悔する。

だから絶対に逃がさない。なんとしても追い付く。

何度もあの人を呼びかけた。

けれど、会長さんは止まってくれない。

互いの距離はジリジリと縮まってはいるけれど、それでもこのままじゃ埒が明かない。

ツ——ああ、もう、面倒くさい！

後で怒られるだろうが、そんなもの知ったことか!!

——ガンツ！

常に手にしていたスマホを、邪魔そうに投げ捨てて。

隆景は、ノーヴアを部分展開させた。

## 文字ではなく、言葉で

現行第3世代機最速のIS、ノーヴア。

部分展開によりそのスピードの一端を發揮させた隆景が、生身の楯無を捕らえることはさほど難しくはなかった。

ガッ！

「きゃっ!?!」

「……………はあ……………はあ……………捕まえ、ました、よ」

金属の掌で彼女の両腕を掴み取り、怪我をさせない程度の力で壁へと押し付ける。

「は、離して！ 離してよー！」

楯無は掴まれた腕を振り解こうと暴れるが、相手は部分展開とは言えI.S。

以前の損傷で修復に出した『ミステリアス・レイデイ』が戻ってない今、それを解くことなどできなかった。

そして捕らえたことで、隆景は背を向けていた彼女の顔を見遣れた。

紅玉のような瞳に涙を溜めて、それでも泣くまいと必死に堪えている。

そこに普段の飄々とした雰囲気は、見る影もなく。

彼女がどれだけ悲しい思いをしたのか、それがありありと伝わってきた。

「……会長さん。聞いて、下さい」

「嫌！ 聞きたくない、何も聞きたくない!!」

駄々をこねる子供のようになり、楯無が首を振る。

妹が隆景へと想いを告げる瞬間を目の当たりにしてしまった今の彼女は、彼の言葉な

ど聞きたくなかった。

自分と簪なら、きつと彼は妹を選ぶから。

そう疑いもせずはずつとずつと思いついていた楯無は、もう何も聞きたくなどなかった。

「楯無、さん……お願い、ですから」

「嫌あつ！ 嫌なの、聞きたくないの！ もう私のことは放つて置いて！」

泣き叫ぶような、悲痛な声。

とうとう涙が抑え切れず、ぼろぼろと溢れ出す。

そんな彼女の姿を見た隆景は。

ぎしりと、齒を軋ませて。

「いいから聞けつて言つてんだろぅが!! 言うことを聞け楯無!!」



大声どころか喋ることさえあまりしない隆景の、吼えるような怒声。それを間近で聞いた楯無は、びくりと肩を震わせて停止した。

「……すみません、大きな声を出して。けど……聞いて、欲しいんです」  
「……………」

怯えさせてしまったことを詫びるように、目を伏せる隆景。彼の様子と、言葉に真剣な色を感じて。楯無も抵抗を止める。

「俺は」

ノーヴァを待機状態に移行させ、手を離し。

彼女の目をじっと見据えて。隆景は、静かに言った。

「俺は貴女を、更識楯無を愛してる」

「——ッ!!」

楯無が、目を見開いた。

それはずっと欲しかった言葉。

彼の口から紡がれることを、何より渴望した台詞。

けれど。

「で、でも……嘘、嘘よ。だって隆景君は、簪ちゃんのことを好きなんでしょ!」

「……? 確かに好きですが、多分貴女の言う、好きとは少し違う。何故そう思うんですか?」

首を傾げる隆景に、やはり楯無はかぶりを振る。

恋した男が惚れているのは自分の妹なのだ、彼女は疑いもせず思っていた。

「だって……私のことは、名前でさえ呼んでくれないのに……」

「……それは」

「それだけじゃない! 私と簪ちゃんを呼ぶ時は必ず簪ちゃんの方から先に呼んでた! 相談事がある時だって、私の処に来るより先に簪ちゃんの方に行ってたじゃない!」

「……………」

名前で呼ばなかったのは、単に『会長さん』の渾名が気に入っていたから。

簪を呼ぶのが先だったのは、語呂的にそっちの方が微妙に呼びやすかったから。

相談事で簪を先に頼ったのは、楯無に頼り過ぎるのはよくないと思っていたから。

なのだが、そうした行動のひとつひとつが積み重なって、彼女に誤解を与えていたら  
しい。

恋愛経験皆無な自分の無神経さに頭を抱えたくなるも、今はそんなことをしている場  
合ではなかった。

「……俺は、貴女に嘘を吐けるほど器用じゃない。俺が異性として好きなのは、ずっと貴  
女だけでした」

「……………」

饒舌に話すことが苦手な隆景は、言葉を尽くして説き伏せることができない。

だからせめてと、ノーヴアの待機形態である色眼鏡を外し、赤い瞳で彼女を見つめる。

己の言葉に嘘は無いと、伝える為に。

「……………ほんとう?」

やがて。

消え入りそうな声音で、楯無がそう問うた。

「はい」

「私……すごく嫉妬深いのです? 簪ちゃんみたいに、優しくないので?」

「知ってます」

思えば、ここ最近は特に顕著だった。

フェイトや夜一、ヴィルヘルミナは無論のこと、簪と一緒に居る時でさえ不満そうにしていた。

「生徒会の仕事だって実はよくサボってるし、自分が本当に思ってることだって言わないし」

「分かっています」

「虚ちゃんにはストーカー気質だって言われるし、たまに部屋まで忍び込んで隆景君の

寝顔を見たりしてたし」

「……そんなことしてたんですか」

「それに、それに——」

まだあるのか、更に言葉が続けようとする楯無。

しかし隆景がそんな彼女の唇にそつと指を当てて、それを止める。

そして、少しだけ笑った。

「分かってます。いいところも悪いところも、全部。清濁併せて、俺は貴女が好きなんです」

「……たかかげ、くん」

「会長さ……楯無さん。良ければ、返事を聞かせて貰えませんか？」

指を離し、隆景が一步退く。

色眼鏡をかけ直す彼に、楯無は。

「……イヤ」

「え？」

「名前。呼び捨てにしてくれなきゃ……ううん」

今度は楯無の方が、隆景に一步近付き。

「楯無じゃなくて、刀奈。私の本当の名前」

「ッ……」

「そう呼んで。じゃなきゃ、イヤ」

既にその行為が答えと言ってもいいだろうに、素直じゃない。そんなことを内心で思いつつも、隆景は小さく息を吐いて。

「刀奈さん……いや、刀奈」

その名を、囁いた瞬間。

彼は楯無に、ぎゅっと抱き締められた。

「隆景君……ッ！　好き……大好き……ッ！」

それは簪が隆景に対し告げた想いと、同じ言葉だった。

内面も外面も全然違うのに、こういう所は姉妹揃ってそっくりなのだな、と。しかし野暮になるので、思いはしても口には出さず。

「……刀奈」

もう一度、彼はその名を呼んで。

自分の胸でまた泣き出した楯無の背を、そつと抱き返した。

%月&日 ジョセフ・ジョースター！ 貴様！ 曇っているな！！

やっとスマホを新調できた。

いや、思わず投げ捨てた俺が悪いんだけど。

取り敢えず、顛末を語っておこうと思う。

あのことだが……ノーヴァを展開させたことは、特にお咎めなしだった。

織斑先生曰く「なんのことだ？」ってアレだったけど。多分見逃してくれたんだと思う。

つーかそれ以上に問題だったのは、俺の告白シーンとかそもそも会長さ……刀奈と追



いかけっこしてた場面から、不特定多数の生徒に見られてたってことで。翌日には、学園全体に広まっていた。

何せ学園に2人しか居ない男子生徒と、生徒会長の恋愛話だ。

更にはロシア出身の生徒からのタレこみで本国まで話が広まり、雑誌で特集まで組まれる始末。

『国家代表と機動部門代表の熱愛発覚』とか……もう勘弁して下さい。

それと、簪のことだが。

すっかり謝った。もう土下座とかする勢いだっただ。

内気な彼女の勇氣と誠意を無碍にしたんだ。殴られるのくらい覚悟の上だった。

そも、一発ぐらい貰わないと俺の気が済まない。

笑って許された、けどね。

こうなる予測はあったらしい。その上で、告白に踏み切ったと。

思わず泣きそうになったさ。俺の唯一無二の親友は、なんて芯の強い女なのか。

ガールズ共にも見習って欲しいもんだ。あいつらぜんぜん進歩してないんだから。

俺の恋愛指南虎の巻が功を奏したのか、暴力は若干減ったが。

あとお蝶夫人に冗談で送ってたテニス指南の成果か、先日手塚ファントムを体得してた。

風林火山の『雷』が効かなくなってしまった。恐るべし縦ロール。

そして織斑だが、流石に彼女持ちを襲ったりはしないだろうと信じたい。

そもそもホモ疑惑自体、疑惑に過ぎないわけだし。

警戒心を完全に解くのは、無理だが。

%月！日 みんな、油断せず曇ろう！

現在生徒会室で工作中。

2学期終了と同時に俺はロシアに帰国するから、後任の書記に引継ぎ等もしなければならぬ。

……確か書記って、俺の他にもう1人居た筈なんだが。そいつはどうなっているのだらう。

布仏先輩に聞いてみたところ、気まずそうに目を逸らされた。

ちなみに、俺の後任は簪だ。

今も書類の整理手順や資料の配置など、鋭意伝達中である。

そして会長の刀奈は、俺の膝を枕に昼寝中。

働けよ。最近すっかり甘えたがりのナマケモノなんだから。

一部では俺が甘やかしているとも噂されているが、そんなことはない。

……4：6で、刀奈の方が甘えてるんだよ。

ちなみに俺が4だ。そいつは譲れない。

付き合うようになってから、大体彼女はこんな感じだった。

一緒に居る時間自体増えたとし、その時はこうして俺にくっ付いてることが多い。

まあ、俺から触れたりすることがあまり無いし。時々頭撫でたりはするけど。

寝返りを打つ刀奈の髪を、そつと指で梳る。

かわええ。

あまり甘やかさないで下さいと、布仏先輩から嘆願された。

……そんなに俺が甘やかしてるように見えるのだろうか。

%月%日　クモーレ！

もうすぐ2学期も終了である。

俺は荷物を纏め、お世話になった方々への挨拶回りに出た。

まずは勿論山田先生。

この人の指導が無ければ、俺の今はきっと違うものになっていた。

ロシアに帰る俺を惜しんでくれたが、同時に機動部門代表としてのこれからの活躍を祈っていると、激励される。

そして、来年また学園に復帰するのを待っているとも。

……先生には、本当に頭が上がらない。

俺に兄弟は、あの恥晒しの兄貴バカしか居ないが。

姉というものが居たのなら、きっとこの人のような感じなのだろう。

続いて織斑先生。

意を決して俺は、織斑に抱いているホモ疑惑を先生に打ち明けた。

弟がまさか同性愛者かも知れないということに、彼女は多大なショックを受けていたが。

「教えてくれて感謝する、お前が復学するまでには絶対に矯正してみせる」と。

ありがたいお言葉を、頂いた。

ヴィルヘルミナ、四楓院、あとついでにテスタロッサ。

テスタロッサの奴がわーわー五月蠅かった。絶対に機動部門代表にまで上り詰めてリベンジするのだ、なんだの。

まあ奴の技術もかなりのもんだから、強ち大口とも言い切れない。

ついでに言うとう四楓院は、つい最近日本政府から代表候補生の打診があつたらしい。それももしかすれば、来年のモンド・グロツソまでには格闘部門代表に選ばれるかも知れないとのこと。

……つまり、スペイン総合代表兼格闘部門代表のあの人と戦うかも知れないのか。

フアイト、ガンバ、ご愁傷様。

最後にヴィルヘルミナよ。

メロンパンありがと。そしてお前が代表になるとしたら、技巧部門あたりか？

オールマイティだから総合もイケそうだが、スペインの代表は文字通り化け物だし。

エイリアン級の強さだった。恐らく来年までに抜くのは不可能だ。

一応、ガールズや織斑にも別れを告げておくことにする。

織斑……次会う時まで、しっかりと女性を好きになるんだぞ。男や姉はアブノーマルだからな。

サムライガール。暴力癡も程々に。

お蝶夫人。目指せウインブルドン。

ミニ子。料理のレパトリー増やせ。

オスカル。被った猫が剥がれないようにな。

柳生……誠意ある謝罪をしたから許してやろう。

そしてお前ら、散々人のメルマガを方々で言いふらし回ったな。

いつの間にか会員数が4桁に達してんだよ。

月額500円なのに……最早コレだけで普通に食って行けるんだが。

%月?日 言つとくが俺はソロだ。1日2日曇りになるくらい、どうってことないぞ。

2学期終業式。

今日俺は、モンド・グロツソに備えロシアに帰る。

山田先生と簪、ヴィルヘルミナが空港まで見送りに来てくれた。

炎髪印のメロンパンも、しばらくは食べ納めだ。結局どこで売ってるのか、教えて貰ってない。

激励と再開の約束を胸に、俺は飛行機へと乗り込む。

1年。長いようで短い時間だ。それまでに、俺は俺にできる完璧を求めて鍛錬を重ねよう。

そして。

なぜ一緒に居るんだ刀奈。お前のロシア行きは来年だろうが。

生徒会長はどうするんだよ。譲った？ 誰に!?

……そう言えば、俺が書記業務の引継ぎをしている傍ら、刀奈がヴィルヘルミナに色々と書類を渡したり書かせてたりしていた気が。

まあ、かくして。俺と刀奈の、モンド・グロツソに向けた1年間が始まるのであった。

## 世界最速の男

インフィニット・ストラトス。

世界最高峰の技術、その粋を結集して作られたマルチフォーム・パワードスーツ。かの歴史に刻まれた『白騎士事件』により、その存在が世界に認められて11年が過ぎた。

そして、その年の9月。

ISの次世代を担う少女たちが集う学び舎、『IS学園』では、生徒一同を集め、全校集会が開かれていた。



「そう言えば、今日って何の集まりなんだ？」

全校生徒の集うホールの中、ただ一人の男子生徒である一夏が首を傾げて言う。  
隣に立っていた箒が、呆れたように嘆息した。

「お前は……学園祭の連絡事項だろう、去年も同じ時期にやっていたではないか」

「……ああ、そう言えばそうだった。あんまりな記憶だから、つい忘却の彼方に行つた  
ぜ」

彼が今でも各部活動を駆けずり回る原因となった、あの集会。

水色の髪をした少女の姿が脳裏に浮かび、懐かしく思いながらも出るのは乾いた笑い  
ばかり。

「しかし、懐かしいと言えば……セシリアには驚いたなあ……」

「そうだな……突然学園を辞めたかと思えば、プロテニスプレイヤーに転向するとは……」

「あ、この前あたし試合見に行ったわよ？　なんか荷電粒子砲みたいな威力のボール打ってたわ」

2年が上がって同じクラスとなった鈴が、話に加わる。

ついでに、ちゃっかり近くに居たシャルロットとラウラも。

「今度、ウインブルドンに出るらしいよね。その時はみんなで応援に行こうよ」

「うむ。違う道に進んだとは言え、仲間の晴れ舞台だ」

そんな調子で、和気藹々と会話する5人。

やがて壇上の端に簪が上がリ、マイクを手に集会を開始する。

『……それではこれより、全校集会を始めます……生徒会長』

マイクを受け取って、壇上の中央に立つ今期の生徒会長、ヴィルヘルミナ・カルメル。

51本という規格外の数のワイヤーブレードを自在に操り、『万条の仕手』の異名を取った女傑。

『ある理由』で国家代表を引退したスペイン元代表に代わって、先日国家代表へと収まった世界有数の使い手である。

その静やかな佇まいに、あちこちでため息が出る。

そして、それは一夏も同様で。

「やっぱ綺麗だよなーカルメルさん……デートの誘い、また断られたけど」

そう。千冬が死力を尽くして性格矯正を行った結果、なんとかの朴・念・神は人並みの甲斐性を手に入れていたのだ。

フラグブレイカーと呼ばれた織斑一夏は死んだ。今の彼は、言うなればちよつぴりプレイボーイな一夏君であった。

ちなみにそんな彼の眩きに、4人は内心で苛立ちを覚えるも。

寛容さが重要であるとの『ラブ師匠』の言葉を遵守し、手を上げることは堪えていた。

「一夏！ デートなら私が付き合ってやるぞ！」

「箒はこの前映画に行ったでしょ!？」 次はあたしよ!」

「え、確か次は僕だった筈だけど」

「嫁よ、私は秋季限定のまろんパフェが食べたいぞ。連れて行ってくれ」

文面としては大して変わっていない気もするが、暴力が排されただけ大進歩である。そうこう言い合いをしている内に、壇上のヴィルヘルミナが口を開いた。

『生徒皆様、おはようなのであります。今朝は今月中に行われる、学園祭についての連絡事項の通達の為に集まって貰ったのでありますが……この場を借りて、先ずは新任教師と復学生の紹介をするのであります』

彼女の言に、生徒達が俄かにざわめく。

『では、まず新任の先生紹介を』

ヴィルヘルミナがそう言うと、壇上の袖から一人の女性が姿を現した。薄い紫色の髪と瞳をした、どこか扇情的な印象のある美女。

瞬間、ホール内のそこかしこで驚きの声上がる。

彼女はマイクを受け取ると、生徒達に向けて大きく手を振った。

『ハイ！ ブエナス・タルデス！ こんにちは！ 私はミー、皆よろしくね！』

第3回モンド・グロツソ、格闘部門及び総合部門優勝者。

即ち、世界で3人目の『プリユンヒルデ』が、そこには居た。

「きやああああああああつ!!! ミー様よ、世界最強の斧使い!!」

「スペイン代表を突然引退したって聞いたけど、まさかこんなところでお会いできるなんて夢みたい!!」

「ミー様あああつ!! 私をネブレイドしてえええつ!!!」

ホール内を包むソニックブーム。

けれどこんなこともあるかと、窓には強化ガラスが使われているので割れることは無い。

周囲の悲鳴にも似た歓声に、しかしミーは動じた風もなく手を振って応えている。

が、よく見れば耳栓をしていた。

「フフ、楽しそうな所ね。ねえ、ヴィル？」

「引継ぎを全部私に押し付けた挙句、学園で教師をするだなんてとんだサプライズだったのであります。私がどれだけ手続きに苦労したのか、分かっているのでありますか？」

「怒らないですよ。少しは悪いと思ってるんだから」

妖艶な笑みを向けるミーに、ヴィルヘルミナは小さく嘆息する。

そして興奮冷めやらぬ生徒達を諫めると、言葉が続けた。

『……ミー先生には、主に2年生の授業を担当して頂くのであります。続いて、復学生を『4名』紹介するであります』

壇上に上がる、3人の生徒。

彼女らの顔触れもまた、ISに携わる者なら誰でも知っているそうそうたる面々だった。

『四楓院夜一じゃ』

『フェイト・テストロッサです』

『更識楯無よ、2・3年生の皆は久し振りね』

日本国家格闘部門代表にして、第3回モンド・グロッソ格闘部門決勝でミーに敗れ惜しくも準優勝となった、四楓院夜一。

母国イタリアで代表候補生という過程をすっ飛ばし、直接国家機動部門代表に収まりモンド・グロッソでも3位と好成績を弾き出した天才、フェイト・テストロッサ。

大ロシアの代表、準決勝でミーと互角の戦いを繰り広げ事実上の準優勝者と名高い更識楯無。

そして。最後に。

「ほら、隆景！ 貴方も」

「……………」

壇上に上がることを渋っていたその男子生徒に、楯無が手を差し出す。

やがて観念したのか、彼は深く嘆息して彼女の手を取った。

世界で2番目の男性I S適性者。

ロシア国家機動部門代表。

大手メルマガ『隆景恋愛指南虎の巻』発行者、HN『毛利家の三男』。

対暗部用暗部組織『更識家』現当主婚約者。

そして、第3回モンド・グロツソ、機動部門『ヴァルキリー』。

彼の名は。

『……藤堂、隆景』

歓声で、強化ガラスが割れた。



## 小話集 その4

## 『ゲーム化』

「……なんだこれ」

ある日のこと。

買い物から戻った隆景は、福引で貰った景品であるゲームソフトを手にそう呟いた。パソコンで『打鉄式式』の調整作業をしていた簪が、振り返って彼の持つパッケージを見る。

「あ……それ、『インフィニット・フォーチュン2』……う？」  
「知ってる……のか？」

こくりと頷き、隆景へと歩み寄る簪。

「これ、性別は逆だが……織斑達、だよな」

「うん……前作から、引き続きの主人公……折野壺佳ちゃん……」  
「……前作」

続編なのかこれ。

そう言えばタイトルの『2』って入ってるし。

いろいろと突っ込みたいことの多い隆景であったが、真に気がかりなのはそこではない。

彼はパッケージの中央で『折野壺佳』とやらと背中合わせで立っている、もう一人の女子キャラを指差した。

「……………簪」

「……………今作から追加された、もう一人の主人公。名前は『東城貴恵』とうじょうたかえ」

黒髪をミディアムカットにした、青い色眼鏡をかけた表情に欠ける少女。

どこからどう見ても、隆景がモデルである。

隆景から気まずそうに目を逸らした簪が、説明を続けた。

「選択した主人公によって、攻略キャラが違うの。貴恵ちゃんの場合は、IF学園生徒会長の『鷹島劍也』たかしまけんやとその弟の『鷹島櫛人』くしと、あとは担任の佐藤先生にライバルキャラの

『ファイブ・バルバロッサ』——」

「もう……………いい……………頭が、痛くなってきた……………」

知らぬ間にゲーム化していた事実には、頭痛を感じる隆景。

ソフトは簪が欲しいと言うので、あげた。

ちなみに。

「どうしてバッドエンドになるのよ!? 何で劍也君こんなにガード固いの、私だったら

隆景君に擦り寄ってこられたら8秒で墮ちる自信あるのに!!」

コントローラー片手にどうにか自分の分身キャラと主人公をくつつけようと苦心する、楯無の姿があつたとか。

どうでもいい攻略情報として、鷹島剣也は弟の櫛人と平行してイベントを進めなければ、攻略できなかつたりする。

まだ、隆景と楯無が思いを通じ合わせる前の話であつた。

『兎の事情』

篠ノ之束は、不愉快であつた。

自分が意図的にそうした織斑一夏以外、決して男性には動かせない筈のI S。

それを操るばかりか、瞬く間に国家代表候補生となり世の脚光を浴び始めた男の存在が。

「むく、なんなのかなコイツ！ 東さんの知らないところでナマイキな！」

気に入らないからクシヤツてしまおう。

そう考えた彼女は、早速その男……藤堂隆景についてデータを集め始める。だが、とある項目を見て。

世に天災と称されたその科学者は、目を見開いた。

「……………あ……………あ……………アミエーラ、社……………!?!」

彼女の背に冷や汗が走る。

そして恐る恐ると言った仕草で、更に数度キーボードを叩く。

ディスプレイに映ったのは、彼の専用機を作成している技術者の名前と顔写真。その顔を見た瞬間、東はいよいよ顔色が蒼白となった。

「殺生院……キアラ……!!」

自分など及びもつかない本物の狂人。

かつて一度だけ出会ったその時、篠ノ之東はひとつの決意をしている。

どのような形であれ、絶対に彼女には関わらないと。

すぐさま藤堂隆景に関するデータを全て閉じ、彼を害することを諦めた。

そして、膝を抱えて小さく震え始める。

かくして、本人にも全く関わり無いところで、首の皮一枚繋がっていた隆景であった。

『メロンパン』

炎髪印のメロンパン。

それは某炎髪灼眼の討ち手監修の下、世界に誇れる日本人の日本人による日本人の為のパン『ジャぱん』を作ることを夢見る少年が作り上げた、至高のメロンパンである。商品化はされているものの一切の市販はされておらず、入手には独自のルートが必要だった。

「あげるのであります」

「……ありが、とう」

1日に僅か9つしか作られない、世界最強のメロンパン。

内ひとつは、ある少女がある少年の滅多に見られない微笑みを見る為に用いられているとか。

「……………（もつふもつふ、かりかり）」

「おいしいでありますか？」

「(・)く、(・)く(・)く(・)く(・)く」

「……………それは、よかったですであります」

無口で偏食家の野良猫にも大好評な、炎髪印のメロンパン。  
定価30000円。